
名探偵コナン番外編 工藤コナンの事件簿 パーティー会場殺人事件

K I D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン番外編 工藤コナンの事件簿 パーティー会場殺人事件

【Nコード】

N4018K

【作者名】

KID

【あらすじ】

コナンが新一に戻ってから、10年……。新一と蘭の間には、たった一人のかけがえない息子、コナンが生まれた。そんなある日「僕はもう立派な探偵だよ！」と強がっているコナンを見た新一は、昔の仲間を集ったパーティーを開き、そこでちよつとしたゲームを結構。内容は、パーティーの参加者の一人が誘拐され、あちらこちらに散りばめられた証拠を見つけ出し、消えた参加者と誘拐犯を見つけ出す、という単純なもの……。ところがそのゲームの途

中、その消えた参加者が、何者かによって殺害されてしまった！
すぐにただのゲームどころではないと感じた新一は、容疑者全員を
その場に集めたが、その容疑者達はなんと、黒の組織壊滅に協力し
てくれたお馴染みのメンバー達……。この中に必ず犯人はいる！
！ そう感じたコナンは、新たな仲間達と共に犯人捜しを行うが・
・。 短編『僕の名前のヒミツ』の工藤コナンが主役です。その他に
も、お馴染みのキャラクターから生まれた子供達などが登場します。
「コナン（新一）が主役じゃないと嫌！」もしくは「コナンのメイ
ンキャラクターの誰かが犯人、殺害されるのは嫌！」という方は b
ack してください。

登場人物紹介（前書き）

どーも KIDDです!!

本編は『ヴェスパーニア』と一緒に、5日置きに投稿しますので、よろしく願いしまーす！

（時々パソコンの不調で遅れる事もあるかと思いますので、その時にはご了承ください）

登場人物紹介

登場人物紹介

・工藤新一（江戸川コナン）
『平成のシャーロック・ホームズ』と呼ばれている、迷宮なしの名探偵。現在は元の工藤新一に戻り、蘭とコナンの3人暮らし。

・工藤蘭（毛利蘭）
新一の幼馴染みでもあり、現在は新一と婚約し、息子のコナンと一緒に生活している。空手の関東大会優勝保持者。

・工藤コナン
新一と蘭の間に生まれた子供で、現在帝丹小学校1年生。探偵や推理小説モノが好きなのは父親似、体育が得意なのは母親似と、両方の血を継いでいる。同じクラスの桜井連と仲がいい。

・桜井連（さくらい れん）
コナンと同じクラスに通う帝丹小学校1年生で、コナンとは幼馴染み。コナンとはいつも一緒にいて、仲がいい。

・毛利小五郎
蘭の父親でもあり、コナンの祖父。元『眠りの小五郎』と呼ばれた人間だが、現在は眠らずに探偵を続けている。現在は無事、英理と一緒に生活中。

・毛利英理（妃英理）
蘭の母親で、コナンの祖母。つい最近まで小五郎と別居していたが、

現在は一緒に生活している。弁護士。

・工藤優作

新一の父親でもあり、コナンの父方の祖父。推理小説家として、かなり有名。新一がコナンだった時は、度を超えるようなイタズラで、コナンをからかった事がある。

・工藤有希子

新一の母親で、コナンの父方の祖母。元女優の為、やや『おばあちゃん』と呼ばれるのを嫌っている。現在は、コナンの面倒を見るのが大好き。

・服部平次

『西の高校生探偵』と呼ばれている名探偵。新一がコナンだった際、その正体を知っていた人間の一人。現在は幼馴染みの和葉と、その息子の平矢と一緒に暮らしている。剣道の名人。

・服部和葉（遠山和葉）

服部の幼馴染みで、今は服部と結婚して、息子の平矢と一緒に暮らしている。合気道が得意。

・服部平矢（はっとり へいや）

服部と和葉の間に生まれた子供で、父親譲りなのか曾祖父譲りなのか、肌が黒い。同い年のコナンと同じく、かなりの探偵好き。幼馴染みの宮城紅葉と仲がいい。

・宮城紅葉（みやしろ このは）

平矢と同じ小学校に通う幼馴染み。平矢と仲がいい。弓矢が得意。

・黒羽快斗（怪盗キッド）

天才的マジシャンで、元『月下の奇術師』とも呼ばれた大泥棒『怪盗キッド』。現在は罪を償い切り、幼馴染みの青子と結婚。息子の光夜と一緒に3人暮らし。性格上のせいかな、何故か服部と仲がいい。

・黒羽青子（中森青子）

快斗の幼馴染みで、現在は息子と一緒に生活中。最初は父親の仕事の関係で、怪盗キッドを嫌っていたのだが、現在は快斗がキッドであつた事を知っており、以前ほど嫌わなくなつた。

・黒羽光夜（くるば こうや）

快斗と青子の間に生まれた一人息子。父親と同じくマジックの名手でもあり、声色を真似る事が出来る。また、父親と違って魚が大好物。その為、よく快斗ともめる事が多い。同じ小学校に通う直子と仲がいい。

・村咲直子（むらさき なおこ）

光夜の幼馴染みで、同じクラス。光夜と仲がいい。

・阿笠博士

元新一の隣の家に住んでいる発明家。よく新一がコナンだった際、色々な発明品を作ってくれた。現在は、コナンに発明品のほとんどをあげている。相変わらず、子供達とは仲がよく、志保（灰原）と一緒にくらしている。

・小嶋元太

元少年探偵団団長で、現在は帝丹高校2年生。自分達で学校に『探偵サークル』と呼ばれる部活を開いている。新一とは相変わらずの関係を保っている。うな重が大好物。

・円谷光彦

元少年探偵団のメンバーで、現在は帝丹高校2年生で、元太や歩美達と同じクラス。『探偵サークル』のメンバーの中では、灰原の次に頭が切れる。新一とは仲がいいが、時々新一がギョツとするような発言をする事もある。歩美と灰原が好き。

・吉田歩美

元少年探偵団のメンバーで、現在は『探偵サークル』のメンバーの一人。高校ではかなりモテる性格。今はコナンだった新一は諦め、光彦や元太に意識を向けている。

・灰原哀（宮野志保）

元少年探偵団のメンバーでもあり、新一と同じく体が縮んだ人物。本人の希望で元の姿には戻らず、歩美達と共に高校2年生として生活している。現在『探偵サークル』に所属。

・鈴木園子

蘭の幼馴染みで、現在は京極真と一緒に生活している。鈴木財閥のお嬢様。

登場人物紹介（後書き）

どーも K I D でーす!!

新連載、始める事になりましたーっ!!

（話自体は5カ月くらい前から出来ていました・・・）

その前に、新キャラクターの名前の解説をしたいと思います。

『工藤コナン』

大体説明しなくとも分かると思います・・・。

最も「どうして『コナン』にしたのか」は、次の話で明らかになるので楽しみに〜

『桜井連』

なんとなく『ラン』と似た感じの名前が欲しくて、それで決めました。

（候補で『リン』とかもあったんですが、自分の中でボツ!）

名字の『桜井』は、私の好きな『桜』を入れたかっただけです・・・。

（でもコナンの話自体、なんだか『桜』が色々と入っているのが多いですよ・・・）

『服部平矢』

一番悩んで付けた名前！

というのも『平蔵』『平次』と続いているから、どうしても『平』の字が入れなくて……。

それで何となく言いやすいような『3文字』って決めてみたら、ホントにこれくらいしかないんですよ！
いい感じの名前……。

それで『これでいいか』と思ったら、快斗の息子と最後の文字が被るし……(笑)

『宮城紅葉』

名字は基本的に適当……。

(何となく「京都」っぽく……)

そんで名前は、唯一の当て字です！

まあ『和葉』みたいに、何となく『葉』の字を入れる名前にしたかったんだと思います。

(あんま覚えとらん……(汗))

『黒羽光夜』

こちらは『平矢』の次はかなり考えた方です。

何となくキッドのイメージのある名前にしたかったので……。

最初は『月』の字を入れたかったんですけど『月』って「つき」「づき」「げつ」「げつ」「くらいしかないので、どうにも使いずらく・

・・。

(かと言って当て字にするわけにも……。デスートと被るし・
)

それで『光る夜』という意味の『光夜』にしました。
何となくキツドラしい……？

『村咲直子』

これは『まじつく快斗』の規則に基づいて考えた名前です。

『まじつく快斗』では、

・名前、または名字に「色」が入る。
・女性は名前の最後が「子」になっている。

なので『村咲』はそのままの読みで『むらさき』で色。

『直子』は……、なんで「ナオ」にしたんだろ……？
特に意味はありません……(苦笑)

(決めた後で「なんか恐い名前になっちゃったかな」と思いました。
……)

と、まあ、こんな感じですよ！

ちなみにですが、こちらの小説は『ヴェスパニア』の話が伸ばされ
なければ『ヴェスパニア』が先に終わると思います。

それでは

0・コナン

2004年2月3日 午前3時12分 米花中央病院。

緑色ライトによって照らされた薄暗い廊下の通路に、心配そうに顔を下に向けている青年が居た。

彼の様子からしてみれば、おそらく一睡もしていないまま世が明けた感じである。

青年の横にある扉は、今も閉じたまま……。

その上の方で光る赤いランプには『分娩中』と映されている。

新一「……………まだか……………」

最愛の蘭ひとがこの中に入ってから、かれこれ4時間以上……。
どう考えても遅すぎる。

まあ中に入った時は何となく、どうもそれらしい兆候がある感じがしたからだったので、本番よりは少し早すぎたのかもしれないが……。

バタバタ……………バタバタ……………

ふつと、新一の後ろに続いている通路の曲がり角から、徐々にこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

足音の数から言って二人……………。

先ほど電話を掛けた相手だろうと予測していたので、今更驚きもしなかった。

そうこう思っている内に、足音の張本人がこちらに姿を見せる。

快斗「新一！」

平次「工藤！」

慌ててやって来たのは『西の高校生』と呼ばれている名探偵、服部平次と、過去に『月下の奇術師』として名を馳せていた怪盗キッドこと、黒羽快斗だった。

ちなみに、この二人の婚約者二人は、今分婉室の中だ。

二人が来るのに遅れたのは、服部は事件捜査のため……。快斗はマジックショーの最中だったからである。

平次「まだなんか？ 毛利の姉ちゃん……」

新一「見りゃ分かるだろ……。ったく、かれこれ4時間以上経つのに、何の変化もない……」

快斗「そんなに心配すんなって……。俺や平次の時も遅かったんだから！」

平次「そやそや！ そないに心配することないって……」

と、半分心配し過ぎて倒れそうになっている男を安心させようとする二人だったが、その二人の顔も、かなりオロオロしている。そんな顔を見ていたら、こっちにも余計に伝染してきそうだ。

新一「だったらもつと、安心し切った顔で言ってくれよ……」

平次・快斗「それは御尤も……」

二人も新一の発言に、頭を下げる。

彼らとこうして一緒になったのは、今から3年前……。

当時『江戸川コナン』だった新一は、自分の体を縮めた黒ずくめの組織を倒す為、この三人と手を組んだ。

いや……。本当はもつと多くの人達と協力して組織を倒した。

服部、キッド、灰原、博士、小五郎に目暮警部達、FBIとそれから……。挙げていけばキリがない。

そしてその人達の協力もあって、組織を壊滅させることが出来た。仲間は軽い怪我をしたくらいで、別に死にやしなかったし、キッドの方の事情も、アジトの中で見つかった宝石のおかげで、カタが付いた。

そして何より、薬の成分が手に入った……。それさえ調べれば、すぐに元の体に戻る。

自分が探し求めていたものが手に入っただけでも、新一には嬉しかった。

だが、あの組織壊滅はいいことばかりだったわけではない。壊滅させたほぼ直後に、快斗は警察に連行……。

その他には、灰原が警察の事情聴衆の為、その場で連れて行かれた。まあ、灰原は一日で帰ってきたのだけれど……。

そして一番の心残りは、ジンを自殺させてしまったことだ。

こんな思いをするのは、ピアノソナタで十分だったのに……。あと一步のところ、銃で米神を打たせてしまった……。

そんな色々な体験や思いをしながら、新一は『コナン』という殻を捨て、今ここにいます。

自分が『コナン』だった事を知らない人間は、ここにはもう誰もいない……。

全部、皆に話した。

そして現在、新一はずつと心に決めていた幼馴染みの蘭と結婚して、早1年が経とうとしていた丁度その頃。
そう、丁度今だ。

蘭が大事な時を、今まさに迎えようとしていたというわけである。

新一「遅いよな・・・」

平次「平気やて！ そないに心配せんでも、大丈夫や」

快斗「そっだよ、新一。多分あと数分すれば・・・」

そう言っていた、矢先だった。

うぎゃー・・・うぎゃー・・・

うぎゃー・・・うぎゃー・・・

新一・平次「あつ・・・！」

快斗「・・・数分も・・・経たなかつたな・・・」

平次「お前・・・！ こういうタイミングでへんなボケ言うなや！」
すぐさま平次が快斗を叱ったが、新一には一切聞こえてはいなかつた。

確かに聞こえた・・・。

子供の産声が・・・。

今、分娩室から・・・。

やがて赤いライトが消えると、中から女性看護婦が出てきた。
その後ろには園子の姿もある。

新一「すみません！ 子供はっ！？ それから蘭は！？ 無事なんですか！？」

看護婦「ご安心ください。お子様もお母様も元気ですよ。赤ちゃんは3200グラムの男の子です」

新一「そうですか……。ありがとうございます！」

新一はそう言うと、頭を下げた。

その後ろから、男二人が突っ突く。

平次「やったやないかーっ！ 工藤！！ ちゅうか三人揃って、子供男やんけ」

快斗「だよな……。あれ？ こういう時は泣いていいんじゃないの？ 名探偵」

新一「うるさいな！。お前に言われたかないよ！」

快斗「どういう意味？」

新一「そのまんまの意味だ！！」

と言いながら、新一は笑ってもちたし、徐々に目から透き通った涙が零れ出していた。

そんな男共を見ながら、園子は腕を伸ばし、新一を病室内に引っ張る。

園子「ちょっとお、あんたらいつまでそこでふざけてんのっ！ 蘭とその子に会いに行くのが、先じゃない？」

新一「あつ……。」

それを聞くや否や、まるで鉄砲の様に奥へと入っていく新一。

一方の平次と快斗は、二人つきりにさせようとそのまま動かなかった。

奥へと進んでいくと、柔らかい感じの電気が点いている部屋が見えてきた。

その中から、女性達の笑い声が聞こえてくる。

恐る恐る中へ入っていくと、青子と和葉の姿が目に見え込んできた。

そしてその二人の真ん中には蘭……。

その蘭の手には、白い布に包まれた子供の頭が、本の少しだけ見えた。

その姿に、新一は一瞬「あ……。」と、呟くような声を漏らした。

和葉「蘭ちゃん……。あたしら、外に出とるね」

青子「新一君と二人の方がいいでしょ？」

蘭「えっ……。あ、うん……。ありがとう」

和葉「ええって　ええって」

そう言つて、和葉と青子は新一の横を通り過ぎた。

それとほぼ同時に、新一も奥の方へと入っていく。

新一「蘭……。よく頑張ったな……」

蘭「……。うん。ごめんね。心配したでしょ？　中々部屋から出て

こないから……」

新一「ちよつとな……」

そう言いながら、新一は子供の前に座り込んだ。

生まれたばかりの子供は、まだ顔が赤かったが、寝顔から言つてかなり元気そうだ。

実際に子供の顔を見て、新一もホッとすする。

新一「鼻の形……。蘭にそっくりだ」

蘭「それ言つたら、この子起きた時、目が新一と似てたよ？」

新一「えっ？　本当か!？」

蘭「うん」

それを聞いて顔を覗き込むが、残念ながら寝ている為目を閉じてし

まっている。

新一「起きてくれないかなー・・・」
蘭「ダメだよ！ 寝たばかりなんだし、私より疲れてるんだから」
二人の明るい会話は、朝まで続いた。

そして日が完全に昇った時間帯。

その頃には平次や快斗だけでなく、新一の両親と蘭の両親が病院に到着した。

そうなるのと周りはより一層騒がしくなる。

メンバー全員『かわいいー！』

皆が子供の顔を見ながら、声を揃えて言った。

意外な事に、この子は周りから一気に大声で言われてもピクリともしない。

どちらかと言うと、慣れていると言った感じだ。

有希子「あら。驚かないのね」

小五郎「そういうところは蘭にそっくりだな。オメーもあんまり反応しなかったんだぜ？」

蘭「そ、そうなの？」

小五郎の意外な話に驚く蘭。

という事は何か・・・。

この子は度胸が据わってるってことか・・・？

平次「そやけど、ホンマに目元が工藤にそっくりや」

和葉「蘭ちゃん一目で『似てる!』って、氣い付いたんやて」

蘭「うん。結構特徴あるからね。新一の目って……」

新一「……どんな目?」

蘭「(新一を指差しながら)こんな目」

快斗「ところで……この子『名前』どうすんの?」

その快斗の一言で、周りは一瞬にして『シーン……』となった。

その周りの反応の方がかなり不安に感じたらしく、子供がキョロキョロと周りを見渡す。

新一「そうだ……。そう言えば候補……。考えてなかったな……」

平次「何しとつたんやねん? 子供が腹におる間……」

新一「見てから決める事にしてたんだよ。予め決めておくんじゃなく……」

それから皆で子供の名前を決める事になったのだが、中々候補らしいものが挙がってこない。

一番最初に口を開いたのは、昨日でこの子の祖母になった有希子だ。

有希子「じゃあ『新一』っていうのはどう? 『新しい』の『新』に、漢数字の『二』で」

新一「却下! それって俺の『一』が『二』になっただけだろ?」

有希子「いいじゃない、別に」

新一「とにかくボツだ! ボツ!」

と、新一は両手で大きなバツを作って言う。

英理「それなら『五郎』はどう?」

小五郎「ああつ!? それ、俺の『小五郎』の『小』を取っただけだろうが!」

英理「あなたよりは偉大だから『小』がいらないって意味よ!」

小五郎「……………」

快斗「でもそれ……、子供が大きくなってから言えますか？ 名前の由来……」

英理・小五郎「……………」

それもあるって、またもやボツ……。

ふっと、ずっと子供の指で遊んでいた青子が、蘭に問い掛けた。

青子「ねえ？ 蘭ちゃんは名前の候補ないの？」

蘭「えっ……？」

和葉「何かええ名前、思いつかへん？ 蘭ちゃん」

蘭「……………実は……、候補はあるんだけど……と、何やらかなり迷ったように、蘭はそう口にした。

それを聞いて、女子三人が顔を近付ける。

園子「なーんだ！ 蘭も候補あるんじゃない！」

和葉「せやったら、それでええんとちゃうの？ この子の産みの親なんやし」

蘭「でも……、新一が『いい』って言うてくれないと……」

青子「それで？ それで？ 何て名前なの？」

青子がそう尋ねると、蘭は一瞬腕の中の子供を見つめ、咳くように……。

でもハッキリと、その名前を口にした。

蘭「……………コナン……………」

新一や皆の顔に、驚いた表情が浮かぶ。

特に新一は、それを聞いた瞬間、顔が驚いた表情のまま、固まってしまっていた。

そんな新一を見て、蘭がさらに口を開く。

蘭「だってこの子・・・、新一がコナンになった日に生まれてきたんだよ？ こんな偶然なんて・・・、私ないと思って・・・。ダメ・・・、かな？」

そう・・・。

3年前の今日は、蘭と一緒にトロピカルランドにデートで行った日だ。

そこで自分は体を縮められて・・・。
コナンとして生きて・・・。

園子「いい名前じゃない、蘭」

和葉「うん。この子そっくりやし」

青子「新一君と同じ目してるもんね」

小五郎「俺が『眠りの小五郎』として、一躍有名になれたのも、ソイツのおかげ・・・」

英理「ええ。その眼鏡のボウヤのおかげで、色々と助けられた事もあつたし」

有希子「新一が小学生だった頃、よく思い出せたし」

優作「いつものイタズラで遊んでた事もあつたし」

平次「なんやその名前聞くと、えらい懐かしいモンやなあ」

快斗「俺なんか追いかけて回されてたぜ？ 『名探偵』って呼んでたソイツに・・・」

その名前を聞いて、皆の記憶に残る『コナン』が、次々と蘇ってくる・・・。

だが新一だけは、一向に口を開こうとはしなかった。

その姿を見て、蘭が声を掛ける。

蘭「新一……」

蘭の問いかけには答えず、新一はゆっくりと子供に近づいた。子供は不意に伸ばされた新一の人差し指を、小さな両手で掴まえる。そんな動作を繰り返していた。

しばらくして……。

新一「はあ……。やっと元に戻れたと思ったら、今度はコナンの面倒か……」

新一はそう言うと、蘭の顔を見つめながら笑みを浮かべて言う。

新一「いい名前じゃんか……。蘭」

蘭「……いいの？ 新一」

新一「ああ。聞いた時はビックリしたけどな……。俺も賛成だよ。蘭はそれを聞くと、明るい笑みを浮かべ『コナン』と名付けられた子供の顔を見つめる。」

蘭「あなたは今日から『コナン』だよ。よろしくね、コナン」

新一「でも、頼むから将来目を悪くしないでくれよ。本当にコナンになっちまうからな」

蘭「もお！ 新一ったら!!」

そんな二人を見ながら、この時コナンは初めて、笑ったのだった……。

1・息子の一言

あれから7年 午後10時43分 工藤邸。

新一「ただいま」

依頼のあった事件を無事片付け終わり、新一は結婚式を挙げた翌日から住み始めている、新しい我が家に帰った。

この家は、新一の両親が二人の結婚祝いの為に建てた家だ。見た目は差ほど、元新一の家とは変わらない。唯一変わった事と言ったら、日当たりが多少良くなっただろうか。。。

まあ昔の家ほど、薄暗くはない。

また、家を変えたとは言っても、新一達が暮らしているのは米花町。昔と同じ、米花町だ。

ちなみに前の家は、時々新一が捜査に一人で没頭する為に使っている為、建ったままになっている。

蘭「新一、おかえり。やつぱり遅くなったね」

新一「ああ・・・。まさか一日で5件も捜査の依頼が来るとは、思ってもみなかったよ。しかも、その内の1件は殺人だし・・・」

そうなのだ。

今日の依頼は、追跡捜査1件、行方不明捜査3件、殺人事件の依頼1件と、珍しく忙しい日だった。

一応全部、どうにか一日で片付けられたのだが・・・。

蘭「でも悪い気はしないんでしょう？ 謎解き好きなんだから」

家の柱に片手を付くようにして、赤とピンクのチェックのエプロンを掛けている蘭が、笑顔でそう尋ねた。

その問いかけに、新一は苦笑いで『まあ・・・、な・・・』と、答える。

蘭「すぐ何か作るね。何も食べてないんでしょう？」

新一「ああ、頼む」

そう言つて、新一がネクタイを外して、ソファーに座ろうとした瞬間、階段を勢いよく降りる足音が聞こえてきた。

それと同時に、父親似の蒼い瞳をした小さな少年が、ひょっこりと階段の手摺りから顔を覗かせる。

コナン「父さん、おかえり！」

新一「おっ！ コナン、ただいま。遅くなってごめんな」

朝早くに少し顔を合わせただけの息子に、新一はすぐに歩み寄り、頭を撫でた。

早いもので、あの時生まれたコナンはもう小学1年生。

現在7歳だ。

新一の言葉通り、コナンは目を悪くする事がなかったので眼鏡を掛けていない。

これで眼鏡を掛けたら、髪型の関係もあつて本当に『コナン』になつてしまう・・・。

コナンは新一の好みを継いでいるのか、はたまた新一がその職に就いているからなのか、親子揃って探偵好きだった。

新一が暗号を考えた日には、一日その暗号を解くのに没頭したり、

推理小説を新一と同じような手順で読むなど、正直言って似過ぎである。

だが、新一がコナンの中で一番に気に入っているのは『探偵が好き』という好みではなくて、自分によく似た、コナンの目だ。

成長するに連れて、コナンの目は自分の目と似てきているように感じる。

そしてそれを感じる旅に『ああ……。自分の息子なんだよな』と、日々実感するのだ。

その蒼い瞳のコナンが、何かを欲しがるように新一を見つめる。

その瞳を見て、新一が思い出したように、鞆の中からあるモノを取り出した。

取り出したのは、分厚い一冊の本……。

新一「ほら、お前が欲しがってた推理小説。これ待ってたんだろ？」

コナン「うん！ やった〜！！ ありがとう、父さん！」

そう言うや否や、コナンは自分よりも何十倍も大きなソファアームに座り、小説を読み始めた。

蘭「新一！ また買ったの？ つい最近買ったばかりじゃない？」

新一「いいんだよ。コナンが読み終わったら、俺が読むから」

蘭「もう……。二人揃って……」

まあそういうところが、逆に微笑ましく思っただけ……。

ふっと壁に掛けてある時計に視線を変えれば、既に時刻は11時過ぎ……。

いつの間にかこんな時間になっていた。

新一「えっ！？ もうこんなに遅いのか……。コナン、続きは明日にして、早く寝ろ」
コナン「ええ〜！！！」

言われて嫌がるのは当たり前……。でも、もう寝かすのが当たり前……。

新一は嫌がるコナンから小説を取り上げると、二階へと階段を上り、通路を通ってコナンの部屋へ……。そしてコナンを、ベッドに寝かしつけた。勿論、本人がすぐに寝るわけではない。

コナン「いいじゃん！ 僕、勉強出来るし……。ね、お願い！」
新一「ダメだ！！」

と言って、布団を体に掛けて、新一は電気を消そうとする。するとコナンは、新一に対して口を尖らせながら言った。

コナン「僕はもう立派な探偵だよ！！ 勉強だって全部出来るし……。父さんが追ってる事件なんか、僕はすぐに解決出来るもん！ いつまでも子供扱いしないでよ！」

一瞬新一は『おいおい……。どこから出てくるんだ？ この自信は』と、逆にそっちの方で驚き、目を丸くした。

まあ、読みたい小説を取り上げられて、強がりしたい気持ちは分からなくもない……。

現に自分は経験者なので……。

新一「俺が『コナン』だったらともかく、お前は正真正銘の子供だろ？」

コナン「それはそうだけど・・・」

新一「だったら威張るな。それにそんなに悠長に構えてると、後で学校の授業に付いていけなくなるぞ？」

コナン「えっ・・・？ 父さん、縮んだ時付いていけなかったの？」

新一「いや、皆が俺に付いて来れなかった・・・」

コナン「・・・」

その後は新一が『雑談はここまでにして早く寝ろ』と言い、コナンを寝かしつけ、部屋を出た。

ゆっくりと部屋の扉を閉め、一階に向かおうと通路を歩く。

ふっと、新一の脳裏に、コナンの先ほどの言葉が過った。

『僕はもう立派な探偵だよ！』

新一「立派な探偵・・・、ねえ・・・」

そう呟いた新一は、ある計画を頭に浮かべた。

それと一緒に、楽しみ気な笑みを零しながら・・・。

1・息子の一言（後書き）

どーも

予定があって早めに投稿した

KIDですー！！

（次は4月1日予定・・・）

コナン「なんか俺の息子・・・結構威張り散らしてんな・・・」
ルパン「まあ、父親がこれじゃ仕方ないって」

コナン「なんでアンタがここにいんだよ！！（しかも『父親がこれだから』って、どーいう意味！！）」

快斗「あゝあ・・・疲れた・・・」

KID

あっ！ 帰ってきた・・・。

アニメで二本撮りだって？（それとも片方は打ち合わせだけ？）

快斗「大体そんな感じ・・・もうキッドの衣装と学ランに着替えるのがハード過ぎ・・・」

コナン「それで、目にモノクル掛けたまんま？（しかも、それ左目だろ？）」

快斗「あゝっ！！」（今頃気付く、バ快斗一人・・・）

KID

相当お疲れみたいだな・・・。

でも、ちゃんと『まじっく快斗』こっちは見るからな！
その代わり、リアルタイムは無理だけど・・・。

快斗「えっ？ リアルタイムで見てよ！！」（どうせなら）「

K I D

だって！

こっち映画観に行くんだぜ？ （「難破船」公開初日）
あんたどっち見て欲しいの！？

快斗「えっ！？ えっくと・・・、う・・・え・・・、りよ、両方
！！」

コナン・ルパン「無理だろ・・・」

K I D

それでは失礼 ミ

2・新一の提案

翌朝 午前7時07分 工藤邸。

いつもと変わらない朝。

いつもと変わらない朝のテレビと新聞。

いつもと変わらない蘭の作った朝食。

そんないつもの朝に、いつもとは違う会話が入ってきた。

新一「なあ、蘭。コナン。今度・・・、昔の仲間集って、小さなパーティー開かないか？」

昨日の小説を返してもらい、朝食のトーストを受け取ったコナンは『?』と思い、その場で固まってしまった。

勿論、コナンの母親の蘭もだ。

新一「ほら、俺の父さんが別のパーティーで使ってた船。予定よりも使う期間が早めに終わっちゃってたから、たぶん・・・。その船、借りられるはずだしさ」

実は一週間前。

新一の父親でもある優作が、人気ミステリー小説『黒の男爵（ナイトバロン）』シリーズ完結を題したパーティーで、船を借りたのだ。

だが、そのパーティーの際に天候が荒れ、予定よりも早めに、パーティーは中断。

船は現在、ここから差ほど遠くない港に止められているのだ。

まあ・・・、それはいいとして・・・。

蘭「どうしたの、新一？ 急にそんな話し出して・・・」
『まるで園子みたい』と小声で言う蘭。

確かに、普段物静かな新一にしては、嫌に珍しい。

ましてや、パーティーでもなんでもあまり反応しないし、毎回連れてこられているので飽きているはずの新一が、だ。

こんな風に自分から言い出すのは、本当に初めての事である。

新一「えっ？ あっ・・・、いや・・・。ほら、せっかく船を借りたのに、なんかそのまま返すのもどうかと思っただし、他に使い道がないのもさあ・・・」

蘭「新一のお父さん・・・、いいって？」

新一「まだ聞いてねえけど・・・。貸してくれると思っぜ？ 他に使い道ないんだし・・・」

蘭「ふーん・・・」

それを聞きながら、蘭は何度も頷く。

そして、その話を聞いてはしゃいでいるのが約一名。

コナン「パーティー？ やった!!」

新一「おいおい・・・。まだ出来るかどうか分かんねえぞ？ 父さんに聞いてみないと・・・」

コナン「でもおじいちゃん、僕が頼んだら絶対に『OK!』って言うと思うけど」

新一「それは否定しない・・・」

優作がコナンに息子以上にベタ惚れなのは記憶済み。

息子の発言をマネする気は全くないが、絶対に『OK!』と言っただ

ろう。

ちなみに、コナンはパーティーに行った事がないわけではない。
これまで過去の5回以上は行っている。

にも関わらずパーティーが好きなのは、母親である蘭の血を継いで
いるから……。

本当に『パーティー』と聞いたらうるさいの何のって……。

蘭「ところで……。昔の仲間って、誰を誘うの？」

蘭がそう問い掛けると、新一が顎に手を当てながら、宙を仰ぐ。

新一「おっちゃん達とか……。服部や快斗達とか……」

蘭「それってあの時の……」

あの時……。

それは、黒の組織壊滅の際、一緒に協力し、手伝ってくれたメンバ
ーの事だ。

今新一の口から出てきた名前の人物は、皆その時の協力者である。

新一「ああ……。ほら、互いに結婚して子供が生まれてから、ほ
とんど電話だけだったからな……。たまには皆と顔を合わせるの
も、いいかなあ〜って思ってたさ」

蘭「それもそうだね……。うん、私も賛成。なんか楽しそう！
船も結構いい船だったみたいだし」

優作のパーティーでその船に乗っていた蘭は、あの日の船から見え

る景色を思い出しながら、笑顔を浮かべていた。

実は新一・蘭・コナンは、優作の黒の男爵パーティーに参加しており、そこで船に乗っていたのである。

確かに、優作が借りた船と言うのもあって、設備も機能もよかった。見た目やデザインなども申し分ない。

ふつとよくよく考えてみれば、あの黒の男爵パーティーからまだ1週間しか経っていないのだ。

にも関わらず、同じ船のパーティーと言えども、それを聞いてはしやぎまくるコナンって……。

コナン「だったら、おじいちゃんとおばあちゃん両方呼んだら？」

新一「それは無理だ、コナン。父さん、このところ忙しくて、世界中飛び回ってるらしいからな……。でも、夏休みに遊びに行くから、今回はいいんじゃないかねえか？」

コナン「うん、そうだね……」

コナンは少し残念そうだったが『まあ、夏に会えるのだからいいか』と言った感じで、すぐに笑顔に戻った。

コナン「ねえ？ いつパーティーやるの？」

新一「そうだな……。今日が月曜日だから……。土曜日にもできるか」

コナン「土曜日？ 分かった！ 楽しみ」

新一「お前……。本当にパーティー好きだな……。そんなんで土曜日に熱出すなよ？ ましてやまだ5日も先なのに……。……つて……。おい！ 蘭！！ 今、何時だ！？」

ハツと気が付いた新一が、蘭に時計の時刻を尋ねる。
椅子に座ったままトーストを食べていた蘭は、首だけを向けて時計を見る。

蘭「7時28分……。つて、7時28分!? コナン! 新一!

学校!!! 依頼!!!」

コナン「ヤベっ!!!」

新一「遅刻する……。今日の依頼場所江古田だろ!? ああ、あつ電車行っちゃうよ! じゃあな、蘭! 話の続きは後で! 行つてくる!!!」

コナン「父さん待つてよ! 僕も一緒に行く! えっ!と……。行つてきます!!!」

蘭「行つてらーっしやい! 気をつけてねー!」

蘭の声を聞きながら、コナンと新一は勢い良く、部屋を出て行ったのだった……。

3 パーティーの誘い（コナン編）

パーティー5日前 午後7時32分 帝丹小学校の通学路。

どうにか学校が見えるところにまで辿り着き、そこでコナンは『ハアー』と、息を吐いた。

ここまでくれば、遅刻を心配する必要はない。

コナン「間に合った・・・」

そう疲れたように呟きながらも、コナンは5日後のパーティーが、頭の中から離れなかった。

『5日後』というのは、少し急過ぎるが、時期も時期で、色々予定が空いている頃だ。

参加者は結構いるだろう・・・。

父親である新一が誘いそうなメンツを挙げただけでも、知っているので7人くらいいる。

その上、母親の蘭の知り合いも入れたら、結構な数になるだろうか・・・。

そしてそのメンバーのほとんどが、自分と知り合いの人間、という事がまたいい。

祖父でもある優作のパーティーは、ほとんど知らない人達ばかりで、話し相手という面ではイマイチだった。

今回はそういう心配は一切ない。

コナン（誰が来るんだろう・・・）

そんな事を思いながら、コナンが道を歩いていた瞬間。

ブンッ！

コナン「おわっ！」

突然何かコナンの真横を掠めた。

正確に言えば、コナンが咄嗟に避けたから、前髪を掠める程度で済んだのだが……。

コナン（な、何だ！ 急に……。ん？ 上履き袋……。？）

それは事もあるうちに、自分の上履き袋である。

そしてそれを持っていたのは……。

？「よそ見しているとぶつかるとよ？ 何浮かれてんの？」

コナン「蓮！ 脅かすなよ！ ビックリするじゃないか!!」

そこにいたのは、コナンと同じクラスの同級生、桜井蓮だった。

蓮の父親は一刑事でもあり、高木刑事の後輩……。

さらに新一とは、大学時代である事件の捜査で互いに知り合いになり、今でも時々、一緒に殺人事件の捜査をしている。

蓮とコナンが生まれてからも、だ……。

そんな偶然が重なって、蓮とコナンは保育園の時から今に掛けて、ずっと一緒だった。

つまり蓮は、コナンの『幼馴染み』というわけである。

コナン「大体……。なんで蓮が、俺の上履き袋を……」

蓮「途中でコナンのお母さんに会ったの！ 『慌てて家飛び出してって忘れたから、届けてくれない？』ってね」

コナン「あ、っ！！」

それを聞いて口を開けるコナン。

そうだったー！！

テーブルの上に置いてあったのに、持って行き忘れたんだー！！

コナン「サ、サンキュー……」

蓮「もう、今度から忘れないでよ」

蓮は念を押すようにそう言うと、コナンに上履き袋を手渡した。

危なく今日1日、緑色のスリッパで過ごす事になるところである。

蓮は性格上面倒見はいいが、コナンからして見たら、時々『お姉さん風』でもある。

例で言ったら、服部と和葉のような……。

蓮「ところで……。さっきも何か笑ってたけど、何かいい事でもあったの？」

コナン「えっ？ ああ……。ちょっと……」

『言ってもいいだろう』と思い、コナンが口を開いて蓮に説明する。

コナン「実は今週の土曜日に、泊りがけの船旅パーティーをする事になっててさ。父さんの案なんだけど……」

蓮「船旅っ！？ 船、どうするの？」

コナン「おじいちゃんが元々借りてた船を使おうってなってる……おじいちゃんの事だから、絶対に『OK』出してくれるだろうけど」

蓮「それで何処行くの？」

コナン「まだそこまでは……。でも、きっと海がキレイなところだと思っぜ？ 大きい船借りるワケだし、狭いビーチとかじゃないだろ」

と思いはいしたが、一瞬コナンの脳裏に『でも父さん……。そういうの全然読めないからなー』と、不安も過った。
まあ、家に帰ってから、母さんと一緒に話し合えばいいのだが……。

蓮「船旅かー……。いいなー、コナン……」

コナン「……。……」

蓮は青空の広がる空を見上げながら、コナンと同じ速度で足を進ませる。

気がつけば、二人とももう既に校庭を歩いていた。

コナンはもう一度、隣にいる蓮の顔を見つめる。

蓮はまだ、さぞ羨ましそうに空を見つめていた。

父親が刑事とはいえ、蓮にはそういうチャンスはあまり巡ってこないだろう……。

そう言えば、蓮はパーティーに行った事がないんだった。
随分前にそう漏らしていた気がする。

確か、自分が『優作のパーティーに行く』と、言った時に……。

蓮「……。……」

コナン「……。……」

蓮「……。……」

コナン「……。何なら……。一緒に行くか？」

コナンの思いがけない発言に、蓮は驚いた顔で、こちらに視線を向けた。

蓮「えっ……。？　でも……」

コナン「大丈夫だよ！ 父さんと母さんが参加者選ぶんだったら、こっちが選んでも文句は言わねえよ。それに、蓮の父さん、俺の父さんと仲いいし……」

蓮「本当に？ いいの？」

蓮は一気に顔を明るくすると、コナンの顔に顔を近づけて再度尋ねる。

その姿に、コナンは顔を紅くしながら、数回頷いた。

コナン「う……うん。あつ！ でも、お前の父さんと一回相談してからだぜ？」

蓮「そんな事、言われなくても分かってるわよ。あれ？ 顔紅いけど、熱あるの？」

コナン「い、い……いや……！ 汗かいたせいだろ？ 今日暑いし……」

蓮「そう？ ふーん……。あつ、ねえ？」

コナン「ん？」

蓮「コナンのお父さんが誘うって事は、あの4人も来るかな……」

あの4人とは、新一の友人の子供二人と、その二人の幼馴染みの事だ。

今まで何度も会った事があるか、このところはメッキリ会えなかった。

互いに忙しすぎて、会う機会が会わなくなってきたのである。

来るのかどうかを考えてみたら……。

コナン「多分……、来ると思うぜ？ 元々父さんが誘いたい友人が、あの二人の親だし。それで残りの二人は……、付いて来るんじゃないかなー？」

蓮「早く会いたいなー……。去年の夏休みの始め以来だもんね」

コナン（そこまで覚えてないけど……。そうだったかな……。？）
蓮「コナン、忘れてない？」

コナン「覚えてるよ！（嘘）」

コナンが声を上げて、隣で歩いてる蓮に言ったが、いつの間にか蓮は、先に校舎の中に入っていた。
全く……。

昔から足だけは速いんだから……。

蓮はすぐに上履きを履くと、コナンに右手を振って、大声で言う。

蓮「コナン、私用があるから、先に行くね！ それから誘ってくれてありがとう！ 楽しみにしてるからー！！」

蓮はそう言うと、スツと左側の壁に消えた。

おそらく用があるのは体育館か、職員室だ。

どちらにしろ、体育の先生に、彼女は用があったのだろう。

コナン「ったく……。用があんなら先に行けよな……。こんなところで長話なんかしなくてさ……。自分の足に自信持ち過ぎだつっつ」。……」

そう毒舌を言っているにも関わらず、コナンの目はどこか眩しいモノを見ているかのように、どこか遠くを見つめていた。

4 パーティーの誘い（新一編）

パーティー5日前 午後11時36分 工藤邸。

新一「確かここに……………あつた！」

一人家に帰ってきた新一は、固定電話の引き出しから手帳を取り出し、パラパラとページをめくる。

さっきまで家に居た蘭は、園子と一緒にどこかに出かけてしまった。きつと近くのカフェだろう……………。

そして自分は参加者を集める為に電話を掛ける。

相手は勿論、どうしても欠かしたくないあの二人だ。

まずは、色黒のやかましいのから……………。

新一「アイツ、結婚して引っ越したから、家の番号変わったんだよなあ……………。えつ」と、服部の番号は……………」

ピツ……………ピツ……………ピツ……………

新一は服部の電話番号の載った手帳を片手に、受話器を握る。

本当は携帯電話の方が手っ取り早いのだが、あれだと余分に金が掛かるし、聞き取りづらい。

ここは固定電話の方がいいだろう。

しばらくコール音が鳴り響いた後、受話器の向こうから『ガチャッ』という音が聞こえてきた。

服部『もしもし?』

新一「あつ、服部か? 工藤だけど……」

服部『おお! 工藤!!! なんや久しぶりやなあ……。元気なんか?』

新一「ああ! コナンとも蘭とも一応(?)上手くやってるよ。そう言うお前は?」

服部『アホ、変化あるわけないやんか! 順調やで。じゅん・ちよ……』

どうやら、服部の方の夫婦や子供との仲は、かなり良いようだ。あまり電話の傍で騒がしい声や音がしないところを見ると、どうやら和葉と子供は、どこかに出かけているらしい。

服部『で? どないしたんや? 急に電話なんて掛けてきて……』

新一「ああ、実は……。5日後に、昔の仲間を誘って、船の上でパーティーをする予定なんだけど、お前来るかなあ〜って思っ……いや、むしろ来て欲しんだけど……」

服部『5日後!? そらまた偉い急やなあ〜』

新一(あつ……。やっぱ、ダメかなあ……。)

確かに、こつちも船を借りれる期間を調べて決めたものだから、急なのは重々承知していたのだが……。

それにしても急すぎか……。

服部『工藤、生憎俺ん家……』

新一(だよなあ……。急すぎるし、すぐに予定が合うわけ……)

服部『予定空いてるで?』

新一(やっぱり予定は……。えっ?)

えええええつー!?

新一「お、おい! 服部!？」

服部「アハハハ! 相変わらずアホなまんまやなあ、工藤? 俺
にからかわれるくらいやと・・・」

新一「ああ・・・。オメーがよく人をからかう色黒関西人だったの、
スツカリ忘れてたよ・・・」

服部「おい、工藤・・・。「色黒」は余計やぞ・・・?」
若干相手の受話器から、服部が目を細めたのが窺える。

それにしても、服部は昔と何一つ変わっていない・・・。

確かに顔立ちなどは、自分達は老けていく一方だが、性格は昔と何
一つ変わってはいないのだ。

むしろ変わってしまったのは・・・、自分だろうか・・・。

新一「じゃあ、OKなんだな? 服部」

服部「ああ! こっちは参加者3人や。メモつとき」

新一「ホイホイ・・・。じゃあ、詳しい予定が決まり次第、また連
絡入れるよ」

服部「OK! んじゃ、楽しみにしとるぞ? 工藤」

新一「じゃあな」

ガチャ・・・

新一は服部との電話を切ると、すぐに手帳に人数をメモる。
さて、次に掛ける相手は・・・。

新一「さあてと・・・。元月下の奇術師に、電話を掛けるか・・・。
確か、前と番号は一緒だったよな?」

と一人呟きながら、新一は快斗に電話を掛ける。

若干、こんな時間に出るかどうかは不安だったのだが……。

受付員(?) 『もしもし? こちら「KID The Magic Stadium」受付番ですが?』

新一(えっ……?)

いきなり聞こえてきた電話相手の声に、新一は一瞬驚いた。

だって、電話に出たのは女性……。
女性なのである。

しかも、どう考えても青子の声ではない……。

若い感じの(青子には失礼だが……)女性の声。
よく職場にいる秘書のような……。

にしても、一体誰だ……?
もしかして……。

新一「えっ……か……快斗?」
快斗「えっ? あっ、えっ……し……新一?」
いつの間に電話相手が変わったのか……。

いや……、あれは快斗の声だ。

おそらく声色を変えていたのだろう。

絶対に快斗の声だ。

新一は驚きながらも、そう解釈する。

一方の快斗の方も、まさか掛けてきたのが『新一』だとは気付かず、
電話の向こうでかなり焦っていた。
というよりは、恥ずかしかったのだろうか……。

快斗『ひ……、久しぶりだな……。新一……。？』

新一「いや、それよりも……。何だよ？ さっきの声！？ それと電話に出た時のヤツ！？」

快斗『ああ、あれね……。実は俺、もうじきマジックショーが控えててさ……。スタジオだけだと予約電話がパンクするから、家の電話番号でも予約受付する事にしてて……。』

新一「んで？ 俺だと分からずに、喋ってしまったと？ それでなんで女性の声なんだよ！？ 青子ちゃん、怪しむぜ？」

快斗『いや……。青子には言ってるんだけど……。よくアンケートとか取ってみるとさ「男性」よりも「女性」の方が、予約とか相談とかしやすいって書いてあって……。それで女性の声を……。』

そこまで聞いて、新一は初めて納得した気がする。

というか、むしろここまで言ってもらわないと……。

新一「よかった……。俺は今てつきり、まだ『月下の奇術師』の好みが消えてねえのかと……。」

快斗「んな事ずつとやってたら、青子にも子供にも引かれるよ！！』

そりゃあ……。そうだろ……。

ふつと新一は、ここで快斗が『もうじきマジックショーが控えている』と聞いて、一瞬『あつ……。』とする。

もしかしたら……。快斗の方は……。

快斗『ところでどうしたの？ いきなり電話なんてさ』

新一「実は5日後に、昔の仲間を集ったパーティーを開く事にしててさ。服部は参加するんだけど、快斗はどう？ 予定詰まってるか

「？」
快斗『5日後？ なら平気だぜ！ 俺の家族全員参加に、しといてくれよ』

そう言う快斗の横で『ポンッ！』という音が聞こえ、ハトの『クルックー』という声が聞こえてきた。

どうやらお得意のマジックで、手からハトを出したらしい。別に参加予定者に入れるのはいいのだが……。

新一「大丈夫なのかよ？ マジックショー控えてるんだろ？」

快斗『ん？ 平気 平気 それは4日後だから。予定が空くんだけ』

新一「4日後って、3日続きで大丈夫かよ？」

快斗『そんな、新一……。俺が不死身なの知ってるくせに』

『そう言えばこんな奴だったな』と、新一は受話器の向こうで笑みを浮かべた。

服部もそうなら、快斗もそうだ。

全く変わってない……。

新一「分かった。じゃあ、参加者に入れておくよ。3人だな？」

快斗『ああ。新一、悪い。さっきも言ったけど、よく電話掛かってくるんだ。あんまり長電話してると……』

そう。

今快斗は人気絶頂中の天才マジシャン。

勿論、マジックショーの予約は後を絶たないわけで……。

新一「えっ？ ああ、そうだよな……。じゃあ、また詳しい事は

電話で連絡入れるから……。それと、ショー頑張れよ」
快斗「おう！ 任しとけて！ それでは、5日後を楽しみにして
いますよ？ 名探偵」

ガチャッ

新一「……………バーカ……………」

新一は切れた電話の受話器に向かって、あの時と同じ笑みを浮かべ
ながら言った。

あの時……………、そう……………。

どこかに消えてしまった、今は亡き怪盗を追っていたあの頃の笑み
で……………。

新一（後は博士と灰原だな……………）

新一は掛ける相手一人ずつの思い出を思い出しながら、番号を打つ
のだった。

5 パーティーの誘い（蘭編）

パーティー5日前 午後12時38分 米花町のとある喫茶店。

新一が事件を終えて家に帰って来ていた頃、蘭は園子や青子と一緒に、近くの喫茶店にいた。

最初から会う約束をしていたのだから、あのパーティーの話をするのには丁度いい。

最も、最初は互いの生活の話に花を咲かせていて、蘭の本題とも言えるパーティーの話は、しばらくしてから話す事になってしまったのだが……。

蘭「それで？ 園子、京極さんと上手くやってるの？」

園子「うん！ でも、早く子作りして、皆に追い付かないと……私、その内子供が小さい内に『おばさん』って言われちゃう……」

園子はそう言うと、その場で脱力したかのように伸びた。

まああのメンバーの中で、結婚もせずに子供がいなのは園子だけ……。

気持ちは分からなくもないが……。

青子「そ、そんな事ないよ……。園子ちゃん……」

蘭「そうよ……。多分私も、コナンが生意気になったら『おばさん』って、言われるだろうし……」

園子「冗談よ。じょ・う・だ・ん それに、あのコナンなら、生意気にはならないんじゃない？」

園子は随分前に、二人の家に遊びに行った時の事を思い起こす。

最初は、あの『コナン』と似た性格なのだと思っていたが、いざ会ってみると、結構大人しかった。それに素直だし、言われた事はちゃんとやる。親にもあまり歯向かわない。

第一印象的には、性格の良い子に見えた。でも実際は……。

蘭「それが、そうでもないのよ。ずいぶん前に学校公開があつてね。その時に見てみたら、コナンたら、クラスの子と話す時とかはトントン生意気になってたの。同級生っていうのもあると思うんだけど、なんかそういうトコ、新一によく似てきたのよね……」

園子「うっそ！ もう!？」

蘭「う……、うん……」
よく『子供は親に似る』というが、本当にそのまんまだなあと、蘭は思った。

そう言えば、青子ちゃんのところの光夜君はどうなのだろう……。唯一コナンの身近にいる同い年の子というのもあつて、蘭は様子を訊きたくなった。

蘭「そう言えば……。光夜君はどう？ 元気にしてる？」

青子「えっ!？ あ、うん……。元気だけど……」

蘭「？ だけど……?」

青子「うん……。実は最近……。快斗と喧嘩しちゃって……。魚が原因じゃないんだけどね」

それを聞いて、蘭もふっと思い出す。

快斗の息子が、父親と違って魚が大好きだという事を……。

でもそれが原因ではなかったとして、一体何の喧嘩を起こしたんだか……。

あの様子だと、仲直りをまだしていないのだろう。
青子の表情から、蘭はすぐにそれを悟った。

蘭「そうなんだ……。あつ、そうだ！ 実はね……。5日後に新一が1泊2日の船旅パーティーを開くの。それで、二人ともこれかなあ〜って、思ってた……。今日、誘おうと思ったんだ」

園子「新一君が！？ 時間が経つと変わるものねえ」

蘭「でしょー！ 私も最初はビックリしちゃった……。それで、どう？」

園子「私は大丈夫よ！ 予定ないし……。1日くらい、真さんもOK出してくれるだろうから」

蘭「一緒に行ってもいいんだよ？」

園子「真さん、その日予定があるから……」

蘭「あ、そっか……」

一応園子はOK……。

あとは、青子だ。

蘭「青子ちゃん。快斗君と光夜君の仲直りには、丁度いいんじゃない？ まだ……。仲直りしてないんでしょう？」

青子「うん、そうなのよ……。船か……。魚が出なかったら……。快斗は大丈夫だと思うから……。青子と光夜の方は、OKにしていて」

蘭「あつ、うん。分かった」

蘭は持っていたボールペンで、4人の名前を書く。

おそらく快斗の名前は、既に新一が書き込んでいるだろう。

現在の参加者は、分かってるだけで6人。

蘭「私のお父さんとお母さんも誘うから、結構大賑わいかも……
……あれ？」

ふつと、蘭は青子の後ろを歩いていたら3人に目が止まった。

一人は大太り……。

一人はそばかす顔……。

そして最後の一人は、オレンジ色のカチューシャの女の子。

蘭「もしかして……。歩美ちゃん！ 元太君！ 光彦君！」

歩美「あつ！ 蘭お姉さんだ」

元太「青子姉ちゃんと園子おばさんもいるぞ」

光彦「ええ」

三人はそう言うと、蘭達の座っている喫茶店に走ってきた。
が、その前に……。

園子「コラ！ なんで私だけ『おばさん』なのよ！」

元太「い、いいじゃねえかよ。別に……」

園子「よくない！ これでも私はねえ、この二人と同じ年よ……！」

と、言っている園子と、そう言われている元太達を見ると、本当に昔を思い出す。

この二人は本当に変わらないんだから……。

もうあれから10年も経つと、この3人は本当に成長したなあと、
蘭は毎度毎度そう感じる。

現在、三人は高校2年生。

今は、帝丹高校の制服がよく肌に似合っている時期である。

歩美「蘭お姉さん、青子姉さん。こんにちわ」

光彦「いやあく、久しぶりですね」

蘭「うん。本当だね」

青子「あれ？ 哀ちゃんは？」

光彦「博士の家です。掃除の手伝いをしてるみたいですよ」

蘭「そう……。あれ？ ちょっと待って！ 皆、学校は？」

考えてみたら、今日は平日。

仕事をしていない蘭や青子達はともかく、本来ならば学生が出歩いていないはずの時間帯だ。

歩美「今日、帝丹高校の創立記念日だから、休みなの」

蘭「そう言えば……」

園子「そうだった……。つけ？」

元太「んだよ。卒業生なのに知らねえのかよ」

園子「あのねえ……。あれから10年経ってんのよ？ 忘れるに決まってるでしょ」

そんな威張んなくても……。

園子「そうだ！ 蘭、この子達もパーティーに誘ったら？」

蘭「えっ？」

青子「そうだよ！ 人数多い方が、パーティーは楽しいし……」

歩美「パーティー？」

二人の会話に、歩美が『？』マークを浮かべる。

それを見て、蘭は歩美達にパーティーの事を説明した。

蘭「……っていう事なんだけど……。皆、行きたい？」

歩美「うん！」

光彦「行きたいです！」

元太「なんか旨いモン沢山ありそうだしよお」

蘭「分かったわ。新一……。ううん……。コナン君に言っておくね」

この子達の中では、まだ『新一』は『コナン君』のはず……。だから、蘭はあえて言い直した。

『コナン君』に……。

青子「でも、皆が揃うなんて久しぶりだね」

光彦「はい。よく小学1年生だった時の事、思い出しますよ」

歩美「ねえ、光彦君。覚えてる？ あのカラクリ屋敷の事件。元太君、すつごく危なかったよね」

光彦「それを言ったら、あの東都タワーの暗号の時も、かなり危険でしたよ」

元太「それを言ったら、歩美の誘拐事件とか……」

園子「あれは早とちりでしょうが！！」

元太「あつ……。そうでした……」

その後も、3人はメンバーを3人増やして、昔話に花を咲かせるのだった。

6・参加者リスト

午後4時41分 工藤邸。

コナン「ただいまー」

新一「よお、コナン。おかえり」

珍しく学校から帰ってみたら、家にいたのは新一だった。いつもは母親の蘭が居るはずなのだが……。

コナン「父さん、母さんは？」

新一「まだ帰ってこねえんだ……。遅いよな……」

コナン「うん……。あつ、参加者決まった？」

帰って来ていきなりそれを訊くのもどうかとは思ったが、どうしても気になってしょうがなく、コナンは新一に尋ねた。

一方の新一は、コナンが真っ先にそれを訊くと予想していたのが、タイミング良く参加決定者のリストを取り出し、読み上げる。

新一「えつと……。服部……。快斗……。阿笠博士……、

灰原……。あとは服部と快斗の息子2人だな……」

コナン「早つ……。もうそんなに……。あつ、そう言えば父さん。僕、蓮を誘ったんだけど、ダメだった？」

新一「蓮って……。桜井蓮か？」

新一にしては珍しく、コナンのクラスメイトの名前を覚えていた。まあ、よく蓮の父親と一緒にいるのだから、流石に覚えられないはずはないだろうが……。

コナン「うん」

新一「別に、構わないぜ？ そつか……。コナンは蓮ちゃんを……。となると、今のところ7人が……。」
そう呟きながら、新一は参加者リストに蓮の名前を書き記した。
と、その時。

ガチャツ！

蘭「新一！ コナン！ ただいまー」

新一「あつ……。」

コナン「やつと帰ってきた……。」

いつもは家に先にいる人間が、こんなに遅れて帰ってくるとは……。

しかも蘭の手には、沢山の荷物があつた。

両手にビニール袋やら、紙袋やら……。

コナン「おかえりーって……。母さん、何処行つてたの！？ 凄

い荷物……。」

蘭「うん。ちよつと昔の皆に久しぶりに会つたから、一緒に買い物してたのよ」

新一「昔の友達って？」

それは流石にコナンも気になる。

昔はよく新一と同年来の園子に『旦那』『女房』と冷やかされていたらしいが、今は逆にその通りの関係になつた為、蘭の行動には少々気が気ではないのだ。

蘭「実は、パーティーの参加者なんだけどね。えつと……。園子と青子ちゃんでしょ。少年探偵団でしょ。私の両親でしょ。それと、電話で和葉ちゃんも誘つたの」

と、指を折りながら笑顔で参加者を教える蘭。
この時点で、蘭が誘った参加者の数は圧倒的だ。
全部で計8人。

新一「誘った人間の数……。母さんが一番だな……」

コナン「僕なんか一人だけだよ……」

新一「んだよ、お前……。友達少ねえな……」

その新一のコメントに、コナンはブスツとした表情を浮かべる。

別に友達が少ないわけではなかったのだが、誘う気になったのが蓮だけというか……。そんな感じである。

それに『5日後』という急な話では、友達のほとんどはNO。
偶々蓮の予定が、その日だけ空いていたというのが合っているだろう……。

ふっとコナンは、自分が誘った相手の名前を見て、ハッと思い出した。

そうだ……。

あの二人にも、仲のいい友達が居るんだ……。

一人ずつ……。

コナン「父さん。もしかしたら、あと二人。参加者増えるかもよ。

ほら、光夜と平矢の友達一人ずつ……」

新一「ん？ ああ！ そう言えばいたな……。随分前の夏休みの時に、仲のいい女の子二人……」

コナン「あの二人、もしかしたら着いて来るんじゃない？」

新一「かもな」

今頃になって思い出した事だが、そう言えばあの二人の子供にも、仲のいい幼馴染ガイル・フレンドがいたんだっけ……。

名前は……、そっちは忘れたが……。

蘭「村咲直子ちゃんと、宮城紅葉ちゃんよ！ 新一、いい加減名前覚えなさいよね！」

新一「バーロオー……。今思い出したんだよ……。」

嘘付け……。

蘭「じゃあ、これで一応の参加者は全部ね。あれ……。何、コナン。蓮ちゃん誘ったの？」

コナン「さ、誘っちゃ悪い？」

蘭「ううん。そうなんだ……。コナン、蓮ちゃんを……。」

コナン「べ、べ、別に……。そ、そ、そんなじゃないからな！

ただの幼馴染み!!！」

それでも構わず半分怪しい目を向けてくる蘭に、コナンは頬を赤らめた。

10年前は自分が蓮の立場だったのを考えると、かなり懐かしく感じる。

ちなみに今蘭がやっている行動は、昔園子がよくやっていたことである。

その後も、蘭とコナンの『そうなんだ……。』『違う!』の言い争いは、しばらく続いた。

その日の夜 午後11時58分 工藤邸。

皆が寝静まった夜、一人の人物が、ある相手に電話を掛けていた。誰も起きていないかどうか、最新の注意を払って……。

??「そうだ……。そのやり方で頼むよ。今回のクーラーには、ピッタリだからな。それじゃ……」

ガチャッ

粗方の要件を話し終えると、その人物は静かに受話器を置き、二階のコナンの寝室へと入って行く。

その部屋の中では、侵入者に全く気付かずに寝息を立てているコナンがいた。

どう考えても、起きる気配はない。

??（聞かれてはいないみてえだなあ……）

そう胸中で呟きながら、その人物は部屋を後にした。

雲によって月の隠れた窓からは、うす暗い闇しか漏れず、光は入っては来ない。

その人物はそんな暗い窓に、顔を近付けた。

暗くとも、ガラスに映る己の顔……。

さらに時間が経つと、雲に隠れていた月は再び顔を出し、その人物の体を照らした。

先程まで不振な行動を取っていた、工藤新一の顔を……。

7・サブライズ企画

パーティー4日前 午後12時34分 工藤邸。

その日、コナンは奥の方にある書斎で、朝から本を読んでいた。
お決まりの、血生臭い推理小説。

そのほとんどが、新一の趣味……。
あとの残りは、新一の父である優作の作った小説だ。

父親似で本を読むのが好きだったコナンは、飽きずに時々紅茶を飲
みながら、一定の間隔でページをめくる。
その動作を繰り返していた。

と、その時である。

新一「コナン。ちょっといいか？」

コナン「うわっ……。！ な、何？ 父さん」

と、いきなりリビングの方にはいた筈の新一が、しかも自分と同じ目
線のところに顔があった日には、ちよつとビツクリする。

特に本ばかりを読んでいて静かになっていた時などは、結構心臓が
飛び跳ねそうになるくらい驚いてしまうものだ。

現に今も、後もう少しで読み終えた小説の山の中に、椅子ごと倒れ
そうになった。

新一「そんなに驚くなよ……。まあ、いいや……。実は、4日
後のパーティーの事だけ……。今回は父さんが、お前の為にち

よつとしたサプライズを用意してやったからな。それを教えようと思つて」

コナン「さ……、サプライズ？ どんな？」

そう尋ねると、新一は座っていた状態からスツと立ち上がり、人差し指を上には伸ばしながら、説明し始めた。

新一「ルールは簡単。まず、今回のパーティーに誘つた人達の内の一人在、突然何者かによって誘拐される……。お前は、パーティー会場や船のあちらこちらに隠された暗号や証拠を見つけ出して、誘拐された人物と、その犯人を捜し出す……。な？ 簡単だろ？」と、笑顔で訊いてくる新一。

確かに面白そうではあるが、その設定はどうだ？

なんか下手をしたら、本当に起つてしまいそう……。実際に元の事件があつたのか……。

ついついこんな事を考えてしまう。

でも、面白そうに感じたのは、紛れもない事実でもあつた。

コナン「なんか……。すつごく面白そうだね」

新一「だろ？」

蘭「ふーん……。それで昨日、あんな夜遅くに誰かに電話を掛けてたのね？ たぶん電話の相手は、そのゲームの協力者の誰かなんでしょ？」

いつの間にか、赤いチェックのエプロンを身に付けた蘭まで、書斎の方にいた。

どうやら話を盗み聞きしていたらしい。

コナン「電話？ いつ？」

蘭「昨日の夜中……。なんか新一が部屋から出る気配がして、ちよつと様子見に行つてみたら、誰かとヒソヒソ電話を掛けてたの。最初は別の女の人かと思つたけど……。そういうことね……」
新一「八八八……」

新一が優作の血を引いているせいなのか、蘭が英理の血を引いているせいなのか。

どうもこの二人の会話を聞いていると、家族に黙ってヒソヒソと計画を練る新一の父優作と、絶えず夫の行動が気になって疑い出す蘭の母英理のようだ。

と、さつきまで苦笑いを浮かべていた新一は、まるで何かに気がついたかのように、突然蘭の方を驚いた目で見つめる。

新一「まさか！ 誰に掛けてたか聞いてねえよな？ 電話の内容も・

……」

蘭「ちよ、ちよつと！ 少しは落ち着いてよ、新一！ 私は何も聞いてないし、電話の相手だつて分からないわよ！！ あの時はドアが閉まつてて、ゴニョゴニョ程度しか聞こえなかつたんだから……」

それを聞いて安心したのか、新一はその場に再び座り込み『よかつた……。』と、呟いた。

はて……？

そんなに大掛かりなサプライズだったのだろうか……。

そんな事を思いながら、コナンは宙を仰ぎ、サプライズのルールを頭の中で何度も繰り返し返す。

その度に、体が『ゾクリ』としているのを感じた。

コナン（楽しみだな……。それも父さんのなんだから、かなり本格的なものはず……。もう4日が待ち切れないぜ！）

そう一人ワクワク感に浸っているコナンを、新一はいつもの笑みを浮かべ、見つめていた……。

8 パーティー本番

パーティー初日 午後5時47分 米花港。

蘭「新一。これで全員乗ったわよ」

新一「じゃあ……。そろそろ乗るか……。コナン！ 乗るぞ！」
コナン「あっ、うん！」

全員が船に乗ったのを確認して、新一達は最後に船に乗り込んだ。
流石は新一の父、優作が借りた船と言うのもあって、かなり見た目
といい、デザインといい、豪勢だ。
おまけにデカイ。

二回目とはいえ、滅多にこんな船に乗る機会なんてない。
コナンは大はしゃぎのまま、蘭と新一を置いて、先に船に乗り込ん
だ。

その様子を見て、新一は呆れ溜息。
蘭はおかしそうに笑っていた。

船の奥の方に入っていくと、受付口がある。

ここで参加者は名前を記入し、色んな色に染めた鳥の羽を、バッチ
代わりに付けるのだ。

まあ、簡単な『参加者証明』みたいなものである。

受付員の人間は、全部で二人。

佐村慶介さむらけいすけさんと、伊藤スミレいとうさんだ。

この二人は、優作のパーティーの時も、受付を担当していた。

というより、この借りている船の受付担当員に選ばれているだけの
話、なのだが……。

新一「佐村さん、伊藤さん。全員、もう船に乗りましたか？」

伊藤「はい」

佐村「欠席者は・・・、いらっしやらないようです」

新一「そうですか。ありがとうございます。コナン、行こう」

コナン「うん」

そしてその先にあるのが、メインのパーティー会場。

中に入ってみると、大きな目のパーティー会場と言うのもあって、人数的には少々寂しげだったが、それには負けないくらいの笑顔や懐かしさがあった。

ふっと、コナンの視線がある人物二人に向けられる。

一人はやや白髪が生え、皺が増えたチヨビ髭男。

もう一人は、少々色の濃い口紅を付けていたが、何とも上品そうな立ち姿をしていた。

その二人を見て、コナンは居ても立ってもいられず、二人に走り寄る。

コナン「おじいちゃん！ おばあちゃん！」

小五郎「おおっ！ コナン！」

小五郎が大きく手を広げると、コナンはその中に勢いよく飛び込んだ。

もう3人とも満面の笑みだ。

英理「あら、コナン。また大きくなったんじゃない？」

コナン「少しね」

蘭「お母さん、お父さん。久しぶり」

英理「蘭。新一君も元気そうね」

新一「どうも」

ふっと新一が視線を変えてみれば、小五郎に何度も頭を撫でられているコナンがいた。

まあこの二人にとつて、コナンはたった一人の孫なのだから、ベタ惚れになるのもしょうがないのだろうが……。

新一（俺が『コナン』だった時……。おっちゃんかなり煙たがってたのに……）

と一瞬だけ顔をブスツとしながらも『俺の時とは違って血縁関係なんだから、無理ないか……』と、自分の中で呟く。

しばらくすると、パーティーを立ち上げたファミリーが船に乗ったのに気がついたのか、他のメンバー達も新一や蘭達の元が集まってきた。

園子「蘭、結構いいパーティーじゃない。さっすが、旦那の力」

蘭「あつ、園子！ もう！ 旦那じゃなくて、その両親よ！ 新一は今回、タダで借りたんだもん」

園子「あつ！ そっか」

??「らんちゃん」

??「久しぶりやな」

ふっと気が付けば、園子の後ろにも、見覚えのある顔があった。その内の一人は久しぶりの再会である。

蘭「青子ちゃん、和葉ちゃん。青子ちゃんはこの間会ったけど、和

葉ちゃんも元気そうだね」

和葉「元気ちゃう！ 平次と平矢は喧嘩ばかりや」

青子「えっ？ そうなの？」

和葉「おまけにあの二人、喧嘩し出したら止まらへんもん」

蘭「フフフ……。服部君とそっくりだね」
和葉「ホンマやで。まるで平次を二人飼ってるみたいや」

一方の新一の方は、久しぶりに少年探偵団の4人と博士に再会していた。

もつとも、灰原はつい最近会ったのだが……。

新一「オメーらも元気そうだな」

元太「ああ！ 高校すっげー楽しいぜ！」

光彦「つて、元太君。それは昼ごはんにいつでも、好きなモノ食べられるからでしょう？」

元太「あつ……。まあな……」

灰原「私も相変わらずの生活をしてるわ……」

歩美「歩美も！」

顔つきはだいぶ変わったとはいえ、皆それぞれ面影はある。

三角形頭に十円ハゲ……。

真ん中分けの髪型にソバカス……。

お河童髪にカチューシャ……。

新一「結構10年経つても変わんねえもんだなあ……」

歩美「でも……。逆にコナン君、老けたよ」

新一「(ズベツ!) 『老けた』んじゃなくて、元々こつちが正しんだよ！ 10歳違いなんだから……。それを言ったら……。博士……。髪、薄くなった？」

博士「へっ？」

確かに新一が思ったように、博士の髪の毛は、やけに少なくなってきた。

少なくとも、10年前よりは減っている。

そして皺だけは、何故か10年経っても増えていない。

光彦「そうなんですよ。皺は増えてないんですけど……」

元太「髪の毛だけけどんどん無くなってきてよぉ……」

博士「アハハハ……」

灰原「まあ……。隠れてメタボったりしてるから、こういうお仕置きが来るのかもね」

博士「哀君……。それは関係ないとは思うがのオ……」

新一「あぁっ!? まだカロリー高いの食べてんのかよ、博士!」

博士「そ、そうなんじゃよ……。どうしても手を出したくなってきたのオ……」

若干、呆れた。

そう言えば、自分が知っているだけで、灰原が博士のカロリーを気にしていた数は4回以上……。

あれだけ言われて、まだ止めてないとは……。

新一（それって……。もう諦めた方がいいんじゃない……）

灰原「だからこのパーティーで『サラダ以外に口にしちゃダメ』って言うてるから、分かってるでしょうね? 博士」

博士「分かっておるわい……。はぁ……」

新一（そりゃあ、溜息吐きたくもなるでしょうよ……）

新一はそう思いながらも、変わらぬ5人を見つめていた……。

8 パーティー本番（後書き）

どーも

久々に田舎に行く事になった

KIDDでーす！！

（この季節だから、多分全体的に緑色なんだろうな）

コナン

「春だしね・・・」

快斗

「ところで・・・。俺、出てこなかったんだけど？」

服部

「わいもやで？」

KIDD

ああ！

二人は来週なんで

快斗

「ら、来週かい・・・」

服部

「まあ、6日まで待てばどっつか・・・」

KIDD

あつ、その事なんだけどさあ・・・。

来週の投稿、大丈夫だとは思っけど、最悪投稿が一日ズレると思う。

コナン・快斗・服部

「「「何iiiiiiiiい〜!!」「」」 (@_@) (・̀)

K I D

最悪の場合だから!!

(ってか・・・、高校生3人(?)揃って、なんちゅう反応だよ・・・)

それでは ッ

9・奇術師&西の名探偵

ある程度博士達と話し終えたところで、新一はあの二人を探し始めた。

もつとも探さなくとも、この船の広さとこの人数であれば、すぐに見つけられるのだが……。

新一「えっ……と……。あっ！ いた！」

お目当ての二人は、用意されていたオードブルテーブルの近くに、何やら賑やかに話しながら立っていた。

そんな二人についつい悪戯心が芽生えた新一は、ぬき足さし足で、ゆっくりと姿勢を低くしながら、二人に近づく。

性格面や話し合っている様子を見ながら、新一は快斗の後ろへと回り込んだ。

勿論快斗も、その前に立っている服部も、近くにあるテーブルが邪魔になって、新一が見えない。

そして、ある程度の位置まで来たところで……。

快斗「その手には乗らないぜ？ 新一」

新一「ゲッ！ なんだよ、バレてたか……」

と、半分残念そうに、新一は『チエツ！』と、舌打ちをした。

そんな新一の顔を見ながら、快斗はニヤリと笑う。

快斗「名探偵、俺を誰だと思ってんだよ？ 天下の大泥棒だぜ？

そんなのすぐ気付くつづの！ なあ、平次」

服部「……………いや……………。俺、気付かんかった……」

快斗「えっ!? ウソ!?」

服部「いや、ホンマに……。工藤、エライこつ言つこの得意やなあ」

なんて言いながら、服部は自分の後ろ髪を搔く。

『これなら服部を脅かせばよかった』と思っても、後の祭りか……。

新一「つうより……。お前が鈍感なだけじゃ……」

服部「そうなんや! 最近年取ってきたせいでなあ〜って……。

アホかつ!! ただ単にテーブルが邪魔で、工藤が見えへんかった
だけや!!」

快斗「普通気配で気付くって……」

新一「ああ……。俺もそう思う……」

服部「……」

その後は3人揃いも揃って吹いた。

互いに何がおかしかったとか、何が笑えるものだったのかとか、そう
言ったものは一つもなかったのだけれど……。

何故か笑えたのだ。

まるで自分達が、探偵として、怪盗として、互いに高校生活を送り
ながら一緒に過ごしていた、あの頃を思い出したかのように……。

その後、コナンもまた、その3人の元へとやってきた。

向かった理由は、父親である新一のサプライズゲーム。

いつ始まるのか、どこに暗号が隠されているのか、この船の何処か
ら何処までがゲームを行う場所になっているのか、それを全く知ら
なかったからである。

それを聞かねば、ゲームも何も始まらない。

コナンは新一達の前に向かい、ゲームの事を尋ねようとした。その時。

バサッ！

コナン「うわっ！」

突然コナンの目に何かが触れると、辺りが真つ暗闇になった。どうやら誰かに、後ろから両目を手で塞がれたらしい。

で、こういう遊びの時は良くお決まりのことです……。

??「だーれだ？」

コナン「ああ？ えっと……」

『答えなければいけないのか』と、コナンは一瞬そう思いつつも、取り合えずご注文通りに答える。

コナン「『だーれだ？』って訊いてきたのは、光夜だけど……。実際に手を掛けているのは平矢！ 理由は、覆い被さる瞬間の手が黒かったから」

コナンがそう答えて手を退け、後ろを振り返る。

そこには、コナンが言い当てた二人がさぞ悔しそうな表情を浮かべていた。

一人は『あちゃー』という顔をして、右手で顔を覆い、もう一人は

『チツ』という舌打ちと共に『パチンツ』と指を鳴らしている。

この二人こそ、あの『西の高校生探偵』と『月下の奇術師』の子供。

服部平次と遠山和葉の息子の、服部平矢。

そして、黒羽快斗と中森青子の息子の、黒羽光夜である。

この二人と顔を合わせるのは、一体何カ月ぶりだろう。

もしかすると、去年の夏休み以来ではないだろうか……。

そんな事をコナンが思っていると、二人は何やら言い争いをし始めていた。

平矢「あーあー！ やっぱり気付いてしもたかぁ……。てつきりバレへんと思っとったんやけどなぁー」

光夜「ほら！ だから言っただろ？ 『手を上から被せるより、下か横から被せた方がいい』って！ ただでさえ、平矢の肌の色は分かりやすいんだから」

平矢「やかましわっ!!」

と、どうでもいい言い争いを始める二人。

そんな二人を、コナンはジト目になりながら見つめていた。

ふっと、そんな二人の後ろの方から、何やら明るい声がある。

その内の一人は、ほぼ毎日聞く声だ。

蓮「あ、いた！ コナン」

??「皆、何処行つてんの!？」

??「凄く探したんだよ？」

コナン「蓮」

平矢「紅葉」

光夜「直子」

三人の目の前には、同い年の女子組がパーティー用の服に着込んだ姿で立っていた。

蓮は真つ赤なワンピースを。

平矢の幼馴染みでもある紅葉は、名前の通りオレンジ色のワンピースを。

光夜の幼馴染みの直子は、黄緑掛かったワンピースを着込んでいた。

だが、そのどれもが乱れているところを見ると、どうやら自分達を探して、散々パーティー会場内を走り回っていたらしい。

その証拠に、三人は少し疲れたような、半分怒ったような顔をしていた。

蓮「もう！ パーティー主催者の息子が何処行ってんのよ!？」

コナン「わりー、わりー。もっとも、こっちは居なくなっただつてもりはないだけだな」

蓮「全く、もう・・・」

コナン「ハハハ・・・」

それから6分後。

午後6時10分。

船は米花港を、出航した。

9・奇術師&西の名探偵(後書き)

ども

最近よく学校で『コナンの映画観に行った』という会話を聞く
KIDでーす!!

いや〜、いいこつた　いいこつた

コナン

「パーティーが始まったって事は、そろそろ本番突入ってところか？」

KID

う〜ん・・・。

ちよい早い。

すぐはすぐだけど・・・。

快斗

「んじゃ、また『気長に待て』か？」

KID

いや・・・。

そこまで待たん!

(一話分だけ待ってて〜!!)

コナン・快斗

「へーい」

KID

ほとんど何の会話なのか分からなくなってしまいました。お先に失礼を・・・。

10・父子（おやこ）の喧嘩

午後6時23分 船の中 パーティー会場。

新一の苦手とする壇上挨拶も終わり、皆はそれぞれ、高校生の時からの友人達と雑談を始めた。

所々で、その子供達も混ぜながら……。

新一「いや、でも……。服部の引つ掛けも驚いたけど、快斗の家に電話を掛けた時の方がもっと驚いたよ。いきなり電話に出たと思ったら、若い女性の声だし……。それにその後で『こちら「KID The Magic Stadium」受付番です』だもんな」

と、あの日電話を掛けた時の記憶を思い出す新一。
その後ろで、快斗が恥ずかしそうに後ろ髪を搔く。

快斗「わりー、わりー。まさか新一だと思わなくて……」

服部「しかも、マジックショーの名前に『キッド』ってなあ……。快斗「チッ、チッ、チッ！ 違うよ、平次！ 『キッド』じゃなくて『KID』だよ」

新一・服部・和葉・蘭・青子・園子「一緒だろっ！！（やるっ！！）（でしょっ！！）」

服部「ただ単に英語がカタカナのどっちかやんかつ！！」

そんな親同士の会話に、コナン達は苦笑いを浮かべる。

今も昔も、この人達はこのままというか、なんというか……。

新一「にしても、服部。お前そんなにいいタキシード着てんのに、そのいつもの帽子は似合わないんじゃないか？」

和葉「せやろ？ ウチもそう言ったんやけど、平次『これがあらへんと落ちつかへんのや！』言うて、仕方なく被せたんや」
服部「仕方なくってなんじゃい！！ 人の好みぐらいええやろ！？」

とは言うものの、やはり全身黒のタキシードに、白と深緑のロゴ入りキャップは似合わないだろう……。
コナンはつくづくそう思う……。

園子「でも逆に快斗君は、すっごく似合ってるわね」
蘭「うん！ まるで今にもマジック見せてくれそう」
快斗「では、お言葉に甘えて」

ポンッ！

という音と共に、快斗の手から真っ赤なバラの花束が出てきた。さらにそれを手の平でクシャクシャに丸めて指を『パチンッ！』と鳴らすと、それが今度はハトとなって出てくる。

そして最後に、そのハトの上に少し大きめのハンカチを振り翳した瞬間。

パッ！

ハトは一瞬で消え、快斗の参加者証明でもある青い羽根が、ヒラヒラと快斗の手の平の上に落ちてきた。

快斗「ま！ こんなトコかな？」

蘭「凄い！ 快斗君！」

園子「心なしか、前よりずっと上手くなってない？」

快斗「そ、そう？」

半分照れながら、快斗は胸に青い羽根を取り付ける。

そう言えばこの羽は、皆それぞれ色が違う。

新一家は赤。

服部家は緑。

黒羽家は青。

蓮はオレンジで、直子は黄緑。

紅葉は朱色。

博士と灰原は白。

歩美と元太、光彦は黄色。

毛利家はクリーム色。

園子はピンクだ。

この色は、前以て新一が決めたものである。

和葉「そう言えばの話なんやけど、紅葉ちゃん。弓道の小学生大会で、優勝したんやて！」

メンバー全員「へーっ!!」

蘭「凄いじゃない、紅葉ちゃん！」

紅葉「まぐれやて！ ま・ぐ・れ」

と言いながらも、半分照れる紅葉に、平矢はジト目で見つめる。

平矢「よう言うわ……。大会の前日に『ウチは余裕やから大丈夫や〜』言つて、俺ン家で夜中まで俺とマリカー やっとたんは、何処のどいつや」

紅葉「平矢！ やかましい！！ あの後モ ハンで弓ずっとやって練習しとつたんから、別にええやないの！！」

平矢「アホ！ ゲームで練習できるわけないやろ！？ ましてやあの矢、めっちゃ外れてたやないかい！ モンスターの脳天に矢あ刺したのは俺やぞ！？」

紅葉「でもウチが倒したやんっ！！」

平矢「ああ・・・、そうやったな・・・。刀でな！！」

このままだと止まりそうもないので、コナン達は強制的に聞かないようにした。

一方の大人達（特に服部と和葉）は、二人の喧嘩に恥ずかしそうに視線を逸らす。

それにしても、この言い争いはまるで昔のこの二人のようだ。

まさか関西人（大阪人）は、大概こうなのだろうか・・・。

直子「また始まつちやったね・・・」

蓮「もう！ 喧嘩すると止まんないんだから、あの二人・・・」

コナン（ハハハ・・・（-_-））

光夜「・・・」

ふつとコナンは、光夜の様子が少しおかしい事に気がついた。

『何処がおかしい？』と訊かれれば困るのだが、一言で言うとなれば、ずっと黙り込んでいて、尚且つ、父親である快斗と目線を合わせないのである。

普段だったなら、互いにマジックをし合ったり、人を脅かしたりしているはずなのに・・・。

異様に光夜が、快斗と距離を置いているように感じたのだ。

コナン「光夜……。お前、どうした？」

光夜「……ん？ 何が？」

コナン「いや……。なんか親父さんと、距離置いてるみたいに見えるから……。」

光夜「べ……。別に……。距離なんか置いてねえよ！！ 変なこと言つなよな！」

コナン「えっ……。？ あ……。そう……。」

光夜「……。……。」

快斗「……。……。」

やっぱりおかしい……。特にムキになる辺りが……。

そんな二人の会話が聞こえたのか、服部は静かに快斗の元へと近づき、快斗の耳に口元を当てながら、ヒソヒソ声で尋ねる。

服部「なあ？ お前もしかして、子供と喧嘩これしたんか？」

と言いながら、服部は自分の両人差し指をクロスさせ、xを作る。それを見て、快斗は苦笑いを浮かべた後、答えた。

快斗「まあ……。な……。そういう事……。」

服部「やっぱりなあ！！ で？ 理由は？ どうせお前の嫌いな魚アジやる？ 息子の方は好物やからなア〜」

快斗「いやっ……。！ アレじゃないんだ、喧嘩の原因……。」

服部「なんや？ ちゃうんか？ 俺てつきり、また食事で喧嘩したんやと……。」

そう……。

この二人が喧嘩を起こすとすれば、大概。

いや・・・、必ず魚が原因だ。

見るのも触るのも、名前を聞くのもダメな快斗とは違って、光夜は魚が好物。

前にコナンの家に遊びに来た時も、魚料理である寿司を平気で食べていたのを見て、父さんと母さんはかなり驚いていた。

それくらい、好き嫌いに関しては対照的なのである。

だからてつきり、今回もそうだと思っていたのだが・・・。

青子「ちよつと厄介な内容で喧嘩してて・・・。ねえ、快斗」

快斗「あ、ああ・・・」

服部「へえ・・・。そうなんや・・・」

和葉「平次！ もう少し周りの事考えたらどうなん!？」

服部「お前はいつも喧しいわ!！」

こつちもこつちで十分喧しいと思う・・・。

ふつと、ここでようやくコナンは、先程から気になっていた事を新一に尋ねる事にした。

色々と横やりがあつて訊けなかったが、話が一段落した今なら・・・。

まあ、大丈夫だろう。

コナンは新一の元へと近づくと、新一の袖を引っ張った。

それと同時に、新一が『?』マークを浮かべながら、コナンの方に視線を向ける。

新一「コナン？ どうした？」

コナン「父さん、いい加減教えてよ」

新一「何を？」

コナンの蒼い目が、一瞬新一を映して光る。

コナン「ゲーム……。いつ始まるの？」

10・父子（おやこ）の喧嘩（後書き）

ども

『一話分だけ待ってください』と、前々回に言ったにも関わらず、ゲーム内容に突入出来なかった

KIDでーす!!

すみません……（……）

コナン

「あーあ……。期待して損した……。来週は？」

KID

来週は確実に入ります!!

（ウソではありません!!）

快斗

「誰も、時期外れの『エイプリル・フル』だとは思ってねえよ……（……）」「（……）」

KID

そりゃ、どつども

それでは ㄟ

11・誘拐ゲーム

コナン「ゲーム……。いつ始めるの？」

コナンが思い出したようにそう尋ねると、新一は一瞬コナンの顔を見つめると、ニツと笑い、ソツポを向きながら歩き出してしまった。

そして歩きながら言った言葉は……。

新一「いつやるかは、父さんは絶対に話さない……。だから自分で、いつ始まったのかを判断するんだ。事件なんて、いつ起こるか分からないもんだしよ」

コナン「えっ!? ま……。マジで? うそ……。」

予想していなかったわけではないが、内心『そうでないでほしい』と願っていた思いもあったので、少々溜息を吐きたくなる心情になった。

そんな二人の会話を耳にした蘭が、慌てて新一の袖を引っ張った。その瞬間、新一はいきなり後ろに引っ張られ、背中から転びかける。

新一「危つぶねえ……。! おい、蘭。なんだよ?」

蘭「ねえ、新一。いくらなんでも、本当の小学生のコナンには、難し過ぎるんじゃない? おまけにヒントもないし……」

新一「そ、そうか……。?」

蘭「そうだよ! コナンは新一じゃないんだからね?」

蘭にそこまで言われ、新一は顎に手を当て『う〜ん』と、ヒントを考える。

実際のコナンの意見としては……。
別にヒントなどなくとも、こちらは『父親には負けたくない!!』
というプライドがあるため、勝手にサクサク動いていた気もする
ところだが……。

新一「じゃあ……。ヒントは『青い光が照らす場所』だぜ」

コナン「あ……。『青い光が照らす場所』……。？それがヒント
？」

新一「正確には、次の暗号の隠し場所のヒントだ。じゃ、あとはよ
ろしく！」

新一はそれだけ言うと、そそくさとその場を離れてしまった。

まあ、訊きたいことは全て訊けたはずだし、もう新一を呼び止める
必要はなくなったのだが……。

蘭「もう！あれのどこがヒントよ。分かりずらいまんまじゃない
！」

コナン「母さん。別に僕はヒントがなくても……。あれ？」

ふっと、新一の歩き去った方角から、何かが飛ばされてきた。
4つ折りにされたメモ用紙のようだ。

どうやら、新一のポケットから落ちたものらしい。

空かさずコナンはそれを拾い上げ、その場で中を開く。

さて……。

問題はこれが、わざと新一が落とされたのか……。

それとも正解のカンペか、だが……。

コナン「……………どうやら……………第一問の暗号みたいだね……………」
蘭「えっ……………」

蘭がコナンの上から、メモ洋紙の中をしてみる。
メモの中には、7つのひらがな……………。

問題 ？

「あしうそくそし」

とだけ、書かれていた。

その暗号を見て、コナンの口元がニヤリと笑う。

コナン（へえ……………結構面白そうじゃねえか……………）

その一方、新一はまた皆の元へと集まり、昔の思い出話に花を咲かせていた。

ふっと気が付けば、さっきまでここにいた筈の服部が居ない。

新一「あれ？ 服部は？」

青子「さっきトイレに行ってたけど……………」

青子が新一の問いかけに答えていると『噂をすれば』の流れで、服部がトイレから戻ってきた。

快斗「んじゃ、俺もトイレ」

青子「もう！ いつも能天気でお調子者なんだから」

新一「でも……。それが快斗の取り得でもあるんだよなあ……。」「
灰原「この後も色々長くならそうだから、私もトイレに行ってくるわ」

和葉「ほな、ウチも行ってくるわ」

園子「私も！ ワイン飲み過ぎたみたい……。テヘツ」

蘭「もう、園子ったら……。」「

と、気が付けばゾロゾロと皆がトイレに出向き、会場は本の少しだけ静かになった。

そんなパーティー会場に用意された椅子に座りながら、コナンは暗号に目を通していた。

その姿が、偶々蓮の目にも映る。

蓮「コナン。何してるの？」

コナン「ん？ ああ、これ？ 父さんが作ったゲームの第一暗号さ。今、解いてるんだよ」

平矢「暗号！？ 俺、もうそう言うのに目がないねん！ おい、コナン。俺にも見せろや！」

コナン「ったく……。乱暴な奴……。ほら」

コナンは渋々、暗号用紙を平矢に手渡す。

最初は目を輝かせていた平矢も、そのメモ洋紙を見る度、次第に表情が曇ってきた。

という事は……。

コナン「平矢……。分かんねえんだろ？」

平矢「ちやうわい！ ちゆうより……。これ、どついうゲームなんや？」

コナン「ん？ そう言やあ、ちゃんと説明してなかったな……。このゲームは（中略）っていうゲームなんだよ」

と、簡単ながら説明。

それを聞いてさらに目を輝かせたのは平矢……。

ではなく全員……。

蓮「へえー……。結構面白そうじゃない」

光夜「暇つぶしには持って来いだし……」

平矢「事件の内容も悪くない」

紅葉「なあ、コナン君」

直子「私達も……。参加しちゃ……。ダメかな……。？」

そんな風に言われたら、こっちも断れない……！

コナンはすぐにトイレから戻った新一の元に再び駆け寄り、皆の相談をする。

本当はコナン一人でやってみたかったのだが、心のどこかで『大勢でやりたい』と思う自分が居る。

新一の作ったゲームでもあるわけだし、似たようなモノはいつでもまた出来るだろう。

いつでも出来るものと、今この瞬間にしか出来ないものを比べるとしたら、僕は断然こっちだ。

コナン「皆も一緒にやりたいって言うてるんだけど……。ダメ？」

新一「別にいいぜ？ 皆でやっても……」

意外な事に、新一側の意見は『OK』だった。

しかし、その代わりに条件付き……。

新一「その代わり、大勢でやるんだったら、絶対にゴールまでやり切れよ」

子供達全員「ハイ!!!」

新一（結構こういう時の返事って……。恐いんだよな……）

胸中で呟きながら、新一は自分がコナンだった時の、少年探偵団の姿を思い出す。

確か彼らの場合、危ない事に首を突っ込む時は、いつも普通よりもいい声で返事を返していたっけ……。

ふっと蘭の後ろの方で、園子達が不思議そうに、熱心に暗号を解こうとしている子供達を見つめる。

と同時に、園子の頭の上には『?』マークだ。

園子「あの子達……。何してんの?」

蘭「新一が考えた暗号を解読してるの。新一がこのパーティーの為に、コナンに本物の事件と似たようなゲームを持ちかけてきてね……。多分、それをやってるんだと思うんだけど……」

和葉「今も昔も……。工藤君がやつとる事、違いないなあ……」

蘭「そ、そうだねえ……」

和葉の鋭い発言に、蘭は苦笑いを浮かべた。

ふっと、テーブルの上で暗号の答えを考えていた子供の一人である光夜が、突然席を立った。

そして、頻りに辺りを見渡す。

勿論、そんな光夜の大きな変化に、周りが気付かないはずがない。ずっとメモ洋紙を見ていたコナンと平矢は、いきなり椅子から降りた光夜に問い掛ける。

コナン「おい、光夜」

平矢「なんや？ どないしたんや？」

二人が尋ねてみると、光夜は少し不安げな表情を浮かべながら、口を開く。

光夜「親父がない・・・」

と・・・。

11・誘拐ゲーム(後書き)

ども

最近、パソコンが勝手に『KAN A』になってしまい、使いづらく
なってイライラしている

K I Dでーす!!

ったく・・・。

一回『KAN A』指定にすると、ホント厄介ですよ!

この機種のパソコン・・・。

さかないにさかないすなとらこちのちすちもちかちめめめる

(これ・・・。また勝手に『KAN A』表示になってしまった例
ですよ)

ちなみに打った文章は、

『って言ってるそばからまた・・・。』ですからね。

(文字数ですら違ってるっていう・・・。)

ところで、コナン。

快斗は?

コナン

「お前がこんな単語打つから、慌てて逃げてったよ」

K I D

こんな単語……？……

あっ！！

ち、違うよ、快斗！

これ『さかな』って打ちたかったんじゃないかって『っ』って打っただけだから！！

快斗

「嘘付け！！ 俺をいじめて遊んでただけだろ！？ そうだろ！？」

KID

んなわけないだろ！！

（っつか……。あんたいじめてメリットあんの？）

コナン

「ハハハ……」

（俺は面白いけどな……）

「雑談が長引いたので、この辺で失礼」

KID

ちょっと待て！！ コナン！！

それこっちの台詞！！！！！！

12・ゲーム開始

午後6時31分 パーティー会場。

光夜「親父が……。親父が何処にもいないんだっ!!」

光夜がそう叫んだのは、皆にゲームの説明と、父である新一に参加者増加許可を貰ったすぐ後。

『叫んだ』と言っても、所詮は子供程の身長しかない者達が聞ける程の声で、大人達は一切として、気付いてなどいなかった。妻でもある青子でさえも……。

平矢「トイレにでも行ったんとちゃうか？ 俺のオヤジの後、光夜のおトンも行ったみたいだし……」
と言いながら、平矢は親指を肩から後ろに回し、男性用トイレの扉を指差す。

確かになくはないが……。

コナン「じゃあ……。俺と平矢と光夜の三人で見ってくるから、蓮達はここにいろよ?」

蓮「いいけど……。心配し過ぎじゃない?」

コナン「とにかく待ってろ」

コナンは最後に念を押し、皆にその場にいるように言った。

蓮達がその場を動かないのを確認すると、三人は男性用トイレの中に入る。

小さな扉の代わりに、トイレの数は多かった。

個室は全部で8つ。

両側に4つずつで、どれも洋式。
用具類はトイレの通路の途中にある為、誰かいるとすれば、この個室しかない。

のだが……。

光夜「全部……、鍵のところ、青だぜ？」

平矢「鍵も掛かってへんし……。誰も入ってへんぞ？」

コナン「んなバカなっ……。光夜！ 平矢！ 光夜の父さんがトイレから出てくるの、見なかったのか！？」

平矢「んなモン、見たわけないやろっ！？」

光夜「見てたらトイレなんて探さないさ!!！」

二人の意見に、コナンも口籠る。

一旦トイレから出た三人を、女子組は心配していたのが、慌てて駆け寄ってきた。

もっとも、三人とも光夜が不安そうな顔をしているのと、後ろから快斗が出てこないことから、全てを悟ったらしい。

蓮「何処行っちゃったんだろっ……。ここは海の上よ？ 人が簡単に消えるだなんて……」

コナン「人が……消える……。……そうか！

もうゲームは始まつてるんだ!!！」

メンバー全員「えっ!？」

今更ながら、コナンがふっとこの事を思い出し、手の平の上で拳を『ポンッ』と叩く。

一体自分達は、何を慌てていたのだろっ……。
新一の作ったゲームだと、知っていたはずなのに……。

さつきから皆揃いも揃って『ゲーム ゲーム』とはしゃいでいたのに、いざ始まるとここまでパニックを起こすのか……。

平矢「『ゲーム』って……。工藤のオトンが作った、あの誘拐ゲームの事か？」

コナン「ああ！ 多分父さんの事だ。光夜の父さんも仕掛け人で誘ったんだろう。となれば、必然的に平矢の父さんや、阿笠博士、哀姉ちゃんも数に入る……」

光夜「しかし……。誘拐される人間が、まさか俺の親父とはねえ……」

確かに……。

元『月下の奇術師』と言われ続けていた人間には『被害者役』はなんと不釣り合いだ。

大体、普通こういうゲームを作ったのであれば、そういう役は作った人間。

つまり新一が演じるのが常識……。
それとも、新一は『誘拐犯役』か……？

直子「それじゃあ、早速……。最初の問題からやってみようよ」
紅葉「せやけど……。文面も何も意味不明やで？ これ……」
光夜「それに……。『青い光の照らす場所』って、何の事だよ」

コナンのメモ洋紙に書かれたヒントや問題文を読んで、皆が口々に言う。

現時点ではどれ意味不明なのだが、一番意味不明だったのは、新しいヒントだ。

通常『ヒント』というものは、問題の答えを分かるように言う。言わば、答えを導き出す為の情報のようなものだ。

それが分からなければ意味がない。

ましてやその分からなさ故に、もはやヒントにもなっていないという有様はマズイ……。

まるで問題が2つ出されているに等しくさえ、コナンには感じた。

平矢「なあ……。もしかしたらこれ、二つに文字区切ってまうとちやうか？」

ふっと何かにひらめいたかのように、平矢が徐に口を開いた。

平矢が言っているのは、この7つの単語が書かれている問題文。

「あしうそくそし」……。

何の事なのか分からないのは置いといて……。

平矢の言ったように、コナンはその文字を二文字ずつに区切ってみた。

で、ここで分かった結論。

光夜「絶対……。答えにもヒントにもなつてねえだろ……」

紅葉「その前に……。コナン君のおじさん、こんな下品な言葉使わへんよ！」

コナン「大体……。最後の『し』って何んだよ？ 言葉にもなつ

てねえし、漢字なんつったら、かなりあるぞ?」
と、皆はそれぞれ反論した。

ちなみに平矢の言ったように二文字に区切ると『あし』『うそ』『くそ』『し』。
まあ、下品などの点を除けば、一応『あし』『うそ』『くそ』は言葉になってるが、最後の一字の『し』は、全く以て言葉になっていない。

せめてこれが6文字か8文字なのであれば、説明は付けられるのだが……。
そんな事を脳裏でばやいてみると、紅葉がハツとしたように口を開く。

紅葉「もしかしたら……。この最後の『し』に、あと一字足して、二文字の言葉を作るとちやう?」

蓮「それで共通点が見つければいいのね」

紅葉「うん。えっと……。『し』から始まる言葉で二文字は……」

そう言いながら、紅葉が勝手にコナンの手帳にメモる。

。しお、しき、しし、しそ、した、しぬ、しま、し……

平矢「キリあらへんわ!」

の、一言で強制終了。

おまけに、どれも残りの言葉の共通点はない。

これも完璧に的外れだ。

ふっと、紅葉のメモを見た蓮が『ふーん』と分かった様に頷く。それを見た紅葉は、何が納得したのか分からない、と言った感じで、蓮の顔を覗き込んだ。

紅葉「どないしたん？　ウチのメモ、なんかおかしいんか？」

蓮「ううん。ただ紅葉ちゃん『し』に何か一文字をくつつける時に『あいうえお』順に試したんだなあ〜って思ってた……」

紅葉「えっ？」

そう言われて、紅葉もメモの文字を見てみる。

確かに、書かれている文字は全て『あいうえお』順だ。

この様子だと『ま行』まで確かめたのだろう。

その次に来るはずの『しみ』の『み』が書かれていないのが、その理由だ。

紅葉「そうなんよ。この方が分かりやすいから……」

蓮「やつぱりね。でも私も、時々クラスメイトの誰かが居なくなつた時、そうやって調べちゃう事があるんだ……」。あつ！！」

紅葉「ん？　どないしたん、蓮ちゃん」

と、突然何の前触れもなく大声を上げた蓮に、紅葉が驚いた表情を浮かべる。

が、蓮はその紅葉の問いかけには答えず、いきなり紙を見ながら考え込んでいたコナンの手から、メモ用紙を奪い、見つめた。

そのあまりにも突然な行動に、コナンが一瞬ムツとしながら、蓮の方に視線を向ける。

コナン「おい、蓮！ 勝手に取るなよ！ 見てんだから……」

蓮「……やっぱり……。やっぱりそうだ……」

コナン「何が？」

『人の話は無視かよ』と、半分呆れるコナンに、蓮は目を輝かせながら……。

しかし、まだ自分が分かったのかと驚きながら、メモ用紙を人差し指で差ししながら、ハッキリとこう言った。

蓮「……分かった……。分かった……。分かったのよ！

この暗号の……。問題の答えが!!」

12・ゲーム開始(後書き)

どーも

実は日、月、火、しばし風邪で寝込み気味だった

KIDでーす!!

(もう完治しましたが・・・)

コナン

「マジかよ!?(@|@;) まあ・・・、なんか今流行ってるみたいだから・・・」

KID

こっちも仲のいい友達が風邪ひいてたから、多分それが移ったんだろーな・・・。

(噂によると、こっちも前の席の奴に移ってしまったみたいだし・・・)

快斗

「まっ! 周りも気を付けた方がいいってことだな ゲホッ!

ゴホッ!」

コナン

「お、おい! お前、風邪ひいてねえか!?」

KID

そう言えば咳と喉だったなあ・・・。

風邪の症状・・・。

コナン・快斗

「ッゲーッ!!!(O)!!」

KID

それで失礼しまーす ミ

(冗談抜きに、本当に流行っていますので、皆さんもお気をつけて・・・)

コナン

「快斗！俺に移すなよ!!」

快斗

「んな無茶な・・・。ゲホッ!!」

13・新少年探偵団大疾走

コナン「本当なのか!? 蓮! 暗号が解けたって……」

蓮「うん! 私、やり方分かっちゃった!」

と言うと、蓮は問題文の書かれている紙と、鉛筆と消しゴムが入っているペンケースを取り出した。

蓮「やり方は、この紙に書いてあるひらがな7文字を『アルファベット』の順番に変えるのよ」

メンバー全員「ア……『アルファベット』の順番?」

と言っても、まだ小学校1年生のメンバーと言うのもあって、ちゃんとアルファベットの順番と数を言える者は、極限られている。

だとすると、英語好きな蓮が一番得意とする問題だろうか……。

蓮「その前に……。皆『アルファベット』言える?」

コナン「んなの」

平矢「楽勝やで!」

光夜「親父がよく使うし……」

直子「時々3チャンネルで流れてるし……」

紅葉「歌もあるもん!」

とは言ったものの、あまり自信があったわけでもなかったらしく、皆は口を揃えて、順番にアルファベットの歌を歌ってみた。

と言っても、実際は『歌っている』というより、互いに『確認し合っている』と言った方が、この場では合っているような気がするが……。

メンバー全員「A・B・C・D・E・F・G……。H・I・J・
K・L・M・N・O・P・Q……。」

蓮「ちよつ、ちよつと待って!! ストップ! ストップ!!」
メンバー全員「？」

いきなり蓮に止められ、皆は何かあったのかと、その場で相手の顔を見合す。

紅葉「どないしたん? 蓮ちゃん……」

蓮「誰か一人……。順番間違えてた……」

直子「えっ?」

蓮「『L・M・N』のところ……。誰か別のアルファベット言っ
てた! 絶対に!!」

『そこまで言うのなら』と、コナンは皆にもう一度、その問題の部
分だけを言うように伝える。

そんな彼らの少し離れたところでは、密かに新一が、皆の様子を観
察していた。

片手にはトランシーバー。

後ろには新一同様、皆の様子を見ながら待機している服部……。

トランシーバーの連絡相手は、誘拐者役の快斗だ。

何かあった時には、これで連絡を取る事になっている。

服部「どうや? 状態は」

新一「蓮ちゃんが気がついたみたいだけど……。なんか『アルフ
アベット』の言い合いで間違いがあったみたいで……。皆で言い
直してるよ」

服部「それって無駄なんど……」

新一「まあ、いいじゃねえか。気長にやらせれば……。それに、結構小学生相手に小学生は、勉強になるはずだしな……」

そうこう言っている間に、皆はアルファベットを言い直す。その結果……。

紅葉「平矢や！ 平矢！！ 平矢がアルファベットの並び順、間違ごうてるねん！ なんで『L』『M』の次に『S』が来んの！？ 次は『N』やろっ！」

光夜「本当だよ！ ポテトのサイズじゃねえんだぞ！？」

平矢「じゃあないやろっ！！ ウロ覚えなんやから！ 服部（そこは威張るトコちゃう……！！）」

父の胸中の突っ込みも届くはずがなく、平矢は腕を組みながら『ケツ！』と言ってソツポを向く。完全にこの態度が高校生だ。

コナン「それで？ さっきの暗号解読に戻るけど……」
蓮「あ、うん。だからね、この文字は『あしうそくそし』でしょ？ それをアルファベットの順番からやると……。『あ……A』『し……L』『う……C』『そ……O』『く……H』『そ……O』『し……L』だから、全部英語の部分を並べると……」

A、L、C、O、H、O、L……。

アルコール
ALCOHOL！！

コナン・光夜「アルコール！！」

直子「お酒ね！」

紅葉「凄いやん、蓮ちゃん!!」

直子「さっすが！ 警察の娘!!」

蓮「た、偶々だよ……。そんな大げさな……」

と言いながら、蓮は頬を赤らめる。

まあ、最初に疑う解き方がこのくらいだったので、すぐに分かっただけの話なのだが……。

紅葉「せやけど……。ここにお酒なんて、偉いぎよーさんあるで？ ワインもウイスキーも、ビールも……。どれを探せばええの？」

その紅葉の問いかけに、皆がまた頭を抱える。

確かに、自分の祖父でもある小五郎も、さつきからワインだの、シヤンパンだの、カクテルだの……。

そう言えば……。あのカクテルは何処から持ってきたのだろう……。

パーティー会場にあるテーブルの上には、カクテルは一切置かれていない……。

だとしたら……。

コナン「あっ……。あつた!!」

コナンの目に飛び込んできたのは、小さなバーだ。

どういうのかと言うと至ってシンプルで、ただ単にカウンターで囲まれているところに、カクテルを作る男性が経っているだけのもの……。

でも品数に関しては、小さいながらも多い方だ。

もしもあそこにヒント、または正解があるとすれば……。

コナン達は何も言わず、急いでそのバーの元へと向かった。
今はタイミング良く、人は誰もいない。

今なら色々訊き出すのも探すのも簡単はずだ。

ふっと、同じくバーに向かっていた直子が、何かを思いついたように口を開く。

直子「ねえ……。もしかしたらさっきのヒント、お酒のボトルの色じゃないかあ……」

メンバー全員「えっ？」

直子「ほら。『お酒』って、色んな色のボトルがあるじゃない？

だから、その中の青いボトルに、何かヒントがあるんじゃないかなあ……」

確かに、その線もなくはない……。

今の酒のボトルの色は、本当にさまざまだ。

黒もあれば白もある……。

緑もあれば青もある……。

透明もあれば、半分透明に近い色のもの……。

最近では、ボトルの色がピンク、紫などと言ったもの、珍しくはない「時世だ」。

青いのがあるのは、当然のこと……。

きつとあのバーにも、2〜3本はあるはずだ。

平矢「そう言えば……。俺のオヤジが事件の捜査で行ったスナックにも……。青いボトルの酒がぎょーさんあったで。全然珍しいことちゃうみたいやな」

コナン「ああ！ だとしたら、早めに確かめに行こう。あの小さなバーで『青いボトルの酒』って言ったら、かなり限られてくるだろうからな」

そんな二人の会話が聞こえたのか、新一は子供達は勿論、パーティーに参加している人々にも見られないようにしながら、トランシーバーで快斗と連絡を取った。

新一「快斗……。思いの外、子供達が暗号に早めに気がついた。スタンバイしてくれ」

快斗『リョーカイ』

能天気な声が一言聞こえたのと同時に、無線が『ブチッ』と切れる。その音を聞きながら、新一は視線を子供達の方に戻し、そして顔を歪めた。

新一（あちゃーっ！！ やっぱ子供相手の暗号に、未成年者禁止物はまずかったか……。）

そう胸中で叫ぶ新一の目の前には『青いボトルの酒を見せてくれ』と構わずに尋ねる子供と、それに反対するマスターがいた。

蓮「お願いします！ ちょっとでいいんです！！」

マスター「ダメだっ！！ ダメだ！！ これは子供の飲むもんじゃないんだ！ 触るのも禁止！！」

平矢「なんでや！！ 誰も『飲む』とは言うてへんし、触るくらいなら別にええやろっ！？ ちゃんとそっちに返すきに。せやから・

「
マスター「ダメなモノはダメなんだっ！！ ほら、子供は帰った！
帰った！！」

と言って押し出されるが、自分達も黙っちゃいない。

コナン達がマスターと話している間に、紅葉はこっそりと裏に周り、
青いボトルの酒を探してみた。

案の定あったことはあったのだが、かなり上の方の棚である。

紅葉はどうにか近くにあった椅子を気付かぬように引き寄せ、棚の
上のボトルに手を掛ける。

その時だ。

マスター「ん？ こ、コラ・・・っ！！ 何やってんだっ！！」

紅葉「きゃあ！」

いきなり怒鳴られたのに驚いた拳句、紅葉がボトルを床に落とした。

が、どういうわけか、ボトルは割れない・・・。
と言うよりも、少々弾んだような・・・。

恐る恐るコナンは手を伸ばし、ボトルに触れる。

そして出てきた結論・・・。

コナン「これ・・・。ペットボトルだ・・・」

蓮「ペット・・・、ペットボトル！？ 本当だ・・・」

コナン「だろ？ 多分最近のものなんだと思うぜ？ その理由は、
今みたいにならないようにする為・・・」

蓮「えっ・・・？・・・そ、そっか・・・。今みたいに落と
した時に、割れないようにする為ね」

そう言いながら、蓮も納得した様子で頷きながら、ペットボトルを確認する。

これと言つて、犯人の手掛かりはない……。

それにあの『青い光』は、本当にこのペットボトルに入っていたお酒を意味していたのだろうか……。
にしては、文章がおかしいように感じたが……。

ふっと視線を変えてみると、何やらボトルを見つめている蓮の目の辺りが青く光っている。
きつとボトルの色が、天井にあるライトの灯りに反射しているのだから。

反射……？

コナン「そうか……。分かったぞ！　蓮！　紅葉！　その酒を元あつた場所に戻すんだ！」

蓮「えっ？」

紅葉「なんで？」

コナン「反射だよ！　そのボトルがライトによって反射しているところに、次の問題か答えがあるんだ！　ソイツを動かしたら、いつまで経つても分かんねえんだよ！」

蓮「そっか……」

紅葉「早よ、戻そう！」

蓮「うん！」

二人は同時に元の場所に、先程のボトルを戻してみる。

すると、そのボトルにライトが反射され、一か所だけ青く光ってい

る場所が出来上がった。
左から2番目の、黒い椅子だ。

皆は椅子の周りをくまなく調べてみる。
手掛かりを見つけないのに、その時間は掛からなかった。

平矢「あつたで！ これや!!」

平矢は椅子の下から、丁度椅子の真下のネジとその隙間に挟まっていた紙切れを取り出した。

二つ折りになっていると云う事は、何か書かれているという証拠・
。。。
コナン達はゆっくりと、中を開けてみる。

類

最初は黄色で、次は緑
その次は茶色になり、透けると黒と白の斑模様
今はまだ緑の途中

これが二つ目の暗号だった。。。

14・二つ目の暗号

午後6時55分 パーティー会場。

どうにか一問目の問題を解き終えたコナン達は、休む間もなく二問目の問題に取り掛かっていた。

と言っても、またしても内容はチンプンカンプン……。

色を含んだ長めの文章と、決まった五線譜に乗っている音符が4つに、その恥つこに何故か『類』の字。

一体これで何を当てると言うのだろうか……。

一応先程の問題同様の解き方を試そうとしたか、内容的にも文章的にも出来ないと分かり、ものの数秒で『違う』と決定。
考え方はまた一からだ。

平矢「しっかし分からへんなア……。この文章と音符、それに『類』……。一体何露わしてるんやろ……。」
紅葉「とりあえず……。簡単そうな音符の問題から、解いた方がええんちゃう？」

光夜「俺もその意見に賛成。この文章は、後でじっくり考えても、遅くなさそうだからな……。」
そう言いながら、皆の視線が音符の方に注がれる。

ふっと、その音符を見ていた直子は、ここである事に気がついた。
4つの音符が乗っている五線譜は、上から二段目の線を中心。
という事は……。

直子「これって……。『レ』だよな？」

蓮「えっ？」

直子「この譜の読み方……。間違ってたなら、ドレミの『レ』だよ」

蓮「じゃあ……。その通りに譜を読むと『レレレレ』ってこと？」

『レレレレ』……………。

なんだそりゃ……………。

平矢「そう言うたら、何かであつたなア……………。会話でいつも『レ』しか出てこーへんキャラクターの漫画……………」

光夜「ああ……………。バカンの『レレレのおじさん』か……………」
コナン「関係ないと思うけど……………」

いや……………、絶対に関係ない……………。

100円賭けてもいい！

絶対に関係ない！！

直子「もしも『レ』として見るんだったら、これ……………。何かの曲の譜なのかなあ……………」

光夜「……………んな『レ』だけの曲があつて堪るかよ！」

平矢「つてか……………。それって曲にもなつてないやん……………」

確かに……………。

曲にはなつてないだろうが……………。

紅葉「でも『どつかの曲の一部の楽譜』っちゅう事もあるやろ？」

蓮「うん……………。全部が全部外れてないと思うけど……………」

そっから先は、その女性3人の意見に基づいて、皆それぞれ、色々

な曲を例に上げてみた。

が、やはり『レ』は出てきても、それが4回連打する曲は見つからない。

拳句の果てには、肝心の『レ』の音が何処にも出てこない曲まで出てくる始末……。

完全に手詰まりだ。

そもそも小学1年生で習う曲は、数が限られている。

もしも新一がその部分を考えずに問題を作っていたとしたら……。確実に諦めざる負えないではないか……。

ましてや、ここにはPCもないと言うのに……。

メンバー全員が途方に暮れ始めていた。
その時。

くくくくく？

コナン(!!)……………この音……………このメロディー……………)

間違いない!

今まで必死に探していた『レ』の音が連打する曲だ。

メロディーだけだが、間違いない……。

コナンはすぐに辺りを見渡し、音の主を探す。
そこでようやく目に付いたのは、平矢の母親の和葉だ。

和葉「あつ！ メールや。誰からやる……」

蘭「和葉ちゃん。着信音変えたんだ」

和葉「うん。ええ曲、携帯に入ってへんから……」

コナン「ねえ！ 平矢のお母さん！ その曲、なんて曲っ!?!」

和葉「えっ!?!」

いきなりコナンに問いかけられて、和葉一瞬蘭と顔を見合し、驚きながらもとりあえず答える。

和葉「『からたち野道』の、オルゴールメロディーやけど……?」

コナン「流れてた部分……。どんな歌詞っ!?!」

蘭「ちょ……。ちよっと、コナン！ どうしたのよ、急に……」

コナン「二問目の暗号の答え……。これかもしれないだ!?!」

と言いながら、コナンは蘭達の目の前に、問題用紙を『バツ!』と見せる。

蘭と和葉はゆっくりと、その問題用紙の紙に顔を覗き込み、内容を読み始めた。

その後で、4つの『レ』の音の譜を見つめる。

蘭「確かに……」

和葉「そうみたいやなあ……。この部分、サビの楽譜と一緒にやもん」

コナン「何って言ってるの!?! この部分の歌詞!」

平矢「早よ、教えてや！ オカン！！」

二人に同時にせがまれ、和葉は先程の驚きが消えぬまま……。
プラス恥ずかしさを含めて、メロディーの部分の歌詞をアカペラで
歌う。

和葉「『からたちのみち』はなふくこみち』やけど……。？ も
う！ 恥ずかしいんやから、これ以上歌わせんといて！！」

平矢「も、もうええよ……。オカン……。それだけ聴けば、十
分やから……」

平矢は半分自分に対してキレ掛かっている和葉をどうにか抑え、後
ろにいる女子3人に問い掛ける。

平矢「どの部分や？」

直子「丁度『からたち』の部分だわ」

となると、この端に書かれている『類』は『からたちの類』という
事になる。

一応これでコマが出来ているのだとすれば、残りのこの長い文章の
部分も解けるかもしれない。

が……。その前に……。

コナン「ねえ、母さん。『からたち』って、何？」

まず第一に、根本的な事を知らない。

『からたち』なんて、ほぼ全くと言っていいほど聞いた事がない。

何となく、初めて聞くニアンスでない事は、脳が感じているのだが。
……。

蘭「『からたち』って言うのは、柑橘系の植物の事よ」

直子「柑橘系？」

青子「そう。たとえばミカンとか、オレンジとか……。その辺の仲間で、白い花を咲かせるの」

蘭「そうそう。実の方も、見た目はミカンみたいなんだよ」

園子「まあ……。食べられないんだけどね……」

と言う事は、この問題は『柑橘系の植物を探せ』。
もしくは『柑橘系に関わるものを探せ』という事になる。

まだ気になる事は多々あったが、これだけ分かれば、取りあえず十分。

コナン「ありがとう、母さん！」

平矢「ほな……。皆、行くで！」

直子・蓮・紅葉「うん！」

5人は聞けるだけの事を聞き終え、一人パーティー会場の中央で待っている光夜の元へと走り出した。

そんな5人の後ろ姿を、蘭は半分不思議そうな顔で見つめる。

蘭「新一……。コナン達にどんな問題作ったんだろう……」

和葉「さあ？ にしてもムカツクわ、平次。同じ船に乗ってるちゆうんに、なんでメール送ってくんねん！ しかも内容『部屋に忘れもん取りに行ってくる』って……。勝手に行ってきたらええやないの！！」

と言いながら、携帯のキーホルダーの輪の中に指を入れて振り回す和葉に、蘭はしばし苦笑いを浮かべた。

その頃、光夜の元に戻ってきた5人は、現段階で分かった事を説明する。

音符の『レ』が連打する曲が『からたち野道』だったということ・

その『からたち野道』の『からたち』の部分が、丁度『レ』が4打するところだったということ・・・。

端に書かれている『類』は『からたち』同様の『柑橘系』の事を示していると言ふこと・・・。

などなど・・・。

平矢「しっかし・・・。こんな俺らの知らん曲、問題に出されても困るわ！ 一体何考えとんねん！ あの二人・・・」

コナン「いや・・・。多分この問題を考えたのは、お前の父さんだよ」

半分自信有り気と言ふコナンに、平矢は座っていた体制を変え、コナンの方に体を伸ばす。

平矢「なっ・・・、なんやてっ！？ 理由は！？」

コナン「根拠は、ついさっき和葉さんに送られてきた、メールの内容・・・。別に人に知らせる内容でもないのに、何故かこのタイミングでメールをしてきた。つまり・・・、俺達に『この曲だ』と教える為に、わざとメールを送った可能性が高いんだ」

そもそもタイミングとか言う前に、自分の父親である新一が、仲のいい快斗を計画者として誘っておいて、同じくらい仲のいい服部を仲間に入れない事自体おかしいのだ。

と言ふことは、最初からあの2人は仲間として、このゲームの計画

者に入っている可能性が極めて高い。
それにタイミングを見計らったと言う事は、どこかで僕らを監視している証拠。

丁度最初の一問目辺りから、新一と服部の姿を見ていない。
きっとどこかに隠れて、自分達の事を見ているのだろう。

まあ……、探す気はないが……。

平矢「もしそうやとしたら……。危うい綱渡りやで？」

コナン「いいや。本来は平矢が母親のメール着信音を覚えていれば、それで済む話だったんだ。なのにお前がそのメロディーを覚えてなかったから、どんな些細な事でもメールをしなくちゃいけなくなっただよ」

光夜「それって……。平矢のせいってこと……？」

光夜の問いかけに、コナンはコツクリと頷いた。

それを見て、平矢は半分後ろ髪を書きながら、満面の笑みで「いや
」 すまへん、すまへん」と謝る。

見た感じ、本気で謝っているようには見えないが……。

まあ……。よしとしよう……。

紅葉「せやけどどないするん？ 『柑橘系』言うても、ここにはぎよーさんあるで？ カットフルーツのオレンジとか……。ジュースのグレープフルーツとか、レモネードとか……。」
蓮「うん。香り付けのも、いくつかあるみたいだし……。キリないよっ。」

確かにパーティー会場の料理類のいくつかは、端にレモンが添えられていたり、オレンジの切ったものや、すだちなどが置かれていた。この中でどれか一つ、問題に関わるものを探すとすると、それこそ終わりが無いが……。

コナンは一人自信に満ちた笑みを浮かべ、首を横に振る。

そしてこう言った。

コナン「いいや……。探すのは、実や汁じゃない……。葉だよと……。」

14・二つ目の暗号（後書き）

どーも

最近『百日咳』が流行り始めている環境下にいる
KIDですー！！

流行っているのは学校内と寮内。

一応、こっちは昔予防注射受けたんですけどねえ〜……。
効き目がきれる頃なんでしょうか？

服部

「確かそれ……。子供が感染すると危ないんやろ？」

快斗

「ああ……。特に『小さい子供は危ない』って、よく聞くけど……

「・

（二人同時に『チラッ……』）

コナン

「なっ……。なっ……。なんだよ！？ その視線はっ！！ あ
れは幼児の話であって、小学生じゃねえだろっ！？」

快斗

「いや〜……」

服部

「工藤……。今平均の小1よりも小さいからなあ〜……」

コナン

「馬鹿言ってるじゃねえ!! 俺は高2だぜ!? んなモン、気合いで」

服部・快斗・KID

「「無理だよ!!」「」

KID

それでは ミ

15・三つ目の暗号

メンバー全員「？ 葉・・・？」

コナンの予想だにしない答えに、皆は一斉に『？』マークを浮かべた。

当たり前だ。

『柑橘系』というヒントが出てきたところで、皆がそれぞれ、柑橘の実や果汁が怪しいと言っている中、一人だけいきなり『葉っぱだ』と言い出してきたのだから・・・。

平矢「なんで『葉っぱ』なんや？ 実とか汁とかの可能性が、いっちゃん高いはずやろ？」

コナン「思い出してみるよ、平矢。あの暗号に書かれてた文字を・・・」

そう言われて、どれどれと暗号の文章を読み直してみる。

最初は黄色で、次は緑

その次は茶色になり、透けると黒と白の斑模様
今はまだ緑の途中

コナン「『緑』って単語が入ってるだろ？ 普通に食べ物用のフルーツに緑色のモノはあっても、柑橘系はない。せいぜいオレンジか黄色だ。勿論飲み物も・・・。最後の文字が『緑』ではなくて『黄色』とかだったら、フルーツやジュースに間違いなかっただろうけどな・・・」

平矢「なるほど・・・」

直子「じゃあ……。あの緑色のあれは？ 味付け用のものだよね？」

直子の指差す先にあったのは、まだ青いゆずの実だった。

カルパッチョのドレッシング代わりとして使われているものである。

青い状態と言うのもあって、ゆずの実自体はかなり小さかったが、確かにこれも『緑色』の柑橘系……。

直子「あれの可能性もあるよね？」

コナン「ああ……。実はそのゆずの実……。あそこから取ったヤツなんだよ」

直子「えっ？」

そう言つて、コナンは自分の後ろの方に首を向ける。

そこにあつたのは、植木鉢に入ったままのゆずの木……。

植木鉢に入れられたゆずの木は、自分達とほぼ同じ背丈くらいもある。

これは観賞用として、新一の母、つまりコナンの祖母が置いていたものだ。

確かにその木からは、まだ青いゆずの実がゴロゴロと成っている。

それに、最初にコナンの言っていた緑の葉も……。

蓮「もしかして……。あそこに三つ目の問題が？」

コナン「ああ。あるかもしれないってコト。とりあえず、見に行ってみようぜ」

皆はそう言つと、やや小走りゆずの木の傍へと近づいた。

いざ近くで見ると、やはり大きい。

一番身長の低い直子は、若干高さが追い抜かれている。

紅葉「直子ちゃんよりも大きいわあ」

直子「でも……。三つ目の問題、ないみたいだね」

蓮「光夜！ あった？」

光夜「いいや。全体回って見てみたんだけどなあ……。コナン、本当にこれであってんのかよ！」

コナン「もっと慎重によく探してみろよ」

そうは言ってみても、やはり木には問題の紙が見当たらない。

確かに葉は多い方だが、探すのに支障が出るほどではなかったし、こんなにも探していて見つからないはずがない。

まさか……。

的外れだったか……。

そうコナンが思い始めた時だ。

紅葉「ん？ なあ、これ何やる？」

蓮「うーん？」

直子「何？ 何？ 何か見つけた？」

紅葉「あ、いや……。これ何やるって思っ……。」

そう言う紅葉の視線の先に、何やら妙な物体がある。

黄色掛かったクリーム色の壁に、大きさ約5センチほどの緑色の突起物が、細い糸一本で、その体を支えていた。

今まで見た事もなかったというのものもあるが、別に差ほど気持ち悪いとは感じなかった。

ただ『ちよっと気にはなる』と言った感じである。

一方の光夜は、それを見て『ハッ!』と思った。

光夜「そうか! これだ! これが三つ目の暗号の隠し場所のヒントなんだよ!」

メンバー全員「えっ?」

光夜「これはアゲハ蝶の蛹さ! アゲハ蝶は、成虫が黄色掛かっていて、卵も黄色。生まれた幼虫は最初は黒っぽいけど、すぐに真緑色に成長する。蛹になれば数日で茶色くなり、羽化直近の時は、蛹が透けて、黒と白の羽が微妙に見えるんだ! あの問題の文章と一緒だよ!」

一瞬『どうしてそこまで知っているのか』と思ったコナンだったが、詳しく聞いてみたところ、自由研究でこのアゲハ蝶を育てたのと……。

そりゃあ、詳しくて当然だ……。

コナン「確かに……。アゲハ蝶は柑橘系によく付くし……。問題文とも合ってる……」

蓮「じゃあ、どっかに三つ目の暗号が……」

紅葉「あつた!」

と言ってる傍から、紅葉が蛹の隣の壁を捲ってみる。

すると、何やら文字の掛かれたメモ帳程の紙が出てきた。

どうやら、壁と同じ色に紙の裏を染め、軽くノリか何かで壁に貼り付けていたようだ。

通りで見つからなかったはずである。

紅葉「えつくと……。中の文章は……」

二つ前は灰

一つ前は赤

今は紺の闇に、藍色の道

白い歩道に沿って歩け

またしても『色』が入った暗号だ。

もっとも3つ目は、ある程度のところまでは分かっただろうほど、簡単なもので……。

コナン「これは……」

平矢「間違いあらへんな」

光夜「ああ」

蓮「『紺の闇』に」

紅葉「『藍色の道』言ったら……」

直子「アレしかないもんね」

皆は笑みを浮かべて、同じ推測を口にする。

男子メンバー「今の空と！」

女子メンバー「今の海!!」

そうと決まれば、6人は一斉に外に飛び出していくのだった。

15・三つ目の暗号(後書き)

どーも

コナンの特製DVDが届くのをひたすら待ってる
KIDでーす!!

応募したのがちよい遅かったし・・・。
まだ掛かるかなあ・・・。

コナン

「だから『早めに出せ!』って言ったのに・・・」

KID

いや～・・・。

それが結構難くて・・・。

快斗

「何があつた?」

KID

色々と・・・。

それでは
ミ

16・残る疑問

一応『空』と『海』が関係していると感じ、6人は一斉に船の外に飛び出したのだが、ここから先が疑問だ。

何んせ、何処を探せばいいのかわからないし、辺りは夜の海と空と言うのもあって、真つ暗だ。

時々聞こえてくる波の音は、リラックス出来ると言うよりは、逆に恐怖の水音に感じてくる。

こんな場所に子供6人だけで出てきたのだから、尚更怖い……。

蓮「暗いわねえ……」

紅葉「ほんまやねえ……」

直子「ねえ、ところでなんで、最初の文章に『灰』と『赤』があったの？ 海がそんな色になる事、あったっけ……？」

その問いかけに、皆が首を横に振る。

蓮「一応……。全部の問題に『色』が出てきてるのは分かってるけど……」

平矢「色……？ ……そうや！ あれは空の色や！ 空の色！ それやったら、全部辻褃が合うで！」

と、一人興奮気味の平矢に、光夜が冷たく口出しをした。

光夜「何言ってるんだよ、平矢。昨日はともかく、一昨日は水色が青だろ？ 『晴れ』だったんだから……」

紅葉「えっ……？ 一昨日は『大雨』やったで？ 東京の方は『

晴れ』やったみたいやけど……」

光夜「えっ？ あ、そう……」

コナン「……」

しかしこれからどうする……？

一応空の色に違いはなさそうだが、昨日と一昨日の天気予報は、全くもって暗号の隠し場所のヒントにはなっていない……。

あれは『色』についてのヒントだ。

『紺』と『藍色』は夜空と、海……。

『道』になっていることは、この船のレールの事を言っているのだろっ……。

となると……。

コナン「やっぱり『白い歩道』を解かないと、先へは進めないか……」

と、当然の事ながらそう呟く。

それを脳裏に焼き付けて、コナンは辺りを隈なく探し始めた。

最初に疑ったのは、船の外側にある白く細い線……。

おそらく、暗闇でも足場が分かるように引いてあるのだろう。

しかもその引いてある場所は、操縦室や厨房などに向かう際に通る道。

現にコナン達もその道の上にいる。

見るからに『歩道』のようで、半分当たっているようにも見えるのが……。

どうもコナンの中で、何か引つ掛かる……。
そもそも先程から出されている問題から考えてみても、こんなに答えが簡単な筈がない……。

コナン「もしこれが正解だったら……。単純過ぎだよな……」
光夜「だけどそれ以外……。怪しい感じのモノはないぜ？ まあ……。この線は途中の広いところで切れてたりしてるから、完全な歩道の線とは言えねえけど……」
直子「途中で切れてる？」

光夜の話に、直子は首を傾げながら『？』マークを浮かべた。
その反応に、光夜が分かりやすく答える。

光夜「ほら。普通歩道の線って、割と広い道路によく伸びてるだろ？ そうしねえと危ないから……」
蓮「そう言われてみれば……。狭い道に曲がる時には、いつの間にかなくなったりするけど……。でも広いところじゃ、勝手になくなったりしないよね。逆にこの船の線は、狭いところにはあるけど、広いところにはなくなってるし……」

確かに、この船には野外プールや、野外喫茶店などがあるのだが、そのどちらもある場所には、この白線は見られない。

しかもその場所は、比較的皆広い……。
狭い場所にはこんなに多く引いてあるのに……。

コナン「多分それ……。狭い通路は危険だからだと思っぜ？ 広いところは、ライトがあるから普通に通れるし、人もいるから……」

「

蓮「あつ、そつか・・・」

平矢「なあ・・・。その前に全員、根本的な問題間違ってるで？」
メンバー全員「えっ!?!」

そう言うと、平矢はその白い白線を見ながら、それに沿って歩き出した。

当然の事ながら、皆も慌てて平矢の後を追う。

その途中、平矢の足がピタッと止まったので、皆もその場で立ち止まり、様子を窺う。

コナン「どうした?」

平矢「見てみるや。この白線の先・・・」

光夜「先?・・・。。。。。。あっ!?!」

コナン達の目に飛び込んできたのは、いくつもの白線が入り組んだ通路だった。

白線は二階へ上る階段に通じているもの・・・。

地下の階段へ続いているもの・・・。

喫茶店やプール場・・・。

自分達がいままでいた細い通路・・・。

その全ての通りを示している線が、船の広場の辺りでごちゃ混ぜに引かれていたのだ。

一体どれをどう通ればいいのか、全くもって見当がつかない。

さらに・・・。

平矢「この白線は海に落ちへんよう引いてるものや……。そのおかげで、文章にあった『紺の闇〓空』は見えても『藍色の道〓海』は見えへんかったで」

コナン「えっ！？　んなバカな……。こんなに水平線まで伸びてんだぜ？　んなわけ……」

平矢「それは多分……。白線の方を見ながら歩いとったからや。見いへんかったら見えるのかもしれへんけど……。それやと逆に白線が見えへん」

光夜「マジかよ……。じゃあやっぱり、コイツは的外れ？」

平矢「そういうこっちゃ」

それを聞いて脱力感が生まれたのか、女子達はその場に一齐にへたれ込んだ。

考えてみたら、ずっと『やれ、あっちだ』『こっちだ』と言って、藪から棒にあちらこちらを走り回っていたけ……。

コナン（また一から……。か……）

半分溜息を吐きながら、コナンは美しい星空が輝く夜空を見上げた。

まさかそんな自分達の姿を、誰かが物陰から笑っているとも知らずに……。

16・残る疑問（後書き）

ども

最近過去の自分の小説を読み直してみても、間違いが結構多い事に気が付いた

KIDです!!

いや〜。。。

短編は誤字、脱字が半端なく多いわア〜。。。

やっぱり勢いで書くと、間違えやすいんですね。。。

（『かくれんぼ』なんて、致命的な間違い多し、でしたから（苦笑））

コナン

「まっ！ これから先気をつけろ〜」

快斗

「つてか。。。今回最後に笑ってたの。。。誰？」

コナン

「俺か（新一）、服部か快斗だろ？」

快斗

「……………」

KID

ま！

適当に予想してください。

それでは ミ

17・最初の証拠に最後の暗号

午後7時32分 船の外。

ゲーム開始から、約1時間……。

結局『白い歩道』の暗号が分からぬまま、コナン達はその場に座り込んでいた。

どうにもこっから先に動きようがない。

駄目下覚悟で光夜と直子が、船の上にあるあの白線の後を通って行ったらしいが、予測通りどこにもヒントらしきものはなく、どれも途中で消えてしまっている為、探しようがなかった。

平矢「一体……。あの『白い歩道』って、何なんや……」

蓮「ねえ、コナン……。コナンのお父さんに訊いてみたら？」

コナン「バ、バロー！んなこと、訊けるわけねえだろ！？情けねえ……」

そんな『降参』だなんて……。

そんなことは死んでもするものか！！

蓮「でもこのまま分からないんじゃないや……。せめて『ヒント頂戴』

くらい言ってみたら？」

コナン「『嫌っ！』なもの『嫌っ！！』なんだよ！どっちにしたって教えてくれるはずないし……。第一、父さんは『大勢でやる代わり、絶対に解けよ』って、言っただだる？これだけ人数居て『全く分からない』だなんて言えねえよ……」

蓮「でも……！コナンのお父さん、難しい暗号にしたかもしれないよ！？前にコナン言っただじゃない！『僕の父さんは加減

が出来ない』って……」

『そう言われると……』と、新一の顔を思い浮かべてジト目になるコナンがいた。

確かに……。

なくはないが……。

光夜「それって反則じゃねえの？」

平矢「あーあつ!!! もう!!! わけわからへんわっ!!!」

と言つて、平矢は船の手摺りに寄り掛かった。

それを見て、紅葉が『ハッ!』とする。

紅葉「もしかして……あの暗号の答え! この『手摺り』
なんとちゃう!？」

光夜・コナン・平矢「て……手摺り?」

蓮「……そうよ……きつとそうよ! だって、この手摺りからだったら、問題文にあった『海』も『空』も見えるもの!」

直子「それに白いし……」

そう言われてみれば、確かに手摺りには白いペンキが塗られているので、見た目は完全に『白』。

問題文通りの……。

おまけにこの手摺りは、横から1メートル間隔で見ると、横棒2本に縦棒が3本の、まあ一般的な手摺りの形をしているが、上から見

れば一本の白い線のように見える。

夜の海にそれが反射すれば、所々波で歪んで見えるのが、走行中の車の窓から見える白線の動きに似てなくもない。

何よりこの手摺りは、船全体を覆っている。

つまり、何処も手摺りは切れてないのだ。

平矢「船全体のこの手摺りが『白い歩道』やとすると・・・」

光夜「ああ。何処も切れてないって事は『終わりのない白線』という事になる・・・」

蓮「やっぱり・・・、これで合ってるんだよ！ この問題！」

ということとは・・・。

あの暗号の通りにすると・・・。

直子「この手摺りに沿って歩けばいいのね？」

紅葉「きつとそこに、次の問題があんねん！」

コナン「よし！ 皆で手分けして探そう！ 光夜と平矢と俺は左回り。蓮と紅葉ちゃんと直子ちゃんは右回り。多分この階の手摺りで合ってるはずだろうけど、見つからなかったら、同じ回り方で上に移動する・・・。いいな!？」

メンバー全員「OK!!」

それを合図に、6人は3人ずつに分かれ、それぞれ逆方向から手摺りの周りを探り出した。

中心に探すのは、手摺りの表面。

二つ目の暗号のように、手摺りと全く同じ色に同化させ、暗号が書

かかっている紙を張り付けている可能性が、一番に高かった。

ふっと、光夜がコナン達と同じく手摺りの回りを探していると、何やら船の下の辺りがチラホラと見えた。

どうやら、海に反射した船の下部が見えただけらしい。

光夜（もしかして……。案外暗号が手摺りの下にあったりして……）

そんな事を思いながら、光夜は慎重にその場につつ伏せになって寝そべると、手摺りと船の通路の間から頭を出し、下を見下ろした。

特に目立つものはない……。そう感じて引っ込もうとした時だ。

船が波で大きく揺れた。

光夜「うわっ……。!!！」

コナン「えっ!？」

平矢「く、黒羽っ!! 何しとんねん!!！」

声のする方を向いていると、光夜が今にも頭から海に落ちそうになっていたのだ。

慌ててコナンと平矢が、互いに光夜の両足を引っ張る。

どうにか船に落ちる前に気が付いたのと、船が揺れなかったおかげで、光夜は船の上に無事に上げられた。

が……。

平矢「ドアホッ!! お前一体何しとんねん!!！」

コナン「何してんだよ! 光夜!!！」

光夜「いや……。暗号とかヒントとか探そうとしたら、間違っ

落ちそうになった……。でもどっちにしても、何も下にはなかったけどな……。アハハハ……」

と、光夜は苦笑いを浮かべながら後ろ髪を搔く。が、二人がそんな話に納得するはずもなく……。

コナン「『アハハハ』じゃねえよっ!!」

平矢「あのなあ、黒羽……。これは工藤のオトンが子供向けに作った暗号やぞ？　んな危険な場所に、次の暗号が付いとるわけないやろっ!!」

光夜「ま……。まあな……」

コナン「ったく……。余計な心配させんな……」

ふっと、コナンの目に何かが止まった。

自分達が進む予定だったうんと向こうの方に、何か光ったモノが通路に落ちてている。

この距離でも見えるところからすると、少し大きいモノのようだ。

コナン「なんだあれ……。？」

光夜・平矢「えっ？」

コナン「皆を一旦呼んで！」

コナンはそう光夜達に言うと、それを急いで手に取ってみた。

それは、やや大きめの花のブローチ。

どうやら、白いユリの花のようだ。

直子「ブローチだ！」

紅葉「きれい……」

蓮「でも……。一体誰の……」

コナン「光夜。もしかしてこれ、快斗さんの……」

光夜「いいや、親父のじゃない……。誰かが落としたんだ」

まあ確かに、どちらかと言うと快斗らしくないブローチだ……。性別的に考えても、女性のように感じる。

ふっと、そのブローチを見てずっと首を傾げていた平矢は、思い出したのと同時に、手の平に拳を『ポンッ!』と当てて『あーっ!』と叫んだ。

皆は皆で『またかよ』という表情を浮かべる。

平矢「それ……。灰原はんのブローチやぞ!?!」

コナン「ほ、本当か!? 平矢!」

平矢「ああ……。今日のパーティーで付けとったから、ハッキリ覚えとる! 間違いないで!」

紅葉「そやけど……。どうしてここに……」

その疑問が一番に頭を過る。

それに、灰原はずっとパーティー会場にいた。

唯一席を外したのはトイレだったが、あの時にここを通ったとは考えられない。

となれば、自分達がゲームに夢中になっている間に、ここにやって来ていた可能性が高い。

。そしてもしそうだとすれば、ここに一人でいた理由はただ一つ……。

コナン「どうやら……。誘拐された人じゃなく、誘拐した人の方

が、先に分かっちゃまったみたいだな……」
メンバー全員「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

おそらく新一の考えたシナリオで言えば……。

快斗「『被害者』。

灰原「『誘拐犯』。

という設定だったのだろう。

そして、コナン達は暗号を解いて快斗を救出し、最後にこのブローチを証拠にして、灰原を捕まえる。
それでゲーム終了のはずだ。

蓮「あっ！ そのブローチの下……。捲れるようになってるよ」
コナン「えっ？ あっ……。本当だ……」

ピリッ！！

コナンが捲れるようになっていた紙を捲ってみると、そこには短い文章が書かれていたが、それよりも気になったのは、その紙の上の方に大きく掛かれた文字……。

メンバー全員「お……。『終』？」

終わり……。

これで最後の暗号という事か……。

コナンはそう感じながら、紙の中の文章を読む。

真実を抱きながら、青き龍の道しるべへと歩め！
そこに『白き鳥』はいる！！

コナン「これは・・・」

平矢「さっきの問題より・・・」

光夜「簡単だよな」

3人はそう言いながら、徐にその場から立ち上がり、それぞれ満足げな笑みを浮かべる。

コナン「『青き龍』・・・。つまりそれは『青龍』のこと・・・」

平矢「一般的には知つとることやけど、西日本の人間やったら知らん人間はおらへんで・・・」

光夜「『青龍』は東の守り神・・・。となれば答えは・・・」

6人全員の視線が、ある方角に一斉に向いた・・・。

メンバー全員「東に進め！！」

17・最初の証拠に最後の暗号（後書き）

どーも

先週投稿日を間違えていることに気が付いた
KIDでーす！！

あゝあゝ ああああーっ！！

もう家の中で暇だったから、頭のネジ狂ってきたせいだあーっ！！
（丸一週間、外出禁止でしたからねえ・・・）

コナン

「でも、直す気はなかったんだろ？ そのままなんだから・・・」

KID

まあね・・・。

あっ！

言い忘れてた来週の投稿日ですが・・・。

『18日に投稿出来ません！』ので、出来る日に行きます・・・。
はい・・・（フッフ・・・）

コナン

「えっ！？ いつ、いつ！？ いつ投稿すんだよ！！ おい！？」

K I D

コナン!

頼むから空気読んで・・・・・・・・・・。

(つて、無理か・・・)(-.-)()

実は・・・(かくかくしかじか)・・・だから!!

コナン

「ああ・・・。そういうこと) ^ . ^ (」

K I D

結構コナンファンの人間ならお気づきかと思えます!

その日まで投稿日が伸びますので、御了承を・・・。

それでは ッ

18・事件発生！！

午後7時57分 パーティー会場。

服部は一人、小さな液晶画面の付いた電子機器を手にしている新一に、そつと歩み寄った。

画面には船全体の設計図が大雑把に映っており、その中の一か所が、赤い光を点滅させながら、ゆっくりと進んでいる。

場所から言ったら、丁度船の先頭付近だろうか……。

服部はその点を見つめると、次は視線をその先の方へと向けていった。

赤い光が点滅している場所の少し先に、青い光が点滅している個所がある。

服部「最後の暗号に、辿り着けたんとちゃうか？」

新一「ああ。あの6人は、ちゃんと3問目の問題を解いて、今は4問目のゴールに向かってるところさ。ちゃんと証拠品も落とさないように持ったままな」

『証拠品』と言うのは、コナン達が拾った灰原のブローチのこと。

実はそれに、博士が開発した超小型発信器が取り付けられていたのだ。

それによって、今コナン達がどこにいるのか、全て丸分かりになるようにしたのである。

ちなみにこの青い点は、現在の快斗の隠れている場所を差す。

ここで改めて説明するが、快斗、服部、灰原、博士の4人は、このサプライズを立てた新一の協力者である。

服部「連絡した方がええんちゃうか？ 流石に・・・」

新一「それもそうだな・・・よし！」

と言うと、新一は先程も使用していたトランシーバーを取り出し、快斗に呼び掛ける。

新一「快斗。コナン達が最後の問題の解答場所に向かっているから、もうじき、スタンバイ頼むぞ？」

快斗「・・・」

新一「？・・・おいっ？ 快斗？」

快斗「・・・」

新一「返事しろって。おい!？」

快斗「・・・」

いくら新一が呼び掛けてみても、どういうわけか、快斗は返事を一向に返さない。

その反応に、新一と服部は顔を見合わせた。

が、すぐに服部の方は意識が逸れたらしく、トランシーバーとモニター画面から視線を反らす。

服部「こりゃあ・・・、きっと待ちくたびれて寝とるで・・・。ホノマのサプライズになるんは、どっちやるなあ・・・」

新一「そうかな・・・。あっ・・・！ おい、服部!？ 何処行くんだよ!？」

服部「便所や」

服部はそう言うと、一人スタコラさっさと、トイレへと出掛けて行く

ってしまった。

新一も、内心無視できないような感覚はあったのだが『それは気のせいだ』と思い、無線を切った。

一方、新一達が快斗の異変に疑問を感じていた頃。

船の外通路にいたコナン達は『念の為』という事も含め、船の方角を調べていた。

調べ方は至って簡単。

ただ単に船の壁に掛け掛けてある羅針盤を見て、方向を確認するだけ……。

それだけ……。

光夜「つてか……。これ、必要!? ただ単に船の進んでる方角に歩けばいいじゃん!」

コナン「そうも行かねえよ! 父さん達の考えた問題だ。ちょっとでも東側と離れてたら、快斗さんを見つけれないぜ?」

平矢「せやけど……。わざわざ方角確かめる為だけに、元来た道戻っていった、つうのもなあ……」

光夜「最初っから計画してやりやあよかつたじゃん」

そんな男共のコメントに、蓮は呆れたように口を挟んだ。

蓮「別にいいじゃない! まだ8時にもなっていないんだし……。寄り道しても制限時間はないんだから……」

紅葉「せや! せや! のんびりでももうええんとちゃう?」

直子「これで最後の問題なんだし……。もう続きはないから」と言われてしまえばそうなのだが……。

一応方向を調べてみたところ、やや船が進んでいる位置よりも左側である事が分かった。

別に『急ごう!』という気持ちも特になく、皆はゆっくり歩きながら、これまで出された問題について考え始めた。

全てテーマのように『色』が入り、全て『暗号』だった問題。

あんなに一日の内で解く事も珍しかったが、いざ、問題を振り返ってみると……。

平矢「イマイチやったなあ……」

コナン「って言うより……。問題がところどころちゃっちいんだよなあ……。無理やらせてるみてえなものもあったし……」

光夜「というより……。簡単だったんだよな。3問目以外は……」

蓮「仕方ないよ。皆小学生向けの問題だったんだもん。問題の加減が分からなかったんじゃない？」

皆の辛口意見に対して、蓮が半分苦笑いを浮かべながらそう言った。

確かに……。加減が分からなかったとも言えるのだが……。

紅葉「それに、普通のパーティーやと、楽しめるのはディナーくらいやけど、今回はゲームがあったおかげで、そない暇やなかったし……。こういうのもたまにはええんちゃう？」

光夜・コナン「まあな……」

と、そうこう言っている間に、メンバー達は船の先端、つまり真東側の先の方に着いた。

そこで快斗が居そうな場所を探した時、ふっとコナンと光夜の視線の先に、何やら黒い大きな目の箱のようなものが目に付いた。

本当は船の機材を入れているもののようにだが、どうも今のこれの中身は空で、代わりに名字に『黒』が付く人間が入っている気がしてならない……。

コナン「これみてえだな……」

蓮「うん……。開ける？」

コナン「そりゃあ……！」

開けなくてどうすんだよ……。

光夜「親父ーっ！！ いるのかーっ！？ 居たら返事しろ！！」

快斗「……」

いくら喧嘩中の我が息子が叫んでも、父親の快斗は箱から出てこない……。

ひよっとして……、箱の中で寝ているのだろうか……。

平矢「どうやら……。箱の蓋は俺らが開けてほしいみたいやな……。本人が開けへんもん……」

直子「もしかして寝てるんじゃない……」

光夜「多分……、な……」

と言っているも埒が明かないので、光夜と平矢は両手で箱の蓋部分を掴み、上に持ち上げ始めた。

結構な重さがあるらしく、箱の蓋は中々ビクともしない。

見かねた紅葉や蓮が手伝い、総勢4人での箱開けが始まった。今になって思う事だが、絶対に僕一人では出来ない気がする。

そんな事を思っていると、ふっとコナンの視線に何か映り込んだ。箱の蓋の丁度真ん中部分に微かに見える、楕円形の黒いシミ……。いや……。汚れた。

もう少しよく見ようと顔を近付けた時、微かに開いた箱の蓋と、その黒いシミの両方から、かなり独特の臭いが漂ってきた。

鉄を触った後のような臭い……。

数秒間吸っているだけで、すぐに気分がかなり悪くなる。

コナンの場合は吐き気さえ感じた。

そしてそんなモノは、もはやあれでしか考えられない!!

コナン（もしかして……。アイツらが今触ってる箱の中身……!!）

それを考えるだにゾツとしたが、早いとここの蓋を開けるのを止めさせないと……。

かなりマズイ!

コナン「止めろっ!! それを開けるな!!」

蓮・紅葉・直子「えっ!？」

女子達3人は反応してくれたが、時既に遅し……。

『ボタンッ!!』という激しい音を立てて、光夜と平矢は一気に蓋を開ける。

光夜・平矢「！！！」

コナン（しまった・・・！！）

二人が開けた箱の中は・・・、全て血まみれだった。

底の方はもはや血の海・・・。

そしてその真ん中に、今日着ていた服のままの人間が一人、横たわっていた。

それも腹から血を流して・・・。

それは、あの被害者役だった黒羽快斗だった。

コナン「！！！」

光夜「・・・親父・・・？ ウソだろ・・・親父・・・。親父！！

親父っ！！ 親父いつ！！」

光夜が半分取り乱したように箱に近づき叫んだが、固く閉じられた瞳は一向に開かなかつた。

そればかりか、顔は血の気を完全に無くしたかのように青白い。

蓮・直子・紅葉「きゃあああああーっ！！！！」

三人の悲鳴と一人の悲しい叫び声が、暗い海に響いた・・・。

18・事件発生!! (後書き)

どーも

こんな記念日にバチ当たりな内容の話だな、と思っている
KIDでーす!!

ああ・・・。

快斗が帰っててよかった・・・(溜息)

コナン

「アイツ、千影さん(快斗の母親)が夕食作るって聞いたら、すつ
とんでったもんな・・・」

(散々ここでチヨコレートケーキ食ったくせに・・・)

KID

ハハハ・・・。

明らかに太って行くパターンだぜ、それ・・・。

来週は新一と平次の本職始動予定です!

それでは ミ

前を呼んだ。

コナン「蓮っ!!」

蓮「・・・えっ? あっ、うん!! わかった!」

紅葉「待って、蓮ちゃん! ウチも行く!!」

蓮と紅葉が新一達を呼びに行っている間に、直子は必死に光夜をこの場から遠ざけていた。

どう考えても、光夜が見れる光景などではない。

平矢「早よ、光夜をここから遠くに・・・!」

直子「分かってるよ!! 光夜・・・? ねえ、大丈夫? しっかりしてよ! 光夜! 光夜!!」

何度声を掛けても、光夜は目を見開いたまま硬直していた。

それからその場をやや離れ出したのは、直子が光夜の肩を強く揺さ振って20秒後くらいからだ。

その振動によって、直子の顔と声が見え聞こえ始めたらしく、光夜は直子に連れられ、その場を5メートルくらい離れた。

一方のコナンは、快斗の腹部の出血を確認する。

もう既に血は止まっており、血の海のは半分は、赤黒く乾き切っていた。

そして、何かで刺したであろう傷にも関わらず、凶器はここにはない。

という事は・・・。

平矢「凶器は犯人が持っているか、元の場所に返しとるか・・・。もしくは・・・」

コナン「海に放ったか・・・、だな」

平矢「血が乾いとるから、かれこれ30分くらいは経ってんのとちやうか？」

コナン「だとしたら、丁度俺達が最後の暗号を見つけた時くらいだな・・・」

平矢「そうやな・・・ん？・・・」

ふっと、平矢の視線に何か止まり、平矢は姿勢を低くしながら、血まみれの快斗の指先を見てみた。

箱と血の色が似ているのでよく分からないが、どうやら文字が書かれているようだ。

平矢「なんか・・・、書いてあるで」

コナン「えっ？」

平矢「ほら・・・。その右腕の人差し指の先・・・」

平矢が指差した方を見つめたコナンは、その文字を読み取ろうと顔を近付けた。

吐き気すら伴う血液の悪臭に耐えながら・・・。

浮かび上がった文字は、英語2文字に記号1文字の計3つ。

それを、コナンは咄嗟にメモ帳にメモった。

コナン「『SA\』・・・。英語の『Es』と『Eー』に、記号の

『スラッシュ』か・・・。『左斜線』とも取れるけど・・・」

平矢「『サフラッシュ』？ 意味不明やで・・・」

コナン「だよな・・・。ん〜ん・・・うん？ おい、よく見たら快

斗さん・・・。左手の手の甲にも、何か隠してるぞ！」

平矢「何やと!？」

確かにコナンの視線の先には、快斗の血まみれの手の間から、何やら白い綿毛のようなものが見えた。実際にはやってはいけない事だが、コナンはどうか血が付かないように、そっと快斗の腕を退かす。そこから現れたのは、またも意味不明なものだった。

コナン「何だ、こりゃ・・・」

平矢「暗号・・・、なんやらか・・・」

快斗の左腕から出てきたのは、白い鳩の羽を真ん中で真つ二つに切った物と、二問目の問題に出てきた柚子の木の葉の真ん中の部分が、キレイに並べられた状態で出てきた。

柚子の葉は、おそらくこの大きさから見て、3つに切られていたのだろう。

鳩の羽の方は、逆に二つ切り・・・。
それがキレイに『鳩の上の部分の羽・柚子の葉の真ん中・鳩の下の部分の羽』という順番で並べられているのだ。

自然でこんな偶然が起こるわけがない・・・。
つまりこれは、快斗自身がこうやったに違いない。
とすれば・・・。

コナン「これはもしかしたら・・・」

平矢「快斗はんの・・・」

コナン・平矢「ダイニング・メッセージ!!」

二人がそう思ったのと同時に、激しく通路の方のドアを開ける音が

した。

半分驚きながら後ろを振り向くと、新一と服部が息を荒げながら立っている。

その二人の足元には、蓮達の姿もあった。

新一は話は聞いていたものの、実際に目になると『信じられない』という顔で、快斗の顔を覗き込んだ。

勿論それは、平矢の父親の服部も同じである。

新一は一瞬悲しげな表情を浮かべると、両腕にゴム手袋を嵌めた。いつもの癖で、やはり今日も持ってきてきたらしい。

コナン「父さん……」

コナンが小さく新一を呼ぶと、新一は一瞬険しい顔をしながら、コナンに一言……。

新一「コナン、離れてる。子供の見るものじゃない……」

新一はそれっきり、コナンと視線を一切合わせようとはせず、ただただ、服部と共に遺体調査を開始するのだった。

19・謎のダイニングメッセージ（後書き）

ども

咳風邪をひいて、ようやく治った

KIDでーす！！

一時全く声が出なくなったという恐怖……。

そして、学校で流行っている『百日咳』ではないかと思い、病院に言ったら即座に……。

『違うでしょう……』

どこで見分けとんじやい！！

ちゃんと検査せへえへんと、こっちが余計に不安になるやろーっ！

！（笑）

コナン

「でも治ったんだから……、違ったんだろ？」

KID

ああ……。

一応『百日』（3カ月）は続かなかったから、違ったらしい……。

まあ……、それはそれでよかったが……（……）

今回は名探偵と迷探偵が登場予定

それでは
ミ

20・疑いたくない容疑者

午後8時13分 船の外。

自分のライバルでもあり、友人でもあった人間が死んだというのに、新一の態度は至って普通だった。

よく言えば『冷静沈着』。

悪く言えば『無関心』。

新一「どうやら・・・、死後30分くらいみてえだな・・・」

服部「どないする？ 工藤」

新一「とりあえず、船の受付員達には全員『パーティー会場にいてください』と、言つといてくれ。蓮ちゃんが俺達を呼んだ時も、そんなに騒がなかったし、気付いた人間も少ねえだろ」

服部「せやな・・・。ちゅう事やから、あんまり参加者達を騒がせんようにしてくれへんか？」

服部は新一からの回答を聞くと、すぐに自分の後ろに立っていた受付員二人にそう話した。

この二人は、今日のパーティーの参加者受け付けを行っていた受付員の、佐村慶介と伊藤スミレだ。

二人は新一と服部の指示に『はい』と答えて、パーティー会場の方へと走って行った。

その間に新一が決まってやることは・・・。

新一「この辺り一帯は圏外だから、警察は当分呼べない。となれば・・・。服部、カメラ持ってるか？」

服部「ああ。丁度タイミング良く、プロマイドカメラがあるで！」

と言って、服部は腰のポーチからブロマイドカメラを取り出し、新一に手渡した。

新一はそれを受け取るや否や、すぐに写真を取り始め、出てきては取って撮る、出てきては取って撮る、の流れ作業を2分ほど続けた。

その途中、平矢が恐る恐る新一に問い掛ける。

平矢「なあ、これって……。『ゲーム』の続きなんやろ？」

その場にいた皆が『ああ、そうだよ』と新一が答えるのを期待した。

が、真顔よりも険しい顔で写真を撮る新一の口から、こんな答えが返ってくるはずがない。

新一「いいや……。ゲームは一旦中止だ。これは……。俺達も予想外だったよ……」

メンバー全員「……」

新一の答えは予想よりも、遥かに重いものに感じられた。

やがてダイニング・メッセージも含めての写真を、新一がカメラで撮り終わったのと同時に、コナン達は服部によって、別室へと移された。

部屋の見た目は、学校などの会議室のようである。

まあここで、簡単な事情聴取が行われるなどという事は目に見えていた事だった。

途中で服部が、他のパーティー参加者達から上手いこと話を訊きに言っている間に、大人一人と子供6人の取り調べのようなものは始まった。

新一「みんな……。さっきのはかなりショック大きかったと思うけど……。もう一度、ゲームの手順を話してくれないか？ 勿論、コナンも……」

コナン「話すって……。父さん、僕達がどう動いてたのか、知ってたんじゃないの？」

そのコナンの発言に、新一は一瞬眉を動かした。さらに続けて、他のメンバー達も口を開く。

直子「あのブローチに、発信器が付いてたよ」

平矢「ホンマはあれで俺らの動きを見とったんとちゃうか？」

蓮「私達が一旦、元の場所に戻ったのも」

紅葉「快斗さんが隠れてた箱を見つけたのも、全部分かってたんやろ？」

コナン「そうだろ？ 父さん！」

皆がそう言うと、新一は両肘をテーブルに付け、指と指を組ませた上に顎を乗せた状態で、口を開いた。

新一「分かってたか……。だからあんまり、君達の方から事情を訊かなくても、いいと言えればいいんだけど……」

コナン「じゃあ、なんで……！」

新一「ほら。あれはコナン達がブローチを手にしたから、父さん達は行動パターンを読む事が出来た……。だけど、ブローチを持っていない間は、コナン達がどこで何をしていたのか、さっぱり分からねえんだよ……」

コナン「あつ……」

新一「それに、あれには盗聴器もカメラも付いてないから、不審な人物を見ても、音を聞いても、こつちには全く分からないだろ？」

蓮「あつ、そつか……」

確かに、そう言われてみたらそうだ。

新一達はおそらく、ずっとパーティー会場内で、自分達の行動を見ていたのだろう。

蓮達が呼びに行った時に、会場内にいたのだ。間違いはない。

だとしたら、誰か自分達とは関係のない人間が快斗を殺したとしても、新一達の方からは全く分からないわけだ。逆に関係のある人間でも……。

新一「だから誰か……。あの場で変なものの音を聞いたとか、人影を見たとかはないか？ なんでもいいんだ」
平矢「そう言われてもなあ……」

直子「そう言えば、どうして工藤君。あの箱の中に血まみれの快斗さんがいるって分かったの？」

紅葉「そうや！ そうや！ 平矢達に『開けたらアカン！』って言うたの、工藤君やったよね？」

コナン「いや……。血まみれの快斗さんがいたと分かったわけじゃなくて……。あれは箱の縁に血が……」

そう……。

ただ単に血痕が付着していたから……。それで『まずい！』と思っただけ……。

まさか快斗が殺害されてあの箱の中に入っていたなんて、予測できたわけがない……。

そんなの予測してたら、もっと他にあの場で……。

違う行動を取っていたはず……。

新一「まあ、いいや……。じゃあ、不審者は一切。見てないんだね？」

コナン・平矢・蓮・紅葉・直子「うん……」

光夜「……………」

新一「？……………光夜君？」

光夜「……………」

あの時から、光夜は一切として口を開こうとしない。

現に新一が心配そうに問い掛けても、光夜の口は開かなかった。明らかに時間が必要である。

そう思っている内に、周りから色々と話を聞き回り終わった服部が、ようやく戻ってきた。

若干疲れているようにも見える。

新一「おつ、服部。どうだった？」

服部「それが……。皆、途中バラバラに動いとおつたらしくて、誰が何時まで居つたのかまでは分からへんそうや。一応アリバイ成立しとるのが……。俺と工藤、阿笠のジイさん……。それと受付員や厨房の人間。それ以外はアリバイあらへんぞ？ まあ、こん子らは外してもええけど……」

コナン（えっ？ 母さんもおじいちゃん達もアリバイ不成立……。つて事は……。）

嫌な予感が、コナンの頭を過った。

いや、コナンだけではない……。

それはこの場にいた、ほぼ全員の頭にも過った。

やがて重く固い表情のまま、新一が静かに口を開く。

新一「それって……、今ほぼこの場にいるメンバーを除いた全員が……。」容疑者『ってことか？』

服部「……ああ……。しかもその可能性が、ほぼ80%占めとるで……。」

メンバー全員「!!！」

全員の肌に、冷たい空気が吹き込んだ……。

20・疑いたくない容疑者（後書き）

どーも

前回『迷探偵登場』と言っておきながら、登場させられなかった KID ですー！

正確に言えば、出てくる話を間違えてしまっていました。本当にすみません > m () m <

コナン

「だよな……。俺、何処で出てくんだと思ってたよ」

快斗

「俺も……」

（収録場所に来てなかったし……）

KID

本当にごめんっー！

（しかも当分は出てこないであろう、というオチ……）

今度は間違えないように気を付けますので、どうぞよろしくお願いします！

それでは ヽ

コナン

「P・S・『赤鴉』の方で『GARNET CROW』の曲を募

集しています！ 小説&後書きに載せたい曲は、どしどし送ってくださーい！」

21・仲間割れ

午後8時19分 船の中 会議室。

服部の口から『容疑者はこの部屋の中にいる人間以外』だと聞かされた後、コナン達は新一の案内で、会議室の外へと出て行った。

その際に小さな声で『他の参加者達には父さん達が話すから、誰かに言って混乱を起こさないように』と、注意されながら……。

一応蓮達は、素直に新一に言われた通り会議室を出てた。

直子や平矢の提案で、どうも『船の後ろにあるカフェの椅子に座って、しばし休もう』という事になったらしい。

出て行く間際も、光夜はまるで人ではないかのように口を一切とじて開かそうとせず、動こうともしなかった。

会議室から出る際には、代わりに直子が引つ張って『ようやく』と言った感じである。

そんなこんなで皆が外に出て行く中、コナンは一人新一の元へと戻り、質問をぶつけた。

少し気になっていた事があったからだ。

コナン「ねえ、父さん……。このゲームの犯人役、本当は誰がやる予定だったの？」

新一「ん？」

その質問に、新一は頭に『？』マークをしばし浮かべていたが、別に隠すような答えでも質問でもないもので、とりあえずは答える。

新一「灰原だよ。最初に決めてたのは……。現にお前だって、アイツのブローチ……。船で拾っただろ？」

コナン「う、うん……。拾ったけど……。やっぱり、哀姉さんが犯人役だったんだね」

新一「ああ……。訊きたいのはそれだけか？」

コナン「えっ……。？ い、一応……」

新一「なら、ほら。質問に答えたんだから、お前も外に出る。それと、これは子供の手に負える事件じゃない……。勝手に首を突っ込むな」

新一はそう言ってコナンの後ろの襟元を掴むと、会議室の外の方へと摘み上げ『バタッ！』と落とした。

ただし、自分がコナンだった時に小五郎にやられたのとは違って、普通に歩いてコナンを扉の向こうにまで箱び、そつと降ろすやり方だったが……。

コナン（チエツ！ やっぱ父さんも俺を中には入れてくれないか……）

そう胸中で呟きながら歩き出そうとすると、偶然にも服部とすれ違った。

しかもその手には、やや分厚めの小さな茶封筒……。

コナン（ん？ あれって……。もしかして……。！）

そう思っただけで慎重に会議室の中に戻ろうとしたコナンだったが、新一が外の方を見ていては、すぐに気付かれてしまう。

そこでコナンは、会議室の中の方で閉じている入り口扉の隙間に隠

れた。

この部屋の入口のドアは、内側に押すタイプで、扉を固定する場所も内側。

そこを利用して、コナンはその扉と壁の間に隠れたのだ。

しかも少し顔を前の方に出せば、あの二人に気付かれない程度に様子が見れるし、声もよく聞こえる。
盗聴器、監視カメラがなくとも問題はなかった。

服部「遺体現場の写真……。出来たで」

新一「サンキュー、服部……。テーブルの上に全部並べてくれな
いか？」

服部「ああ。ええで」

コナン（やっぱり……。中身は遺体現場の写真……。！）

流石に水平なテーブルの上に置かれた写真はみれなかったが、枚数は軽く60枚近くある。

通常殺人現場などの遺体を撮る時の写真枚数は、大体これくらいだ。

新一「やっぱり引つ掛かるのは……。この鳥の羽と柚子の葉……」

服部「それとアルファベットの『SA』と、記号の『\』か……
わ分からへんわ」

新一「とりあえず、このダイニング・メッセージを調べてみよう。
きっと犯人の事だろうから……」

服部「せやな……。あつ！　そう言えば、下の方のボートが一艘、
なくなつとつたで」

新一「何っ！？　そのボートがあった場所、何処だ!？」

服部「確か東側の下の方の・・・」

と言いながら、二人は会議室を離れてしまった。

コナンは一旦扉の外から出て様子を窺い、安全だと分かったところで、例の遺体現場写真に目を通す。

どれもかなりクリオティが高い写真ばかり・・・。

そのせいなのか、再びあの光景が頭を過って、一瞬吐き気が起きそうになった。

その中で、コナンはある写真二枚に目を向ける。

あの二つのダイニング・メッセージが映されている写真だ。

ちゃんとその場の絵をメモリはしたが、やはり現物に近い物もほしい。

コナンは数の多いダイニング・メッセージの写真を、それぞれの部分で一枚ずつ。

念の為に遺体の写真一枚の、計3枚の写真をポケットに素早く仕舞い込んだ。

さらにすぐにはあの二人に気付かれないように、写真の列も詰めて並べる。

『これでよし!』と思った瞬間、新一達の声が聞こえてきたので、コナンはすぐに会議室から飛び出し、蓮達がいるカフェの方へと走り出した。

午後8時23分 船内カフェ『SEA』。

いざその場所に着いてみると、蓮達は一つの大きなテーブルを囲む

ように、静かに座っていた。
皆、顔が暗く重いものになってしまっている。

ふっと、蓮がこちらに近付いてくる小さな影に気付き、顔を上に上げた。

そこに映っていたのは、一番最後まで会議室に残っていたコナン。

蓮「コナン……」

コナン「なんか犯人の奴、このパーティーの参加者に間違いないらしい……。さつき一瞬『ボートが一艘ない』って騒いでたんだけど、たた置いてある場所を移されただけみたいで……」

先程会議室を出る間に、コナンが一瞬だけ聴き取った情報だ。

それと同時に、やや新一の呆れ声が聞こえてきたのもよく覚えている。

コナン「だから、多分犯人は外部の人間に見せ掛けようとして、ボートの一艘を……」

バンツ！！

蓮「コナン！ いい加減、事件の話ばかりしないで……」

コナン「蓮……」

蓮「少しは……。少しは光夜君の気持ちくらい考えてあげてよっ！！」

コナン「！……」

そう怒鳴られてコナンが視線を変えてみると、光夜は今にも泣き出しそうな目で、ただ自分の足元だけを見つめていた。

その姿を見て、慌ててコナンは声を掛ける。

コナン「こ……、光夜……？ その……、俺っ……」

光夜「……どうして……？」

コナン「……えっ……？」

光夜「どうして、あんな『ゲーム』なんかやったんだよ！！ あれさえやらなければ……。やらなければ親父は……。親父は死ななくて済んだのに……。殺されなかったのにな……。！！」

コナン「……ごめん……」

小学1年生の脳では、こんな時にどんな声を掛けてやったらいいのか、謝ればいいのか、全く分からなかった。

光夜の想いが爆発した瞬間、コナンは一步だけ光夜から離れ、やや視線を下に向けながら謝った。

勿論、謝って済むほどの軽い問題ではない事は、重々理解している。これはもはや、子供の間だけの問題ではない事も……。

平矢「まっ……。まあ……。光夜、そう怒鳴んなや。コナンだつて全部が悪いわけやないんやし……」

光夜「誰が『悪い』とか、誰が『いい』とかの問題じゃねえんだよ！ 俺の親父は死んだんだぞ？ 殺されたんだぞ？ それで互いに許せとか……。そんなんで解決させる事が出来ないなんて、皆分かっているじゃねえか！！」

平矢・直子・紅葉・蓮「……」

光夜はそう怒鳴りながら、4人を鋭い眼光で睨みつけた。

どう見てもその目は、『哀しみに満ちた目の色』だけではない。

それと一緒に『深い怒りの目の色』も混ざっていると、コナンはす

ぐに感付いた。

感付いたからこそ、謝った……。

コナン「ごめん……。でも、きつと父さんが……。父さんが快斗さんを殺した犯人を突き止めてくれるよ！ だから……！！」

光夜「何が……」

コナン「……。？……」

光夜「何が『父さんが』だよ！ 俺の親父が死んだのは、元はと言えばお前の父親のせいだろ！？ 何が……。何が『迷宮なしの名探偵』だよ……。ただ親父の……。俺の親父の命を奪った人間じゃないか！！ お前の父親だって、俺の親父を殺した人間と同じだよ！ この人殺し！！」

コナン「！！！」

その言葉を聞いた瞬間、コナンの中で、何かが激しく止まった。言い表せないほどの衝撃が振り掛かる中、光夜はコナンの横をすりりと走り抜け、暗い船の通路の闇に消えて行った。

誰も彼に、声を掛けられぬまま……。

21・仲間割れ（後書き）

どーも

『ヴェスパニア』が終了してしまい、若干物寂しい
KIDでーす！！

楽しんでて書いてた分、すっごく寂しい・・・。

コナン

「仕方ねえよ・・・。無限的なのは立場上、長くは続かねえだろ？」

KID

あんた結構・・・。

コメント痛ええな・・・（苦笑）

快斗

「それより来週は？　どうなる予定？」

KID

来週は『ホントに!!』『ホント!!』で、
『迷探偵登場』予定！！

（携帯の下書き見たから、間違いない!!）

コナン

「古っ……」

K I D

ガクッ……

そ……、それでは失礼
三

22・報告と涙と手紙

午後8時36分 パーティー会場。

青子「な．．．なんで．．．．．？」

園子「うっ．．．．．、嘘でしょっ!? それ!」

蘭「そんなの．．．。嘘に決まってるじゃない! 何かの冗談なんでしょ!? 服部君!？」

服部「信じたくない人は山々やろっけど．．．。事実なんや．．．」

和葉「なんでなん．．．? なんで黒羽君、殺されなあかんの! ? なあ! 平次!!」

光夜とコナンの仲が崩れた丁度その頃、服部は蘭達に「快斗が誰かに殺された」と、報告している真っ最中だった。

勿論、最初は誰もそんなものには全く信じようとせず、そればかりか「変な冗談言わないでよ」と、園子や和葉達に少しばかり笑われた。

だがやがて、服部が真剣にその事を話していると分かると、やがて皆の顔から笑顔が消え、妻でもある青子の目からは、薄ら薄ら、涙が滲んできた。

そして最後に、皆が「嘘なんでしょっ!？」と訊いてきた問いかけに対して、服部が首をゆっくりと振ると、青子は堪え切れずにその場で泣き叫んだ。

その反応に慌てふためいたのは、残りの女子3人である。

蘭「青子ちゃん．．．!」

和葉「青子ちゃん、しっかりしてっ! 泣かんといて!!」

園子「ちよつと！ 一体あの『ゲーム』の時に何があつたのよ！
なんでこんな事に……！！」
和葉「そうや、平次！ 一体『ゲーム』で何したん!?」
園子と和葉は、快斗が殺されたのはあのゲームに関係があると踏み、
服部に詰め寄った。

勿論、新一はこの二人にも……。
そして妻でもある蘭にも、服部と快斗がゲームの計画者だとは聞か
されていない。

それでも、いつものこの3人の行動や仲などを考えたら、そうとし
か考えられなかった。

あんな大胆な『ゲーム』を、最初に『やろつ』と言つたのは新一だ。
だが新一だけでは、どう考えてもこのゲームの暗号やら、仕掛けや
らを全て行つのは困難。

だとすれば、協力者がいたに違いない。
それで怪しいのは、この二人くらいしかないのだ。

和葉「平次……！ なんや誤算があつたんとちゃうの!? まあ、
平次！」
服部「と・に・か・く・や！ まだ詳しい事は何も分かつたらへん・
……。一応言うтокけど……。光夜君は無事や……。ちよつと
シヨック受けたらしいけど……」
青子「……。つ……。そう……」

『光夜は快斗の亡骸を、この目で見たに違いない!』

そう青子は即座に感じた。

きつとこの事を新一達が知れば、大人達には話すだろうが、まだ小さい子供にまでは話さないはずだ。
ましてや、まだ光夜は小学1年生。
どう考えたって、告げるのは早過ぎる……。

それを知っていると云う事は、おそらく自らの目で、快斗を見つけたということ。
もしかしたら、今回の第一発見者も……。

蘭「青子ちゃん……」

隣に立っていた蘭が心配して、青子に近付いた時だ。

突然服部が、蘭の手の甲に向かって、強く何かを押し付けた。

いきなりの出来事に、蘭は一瞬何も出来ず、ただただ、服部が押し当てたものを素直に受け取る。

感触から言って、おそらく4つ折りの紙……。

周りを見てみれば、皆が青子の事を心配していて、誰も服部と蘭の出来事には気が付いてなかった。

そしてさらに視線を戻してみれば『詳しい事が分かったら、また来るさかい』と言って、服部が会議室の方へと歩いてゆく。

蘭（一体どうしたの……？ これは何……？）

蘭は残りの3人に気付かれぬように、そっと中を開いた。

そこには、本の数行の文章。
全て服部の字だ。

咄嗟に書いたせいなのか、文字はややグニョグニョに曲がっているし、雑だ。

それでも書いてあることは、分かるし読める。

蘭はその文章を読んで、軽く驚いた。

蘭「えっ……？　どういう事……？　これ……」

和葉「……ちゃん……ちゃん……ちゃん……らんちゃん……
……蘭ちゃん……蘭ちゃん！」

蘭「えっ!？」

和葉「どないしたん？　なんか恐そうな顔してしもて……」

どうやらこの内容を読んでいる内に、どんどん蘭の顔は怖くなっていったらしい。

蘭は咄嗟に手紙を鞆の中に仕舞い、誰にも気付かれていなかったと悟ると、普段の表情に戻りながら『なんでもない』と答えた。

それだけ言うと、和葉も『そう……』と言って、再び青子を落ち着かせ始める。

その間、蘭はやや心配そうな顔立ちのまま、会議室のある方を見つめた。

自分の旦那パートナーが居るであろう、その部屋を……。

一方その頃新一は、会議室ではなく、蘭達が居るパーティー会場内にいた。

ただし彼女達と違って真ん中ではなく、端っこの方だ。

一先ず彼はここで事情聴集。

取り調べ相手は、少年探偵団と毛利夫妻である。

ちなみに、いつもならこの中にいるであろう博士はアリバイがあった為、この聞き込みの場には呼んでいなかったたのである。

新一「皆、ちよつと聞いてほしい……。実は……。快斗がついさつき、誰かに殺されたんだ……」

唐突としか言えない発言に、皆は一瞬『？』マークを浮かべたまま、新一に対して口を広く。

元太「もしかしてこれ……。さつきの『ゲーム』のシナモンか？」

光彦「元太君！ それを言うなら『シナリオ』ですよ！ でも……。これも話の流れですか？」

歩美「コナン君……。何言ってるか分からないよ」

新一「皆、いきなり言った事で混乱してるだろうけど、本当の事なんだ……。今僕らが走っているこの海域は、電波が通じないから警察を呼べないが、呼べる状態になり次第、通報する予定だ」

そう言っている新一の顔は、かなり真剣だった。

その顔を見た瞬間、皆も『嘘ではない』と悟り、かなり慌てる。

光彦「殺されたって……。一体誰にですか!？」

新一「まだそれは分からない……。ただ死亡推定時刻を考えたら、俺と服部、博士と子供達、そして厨房や受付員は全員アリバイがあつて、犯人ではないはずだ。妙な小細工をしていなければ……」
小五郎「おい！ って事は容疑者は……。ここの参加者の人間か

？」

新一「あ、ああ……。ボートも無くなつてないし、ヘリが降りてきた形跡もない……。つまり犯人は、まだこの船の中だ。流石に泳いで港まで、っていう奴はいないだろうし……」

それを聞くと、小五郎は隣で驚いていた英理に対し「ちょっと行ってくる」と言つて上着を羽織ると、新一の方へと足を歩ませた。

『名』の字が違うとはいえ、彼も探偵だ。

探偵の性上、黙つてはおけない。

小五郎「それで？ 死因は？」

新一「刃物で腹部を刺された事による出血死……。死後30分は経つてた……」

小五郎「んで？ 肝心の凶器は？」

新一「探したけど、見つかつてない……。ただ、厨房の方のナイフが一つ消えていたから、多分そこから……。今頃は海の中だろうな……」

小五郎「痕跡なし……。か……」

新一「ここじゃ何だから、会議室の方がいい。写真もあるし……。新一がそう言つと、小五郎は『そうだな』と言つて、頷いた。

小五郎「英理。ちょっと調べてくる」

英理「わかつたわ……。気を付けるのよ」

小五郎「わあつてるよ!!」

小五郎はそう返事を返すと、新一と共に会議室へと向かつた。

その頃、一人真つ暗闇の外側通路を歩いていたのは、先程コナンと酷い仲間割れをしてしまつた光夜だ。

その目はもう真っ赤になっているし、拭いても拭いても、悲しい記憶ばかり蘇ってくる。
楽しい記憶の後にすぐ、あの変わり果てた姿の快斗が目に見えかぶのだ。

今頃になって、5日前に快斗と大喧嘩をしてしまった事を後悔した。あの喧嘩は、別にどちらが酷く悪かったというものではない……。

無理矢理火がある方と言うとすれば快斗なのだが、それでもあそこまで喧嘩になってしまふ事はなかった。
少しこっちが、一步譲ればよかっただけの話なのだ。

なのに……。
なのに……。

服部「光夜君……」

光夜（え……？）

光夜が声のする方を向くと、服部が一人、光夜のやや目の前に立っていた。

服部は、別に腕を組んだ姿勢でも、ポケットに手を突っ込んだ姿勢でもなく、普通に立つような体制で、光夜を見つめる。
そのまま、小さく口を開いて、言った。

服部「もうちいゝと、話聞きたいんや……。工藤達と一緒に、来てくれへんか……？」

服部の言う『工藤』は『工藤新一』の事ではない。
ついさつき絶交するくらいにまでこちらが怒鳴り散らした、あの『
工藤コナン』の方だ。

正直な話、彼に当たっても快斗は帰ってこない。
だからこちらが当たったって、意味がなかった。

『言い過ぎた』と思い始めたのは、ついさっきのこと……。
でも謝って許してくれる気は、全く以てしない……。

それでも、しないといけないと感じた。
このままではいけないと思った。

きっと親父が……、許してくれないから……。

光夜は涙を袖で拭い、しっかりとした目で服部を見つめる。
そして弱くも、しかしはつきりとした声で言った。

『はい……』と……。

22・報告と涙と手紙（後書き）

ども

予定があつたので、早めに投稿した
KIDです！！

次回の投稿予定日は・・・え〜と・・・。
（と言いながら、後ろのカレンダーをチエック！）

コナン

「16日だろ？」

KID

そうでした・・・。

では、また来週 ミ

コナン

「早っ！！！」

23・敵わぬ友情

午後8時41分 会議室。

いち早く会議室に戻ってきた新一と小五郎は、先に並べられていたパイプ椅子に座りながら、互いにテーブルの上に置かれた何十枚もの写真に目を向けた。

当たり前の話だが、ほとんどは快斗が映っているものだ。

その夥しい血の量と言いつ、顔の蒼褪め方と言いつ、かなり生々しいと言つよりは、グロ過ぎる……。

率直な意見として言わせてもらえば、酷過ぎる……。

周りは血の海で、それは上がれているものから、あちらこちらに飛び散っているものなど様々だ。

この姿をどうにか写真に撮れた新一も凄いが、それをモロに直視してしまった子供達の方が、かなりマズイ気もする。

小五郎「こりゃあ……。酷えな……。」

新一「この血の飛び散り方から考えて……。おそらく犯人は快斗を刺した後、刃物を抜き取ったんだ。快斗が生きてる内に……。」

小五郎「って事は……。犯人は返り血を浴びてるってことか？」

その小五郎の問いかけに、新一はゆっくりと首を横に振った。と言つのも……。

新一「実は……。遺体現場の近くにあったビニール製のパーカーが、一着分なくなつて……。多分犯人はそれを着て、快斗を殺

害。その後で、そのパーカーを海に」
小五郎「なんで。んなパーカーがこの船内に……」
新一「作業用のさ。特にエンジン類を見周りに行く時の為の……
だから誰でも使用可能……」
小五郎「なるほどなあ……」
ふつと、新一は遺体現場の写真を見て、ある事に『ハッ!』と気が付いた。

確か『一番重要』という事で多めに撮ったのは、このダイイング・メッセージの写真。

その写真は確か、二種類合わせて10枚……。

あの時も自分で観たのだ。

自分で撮ったのだ。

それは間違いない!!

しかし、今現在テーブルに並べられている写真の数は、二種類合わせて18枚……。
二枚足りない……。

それによくよく見てみれば、快斗の全体を収めたはずの写真も、一枚足りない……。

かなり上から連続二枚で撮ったはずのモノが、何処にもない……。

それを見た後で、前の記憶を思い出してみる。

確か最後に写真を片付けたのは服部だ。

だがアイツは、写真を何処かに落としたりなどはしていないかった。

勿論、いつでも見られるし、フィルムは服部自身が持っている。必要だからとはいえ、楽をしようと持つて行くはずがない。

新一から勝手に重要参考物を持つて行けば、後でどうなるかは知っていること……。

それでもなお盗む奴……。

そして最後まで残っていた奴と言えば……。

『父さん』

新一「これは……。コナンの仕業だな……」

トントントント

新一がそう呟いたのと同時に、誰かが会議室のドアをノックした。

『入っていいぞ』という声に答えるように、やや慎重にドアを開けたのは服部。

その足元には、新一が呼ぶように頼んだ光夜が居た。

新一「服部、サンキュー……。それと、悪かったな……。あんな事あつてすくなのに、蘭や遠山達に知らせを……」

服部「ええつて、別に……。これくらい……」

新一「あつ、途中でコナンに会わなかったか？ どうやらアイツ、証拠物の写真を3枚くらい、すくねたみたいで……」

服部「ええっ!?! ったく……。工藤んトコはそっくりやで。工

藤と……」

新一「悪かったな……。俺の息子だよ……」

新一は一瞬ジト目になりながらも、心配そうに光夜の方に視線を向けた。

先程から、コナンや新一達と視線を合わせないようにしているのは分かり切っている。

それでも、内心心配だったのだ。

新一「光夜君……」

光夜「……！！！」

ふっと突然、ずっと無言だった光夜が、自分の後ろを慌てて振り返った。

その反応に気付き、新一や服部達も、光夜の後ろに視線を向ける。

誰か来る……！！

その直感が全神経を駆け巡るより先に、その相手が光夜の目の前に現れた。

かなりギリギリまで息の上がった状態のまま……。
ややクタクタな姿で……。

光夜「コナン……」

コナン「はぁ……はぁ……」

息切れが直らないコナンの後ろには、いつものあの4人の姿もあった。

しかし一体、皆が揃ってどうしたのだろう……。

ましてやコナンは、ついさっきかなりの仲間割れ言い争いをしたばかりだ。

そんな人間が、何故目の前に……？

光夜がそう思っていると、どうにか息切れをある程度直し終えたコナンが、光夜に対して静かに、口を開いた。

コナン「光夜……、はあ……はあ……はあ……。俺は確かに……『人殺し』の息子だけど……はあ……はあ……はあ……。俺どうしても……。はあ……。どうしても快斗さんを殺した犯人、見つけたいんだ……。はあ……。はあ……。だから……。だから……。はあ……。だから一緒に……。犯人探そうぜ！ 光夜！」

コナン「このままじゃ、お前の気持ちだつてスッキリしねえだろ！？ どうせ犯人はまだ、この船の中にいる！ 証拠が完全に無くなつちまうまで、もうあと数時間ないかもしれない……。犯人なんか、明日島に降りてしまつたら、確実に捕まえられなくなる……。それじゃあ！ お前がスッキリしないだろ！？ やるせないだろっ！？」

コナンのその発言を聞きながら、光夜は何回も頷いた。

犯人が逃げたら、誰ももうその犯人を追いつめる事も、問い詰める事も出来ない。

証拠が無くなつたら、逮捕が出来ない。

罪を償わせられなくなる。

何より、その結果に一番に嘆く事になるのは、快斗自身だ。

自分の知り合いに殺されて、そして犯人は分からず迷宮入り……。

そんなのは・・・！
絶対にイヤだっ！！

快斗の血が入っているせいなのか、光夜の心の中で、その声が何度も響いた。

『ヤダ・・・ヤダ!!』と・・・。

光夜「・・・コナン・・・・・・・・・・。さっきは・・・、ゴメン・・・。
言い過ぎた・・・・・・・・・・、ごめんッ・・・」

コナン「光夜・・・」

平矢・直子（光夜・・・）

蓮・紅葉（光夜君・・・）

やっぱり親友はなかま・・・、バラバラにはなれねえよ・・・。

それを光夜は胸中で呟いたのだが、皆はそれを口に出さずとも、分かり切っていたようだ。

何故なら・・・。

光夜の目から一気に溢れた涙が、それを静かに物語っていたから・・・。

24・英語と暗号

午後8時54分 会議室。

どうにか互いに気持ちが悪くなったところで、6人は会議室の中に入った。

もつとも、コナン達は新一には呼ばれていない。

ここに来た理由は、どうしても光夜と仲直りがしたかったのと、少しでも事件現場で、犯人の手掛かりになる掘り出し物がほしかったからだ。

この写真だけでは、全く以て犯人を捕らえられそうにない……。その前に、誰が犯人なのか見当も付けられない……。

そこで、探偵3名が集まっているこの場に集まった。きっとこの3人なら、何か見つけてくれるかもしれない……。

それが第一に脳裏に浮かんだ。

残る問題は、コナンの父親の新一だ。

最初、コナンは新一が部屋に入れてくれないと思っていた。

今起こっている事は、本物の殺人事件。

それでもって、殺されたのは新一の仲良しトリオの一人。

と同時に、コナンの友人の父親。

そんな事件現場の話し合いの中に、僕は半分『探偵ごっこ』という遊びをする為に来ているようなもの……。到底入れてくれるはずがない……。

ところが新一は、何故かすんなり僕らを中に入れてくれた。むしろあまり黙っていなかったのは、母さんの父さんでもある小五郎の方である。

新一「まあ、いいさ……。この5人は遺体の第一発見者……。おっちゃんも、色々と話を訊きたいだろ？」

小五郎「あつ……。だがなあ……」

新一「それよりコナン……。ちゃんと中には入れてやったんだから、さつき取った物を出せ」

コナン「えっ？」

服部「写真や。写真」

新一「取ったの……。お前だろ？」

どうやら新一はただ単に、コナンから写真を返してほしかった為、中に入れたらしい。

あるいはこれが『入園料』……。

コナン「どうして僕だと思うのさあ。他にも取れる人は大勢……。新一「お前……。写真を取った後で、その空いた列に写真を詰めて誤魔化したろ？ それは昔、よく俺がやってたやり方だ。お前は目と顔だけじゃなくて、そういう行動範囲まで、俺と一緒にんだよ」コナン「えっ！？ 僕……。父さんとほとんど似てるの……。……？」

新一「おい、なに『この世の終わり』みたいな顔してんだよ。そん

なに父親と顔が似てるのが嫌か？」

新一がジト目でコナンを睨むと、コナンは苦虫を嚙んだような顔をしながら、それを否定した。
代わりに発した言葉は……。

コナン「ううん……。『顔』じゃなくて『性格』だよ……。僕……、大人になったら父さんみたいに、母さんを怒らせる人間になるのか？って思ってる……。それを考えると、なんか『失敗したなあ』って思わない？」

ドガツ！！

バキツ！！

ボコツ！！

新一「本題に戻すぞー？ 早く写真を返せ」

コナン「……………」

コナンは殴られた頭を押さえながら、ポケットから3枚の写真を取り出し、無言で新一に手渡した。

新一はそれを受け取ると、一瞬コナンの方に視線を向け『本来なら、即退場だからな』と言って、テーブルの上に写真を並べる。

その後は皆、写真に映し出されている快斗の遺体やダイイング・メッセージに目を向けた。

もっばら皆の目はダイイング・メッセージだ。

やはりこれを解かない事には、先へは進めない……。

服部「しっかし、分からへんなあ……」

小五郎「ああ……。この『SA』ってのは、一体何の事だ……？」

そう呟いた二人の目は、一斉に新一の方へと向けられていた。

なんだかんだ言つて『親友』という間柄で一番仲のよかつたのは新一だ。

もしかしたら、新一なら何か分かるかもしれない。

そのわずかな望みの視線を浴びせられている新一だったが、実はこの暗号に一番難儀していたのは、その新一本人だ。

先程から何度も、快斗との仲もあり、必死に推理を重ねていたのだが、結局分からないのである。

新一「残念だけど……俺も分からないんだ……。おそらくこれは、快斗を殺した犯人の事を示してるんだろうけど……。何せ、アイツの作つた暗号だからなあ……。難しいの何のつて……」
小五郎「……ん？ 待てよ……。そうか！ 分かつたぞ！」

皆の脳裏に浮かんだ言葉……。

『ヤバいパターン』……。

小五郎「犯人は名前に『さ』が付く奴だ！ きつとソイツに決まつてる！」

ほら始まつた……。

超簡単暗号解説……。

その発言に真つ先に口を開いたのは平矢だ。

平矢「そやけど、工藤のじいちゃん……。今日のパーティー参加者には、名前に『さ』が付く人間、おらへんかつたんとちゃうか？

さつき工藤から名簿見せてもろたけど、そんな人居らんかったで？」
確かに、パーティー参加者のメイン人の中に、名前と姓に「さ」が付く人間はいないのだが……。

服部「いやっ！ ちょー待てよ……。！ そうや！ 一人おつたやないかっ！！ 確か受付員の一人で名前は……。『佐村慶介』！ 『さ』が付いてんで！ 『さ』が！！」

新一「バーロオ！ 佐村さん達には『ずっと受付番をやってた』っていうアリバイがあつただろ？ だいいち、あの人は快斗と会つたのは今日が初めて……。そんな人間にいきなりあんなマネさせるか？ 動機だつてねえのに……」
服部「せやな……」

佐村のアリバイは、一番最初に服部が調べた。
今はただ勢いで言っただけだが、調べた側からの意見としては、確かにあり得ない……。
犯行はあの人には不可能なことだった。

それに、たとえアリバイがなかったとしても、その場合のダイイング・メッセージにはおかしな点がいくつもある。
たとえば……。

蓮「それに……。もしそれが犯人の名前なら、あのハトの羽と、その真ん中にあつた葉っぱは、一体何のことなのよ!？」

小五郎「いや……。それは……」
紅葉「それに快斗さんつて、めっちゃ頭ええ知能派人間やつたんやろ？ それなんにあんなに大っきな字で、犯人の名前なんて書くん？」

紅葉の言う通り、あの『S A \』の文字は、やや大きかった。
一文字で大体大きさに5センチはあったと思う……。

平矢「俺も同感やな……。普通、自分が長く持たへんはずの時に、あんな度デカイ字でメッセージなんて書くやるか？俺やったら小さい字で早めに書くし、あんなハトの暗号なんて、やってる暇なくて、最初から作らへんで？」

コナン・服部・新一（確かに……!!）

直子「それにどうして、わざわざ英語で書いたの？私だったら漢字で書くし、難しかったら平仮名で書くよ？」

コナン（そうだ……!）

ここでコナンがようやく、ある事に気が付いた。

どうして自分はさっきまで、あの暗号に違和感を覚えていたのかを……。

それは『英語』だったからである。

普通日本の推理小説などの暗号には、犯人の名前を英語で表したものはない。

それは何故か……。

その理由は『舞台が日本だから』である。

日本人の名前は、英語に変えることは出来ない。

たとえば『黒羽』は『Black Wing』と変えられる。

では『工藤』や『阿笠』はどうだろう……。

その二つは、英語表記に表させられるだろうか？

おそらく半分以上の人間が『それは出来ない』と言うはずだろう。

舞台が『アメリカ』や『イギリス』では英語表記のダイニング・メッセージは多いが、普段の言葉で英語が出てこない日本人は、英語のダイニング・メッセージは出てこないのだ。

英語は犯人の名前にしても、全く以て縁がない。

殺した人間が『日本人』であれば、尚更のこと……。

新一「確かに……。犯人が現場の近くにいたのなら、暗号化したダイニング・メッセージは現場に残す……。だけど、流石に英語は使わない……。いくらこの俺でも、そんなシチ面倒臭いことはしない……。」

コナン「それにローマ字だと、ネットとかやってる人はすぐに分かっちゃうし……。」

服部「そもそも英語にする意味がない……。」

光夜「どうなんだよ!?!」

光夜が皆の発言を全て聞いたところで、小五郎に半分怒鳴るように尋ねた。

その問い掛けに対し、小五郎は半分目を泳がせながら、後ろ髪を掻く。

やがて発した言葉は……。

小五郎「確かに……。そうだな」

平矢「おい！ それって『考え直し』っちゅうことやないか!」

服部「平矢！」

平矢「……………すみません……………」

父親である服部に注意されたので、平矢はそれ以上口を開こうとはしなかったが、平矢の言っている事に間違いはない。

ましてや、ここまで小五郎の推理では外れているのだ。

これが犯人の名前を示している可能性は、かなり薄い……………。

それでも、小五郎の予測の中でたった一つ、コナンが『これは当たっている』と思う事がある。

それは……………。

コナン（犯人の名前でなくとも……………。これはきつと……………、快斗さんを殺した犯人を示してる……………！）

それだけが、当たっている気がしてならなかった……………。

24・英語と暗号（後書き）

どーも

最近の暑さで死に掛けている

KIDでーす!!

暑いつ!!!(、^、;))

死ぬっ!!?(+|+)?

(学校)休みたいっ!!!(@口@) /

実はの話……。

まだ『夏休み』というモノに入っていない私……。

殺す気がいつ!!!???

周りは山ばっかりやし、高いところに建ってるから地上よりも蒸し風呂なんじゃい!!! 私和学校はっ!!!!

そんな教室に、ちっちゃい扇風機一台……。

舐めとんのか!? わりゃーっ!!!(!!>>><<<!!!()

コナン

「止めるよ……。ただでさえ暑いのに、余計に暑くなるだろ……

「

快斗

「まあ確かに……。この暑さは異様だよ……。(少なくともの話)

「

KID

まあこちらも……。

どうにか『夏バテ』『夏風邪』『夏中症』……

コナン・快斗

「熱中症!!」

KID

ダメだこりゃ……。

に、気を付けて書いていきます!

それでは ミ

25・二つの疑問

平矢「『度デカイ』言うたら、なんであのスラツシユ……。他のアルファベットより小さいんやろ……」

空振り推理によって撃沈ムードだった部屋の中に、平矢の疑問の一言が響いた。

その声に、光夜が一瞬眉を顰めながら、平矢を見つめる。

光夜「『小さい』……?」

平矢「ほら。普通『\』言うたら、アルファベットよりもデツカイはずやろ? なのに、なんでコイツ小さいんやろう思つて……」
光夜・コナン・新一「そう言われてみれば……」

確かに、通常の『\』は、アルファベットよりも大きい。

パソコンなどで見れば分かるだろうが、大体大文字アルファベットと大きさは変わらないはずなのだ。

ところがこの『\』は実際の話、隣に書かれている『SA』よりも半分かくらいの大きさしかないのだ。

明らかに字の大きさがおかし過ぎるのである。

紅葉「もしかしてそれ、アルファベットの方が『全角』で『\』の方が『半角』やったんとちゃう? それやったら、アルファベットの方が大きくなるし、記号の方は半分かくらいの大きさになるし」

平矢「アホッ! なんでそれを、わざわざ『全角』にする必要があるんねん!! おまけにどっちにしたつて『\』の方が大きいやろ!

この書かれてるヤツみたいにな、そこまで小つさない! それに……、こつという記号類には元々『全角』『半角』はあらへんし……」

紅葉「あつ……、そつか……」

それを聞いて、紅葉は再び考え込んだが、今の平矢の疑問は、おそらくこの『ダイニング・メッセージ』の『真実』を掠めたに違いない。

『知能派』で頭もよかった快斗の事だ。

死に際に書いた時に、間違えたとは到底思えない……。

何か別に……、意味がある……。

小五郎「ところで、このハトの羽と柚子の葉っぱの暗号だが……。

『柚子』なんて何処にあった？」

新一「ん？ ああ……。柚子はパーティー会場の方に展示されてたんだ。ついでに二問目の暗号に、ソイツをキーで使ったんだよ。な？」

コナン「うん。答えは『アゲハ蝶の蛹』だったんだけどね……」

光夜「多分親父……。『ゲーム』が始まる前までその木の傍で立ってたから、その時にあの葉っぱが付いたんだよ。きっと……」

そしてそれを咄嗟に、ダイニング・メッセージに使った……。

という事が……。

蓮「ねえ、コナン……」

コナン「ん？」

蓮「私、さつきから気になってる事があるんだけど……」

コナン「何だよ？」

コナンが尋ねると、蓮はコナンの方を向き直りながら、ゆっくりとやや小さい声で口を開いた。

蓮「どうして快斗さん……。ダイニング・メッセージで、この『白い羽』を使ったんだろう……。？」
コナン「えっ……。？」

あまりにも唐突過ぎる質問に、コナンは自分で『バカだ』と思うくらしいの声を出しながら、頭と顔に『？』マークを浮かべた。その表情を見て、蓮はもう一度、コナンに今自分が疑問に思っている事を打ち明ける。

蓮「だから！ どうして快斗さん、ダイニング・メッセージで、この『白い羽』を使ったのかわかって、そう言ってるの！」
コナン「……。いや……。今一意味が分からねえんだけど……。なんでそれを疑問に思うんだよ」

蓮「だって……。！」
小五郎「マジック好きだったからだろ？ コイツが……。」
蓮「えっ……。？」

いきなり横から聞こえてきた声に、蓮とコナンは同時に小五郎の方を振り返った。

小五郎は半分ジト目のまま、例の二つに切られたハトの羽と柚子の葉っぱの一部が入っている袋を見つめる。
そしてそれを徐に持ち上げながら、二人の顔などは一切見ずに、再び口を開く。

小五郎「コイツは『天才マジシャン』だったからなあ……。大方、死に際でもマジックのネタを使おうと思ったんだろうよ。好きな奴は、最後までもそれで飾るって言うしな」
蓮「あっ、いや……。私、そういう意味で訊いたんじゃない……。」

小五郎「とにかく！ こつから先は大人の捜査だ！ 子供は外だ！
外！！」

コナン「だけど！ 光夜は父さんに呼ばれてここに……」

そう言いながら、コナンは光夜の方をチラリと見る。

光夜の方も、コナンの発言に対して何度も頷きながら、新一の方に視線を向けた。

新一はそれを訊いて、慌てて小五郎の方を向きながら口を開く。

新一「あつ、ああ……。実は、快斗が誰かに恨まれてるような事がなかったかどうか、訊こうと思ってたんだ。だけど……」

「……光夜君、心当たりある？」

新一の問いかけに、光夜は一瞬宙を仰ぎながら、再び新一の方を向いて、首を横に静かに振った。

全く以て、心当たりはない……。

元々快斗は誰かに恨まれるような人間ではないし、殺されるほどの恨みをかった事もないはず……。

内心一番最初に脳裏を過つたのは、母親の青子と、コナン・平矢の父親だ。

理由は、よく新一や服部と飲みに行った後、何かとメモ事が起こっていたし、青子の場合は時々快斗の仕事の事で夫婦喧嘩が絶えなかったから……。

喧嘩の原因は、マジックショーを行う時に手伝っている助手の女性と、時々だが親しそうにしていたからなのだが、そのほとんどは青

子の誤解……。

一度たりとも、快斗が自ら不倫のような行動を取っていた事はない。それに新一達の場合も、一緒に飲みに行つて酔い過ぎてのモメ事だ。そこまで恨まれるような事を言つたり、行つたりしたとは到底考え難い。

おまけに家に帰つて一晩寝れば、昨夜の事など皆全て忘れているのだ。

たとえ快斗が何か引き金になるような事を言つたとしても、次の日に忘れていくようでは、ここまでの犯行には至らないだろう。

それを考えれば、この3人が犯人である可能性は少ない。他に快斗が殺されそうな恨みを持つ人間と言つたら……。

快斗（……まさか……、な……。あんな数年前の事を恨んでいる人間なんて、最初からこのパーティーには……）

コナン「光夜……？ 光夜！」

光夜「っ……！ なっ……。何？ コナン……」

コナン「大丈夫か？ ボーツとしてたけど……」

そう言うと、コナンはまた心配そうな目で、光夜の顔を覗き込んだ。どうやら、かなり長い事考え込んでいたらしい。

光夜は慌ててコナンに返事を返ししながら、笑みを浮かべた。

光夜「あっ……。ああ、平気……。ちよつと考えてただけ……」

コナン「そう……？ じゃあ、外に出よう。皆出てるし……」

光夜「あつ、ああ……」

光夜とコナンはそれだけ会話を交わすと、皆と一緒に会議室を出て行った。

扉を開けたのと同時に、塩の匂いと混ざった風が『サー……ッ』と、6人の顔に吹き掛かる。

下の方からは、変わらず波の音が響いていた。

直子「それ……。これから一体どうするの……？ 大人達に任せるの？」

直子がコナンにそう問い掛けると、コナンは再び鋭い視線に戻し、首を左右に振った。

コナン「いいや。大人だけに、この事件は任せられねえよ……」

俺達は第一発見者なんだ。俺達で犯人を絶対に見つけ出して見せる」
蓮「でも、どうすれば……」

コナン「とりあえず、快斗さんの遺体のあった場所に、もう一回行ってみよう！ 何かヒントがあるかもしれない」

平矢「せやな」

紅葉「行って損はないはずやもん」

光夜「『捜査は足から』だよな？」

コナン「ああ。皆、行くぞ……！」

コナンのその掛け声と共に、皆は一目散に、快斗の遺体があった先頭部分へと走り出した。

その姿を、物陰から誰かが見ているとも知らずに……。

25・二つの疑問（後書き）

どーも

ようやくこちらも『夏休み』に入り、暑さから解消された
KIDですー！！

しかーしー！！

今日のこの空・・・。

一体何ちゆう色やねん！！！！（ムカツ！）

今にも雨、雷がやってきそつな・・・。

と思っていたら、会社から帰宅した母の一言・・・。

「雷鳴り始めて、雨降ってきたわよ」

があああああーっ！！！！

夏休み最初の月曜日、ホンマに最悪や！！

コナン

「なんか『ゲリラ』だってさ・・・。（今、ニュースで・・・）」

快斗

「場所によっては、雷、大雨、竜巻・・・んで？ KIDん家は
？」

K I D

全部入ってます……、その地域……。

今年の夏は嫌でも『お籠り』だぜ……（ハァー……）

半分テンションで、それでは……ミ

コナン

「『がない……』」

26・痕跡とトリック

午後9時08分 船の東側。

気が付けばかなり遅めの時間になっていたにも関わらず、事件現場へと足を進ませるコナンやその友達の誰一人、睡魔に襲われる事はなかった。

ただ皆の『真実を見つけない！』という強い想いのあってこそだろうと、コナンは後ろを走る皆の顔を見ながら思う。

船の先端部に向かうのには、あの会議室からはそう時間は掛からない。

目的の場所に辿り着いてまず思ったのは、当然の事ながら快斗の遺体がないこと……。

その代わりに、気休めのつもりで被されていたブルーシートを退かしてみると、そこには快斗の入っていた箱と、枯れ果てた血の海が広がっていた。

先程のような吐き気を起こす気配がないのは、多分血が全て乾いていたからだろう……。

平矢「ここやな……」

コナン「ああ……。色々父さん達が調べたあとみただけど、皆……。気になったのがあったら教えろよ！」

蓮「分かってる！」

紅葉「今調べてるよ！」

そう答えると、皆はそれぞれ事件現場を隈なく物色し始めた。

その少し離れたところで、光夜は快斗の入っていた箱を手で撫でながら、半分色を失ったかのような目で底を見る。

光夜「親父……」

快斗がついさつきまで横たわっていたそこは、今は血しか残っていない……。

けれど、何故かそこに快斗が、まだいるような気がした。
あくまでも、気がしたただけだが……。

コナン「光夜……」

光夜「悪い……。親父の為にも、何か見つけねえとな」

そう言つて光夜が歩き出そうとした時、先程まで別の場所を調べていた平矢が、突然こちらの方にやってきた。

最初、何か手掛かりを見つけたのではないかと思つたのだが……。

平矢「こつちには何もあらへん。そもそも黒羽のオトンはここで……」

紅葉「平矢！ アンタあんまり良う見てへんやないの！ そんな調べ方しとつたら、気になるものがあつても見つけられへんやん！」

平矢「じゃがましい！！ これでも真剣に探してんねん！ 俺はなあ、ここで黒羽のオトンが殺された様子をイメージして、それと全く同じ体勢に」

紅葉「へいへい……。それやつたら、勝手に遺体役やつとつてや」
平矢「おい！ 人の話は最後まで聞け！！」

とは言つたものの、それ以上は会話をせず、平矢はコナンと光夜の目の前で、快斗が腹に刃物を刺され、そのまま倒れる姿を見事に演

じて見せた。

ただし、箱の中ではなく、その隣の通路の床でだが……。

平矢「どうや、コナン！ 光夜！ なんか気が付いたか！？」

コナン「……いやぁ……。『気が付いた』つつつても……」

光夜「分かったのは、隠れていて蓋を開けた瞬間、誰かに刺された
つて事だけで……」

平矢「開けた……瞬間？」

それを聞いて『？』マークを浮かべるので、コナンは平矢に丁寧に
説明した。

コナン「ほら。この箱の外側には、この最初に俺が見つけた血しか
ないだろ？ 普通箱の外で殺されたのなら、床とかにも血が付いて
るはずなんだ。それが無いって事は……」

平矢「箱の中で殺された事以外考えられへん言うわけやなあ。とこ
ろで……、それって、今の俺の再現を見て分かったんか？」

コナン「いいや……。その前から……」

光夜「最初っからだぜ？ 残念ながら……」

二人がそう答えると、平矢は一瞬その場にうつ伏せになりながら、
やがてゆっくりと通路から起き上がり『何やねん！』と言いながら
立ち上がるうとした。

と、その時。

ヒュウウウー……

平矢「冷っ！！ なっ……、なっ……、何やねん！？ この風
！！ 超冷たいやん！」

コナン・光夜「？」

直子・紅葉「えっ？」

いきなりそう言いながら首筋を摩り始めた平矢を見て、皆は『一体何事か』と、一瞬キョトンとした顔をしながら、平矢の方を見つめた。

どうもかなりの冷気が、平矢の後ろ首筋に当たったらしい。

その様子を見ていて、いきなり笑い出したのは、以外にも蓮だった。

蓮「キャハハハ！ 平矢君、立ってる場所間違えたね」

平矢「はあ？ 立ってる場所？」

蓮「うん。今の多分……、あの厨房の換気用ホースから出た冷気よ。きつと」

紅葉・直子・平矢・光夜「か……、換気用冷気？」

確かに上の方を見てみると、平矢が座っていた場所の丁度真上に、黄土色がさらにグレーっぽくなったような太くて短いホースがあった。

おまけに、ホースの向いている向きは、平矢が立っている箱の左側。首筋に冷気が来てもおかしくない状態である。

蓮「この船の厨房にはね、普通よりも少し大きめの冷蔵庫があるの。と言うより……、冷凍室かな？ とりあえずそういうのがあってその冷凍庫で使って汚れた冷気を、あの太いホースから外に出してるんだ。そっちの方が、いつも食べ物新鮮でおいしくなるからって……。前に、コナンのお父さんが言ったの」

コナン「いつの間……」

コナンはそれを聞いて、頭の中に浮かぶ新一をジト目で睨んだ。

全く……。

余計なことはこうして言うんだから……。それにこの様子だと、おそらくそのシステムがかなり高額であるということも話したに違いない……。

平矢「ちなみに聞いとくけど……。これ、大体何度くらいの冷気なんや？」

蓮「うん……。あんまり数字までは聞いてないけど、大体……。マイナス2度くらいかなあ……」

平矢「ま……。っ！ マイナス2度っ！？ そ……。そらあ随分、冷たいわけやなあ……」

紅葉・直子・光夜「へえー……」

今になって考えてみれば、いきなり首筋にマイナス2度の冷気が吹いてきたら、男性なら焦りモノ……。女性なら悲鳴モノだっただろう……。

首筋に吹かれた人間が平矢で（または関西人で）良かったと思う。本日二回目の悲鳴はもう御免だ……。

ふっと、コナンはホースの溝を見つめて、眉をしかめた。

何処となく違和感がある……。でも一体、何処が不自然で……？

コナンはホースの上の方を覗き、その違和感に気が付いた。

コナン「おかしい……。おかしいぞ、これ……」

蓮「何がおかしいの？ コナン。変なものでも付いてた？」

コナン「似たようなものだけだな。ちよつとこつち来いよ」

コナンにいきなり呼ばれ、皆はワケの分からぬまま、ホースを取り囲むように座った。

皆が集まると、コナンはホースの上の部分に指を差す。

コナン「ほら、これ……。ホースの溝にあるはずの埃が、所々無くなってるだろ？ 特に左側」

光夜「ホントだ……」

コナン「それに……。何故か真新しく、残りの埃が溝の下側に寄ってる……。これって、元々左側に向いていた換気用ホースを、誰かが動かして、その後でまた元の場所に戻したって事だ」

紅葉「でもなんで……」

『言うよりも、まずは調べる方が先！』

と言わんばかりに、平矢と光夜、そしてコナンの3人は、ホースが一時的に向いていた方向に戻した。

もしかしたら、何かヒントがあるかもしれない……。

溝の埃の位置を確かめながら、ホースを慎重に動かしてゆく。

そして『ここだ！』と思つた場所で、ホースから手を放してみた。

その場所は……。

コナン「えっ？」

光夜「なんで……？」

ホースの口先は、事もあるうに快斗の遺体が入っていたあの箱の真上だった。

勿論、この高さからでも、冷気はちゃんと箱の中にまで入る。
が……。

平矢「これ……、偶然やるか……」

コナン・光夜「……」

蓮「どうして……、ホースが快斗さんの遺体の方に……」

紅葉「もし偶然やなかったら……」

何となく冷たい空気が、皆の中に吹き掛かる。

直子「そういえば……。蓮ちゃん、さっきコナン君に何を聞きたかったの？」

蓮「えっ？ ああ……。あれ？」

それを聞いて、コナンも先程の会議室の時の会話が過った。

蓮「別に大した事じゃないんだけど……。あの羽の暗号……。なんでわざわざ『ハトの羽』をつかったのかなあって、思ってた……」

コナン「ハト……？」

蓮「うん……」

それを聞いても、コナンは相変わらず『？』マークを浮かべるので、蓮はその理由を詳しく話した。

蓮「だって、鳥の羽が必要だったのなら、快斗さんの服のブローチに付いてたのよ？ 青く染めたカラスの羽……。勿論、皆のブローチにも……。それを使えばよかったのに、実際に使ったのは自分の飼ってたハトの羽……。なんかおかしくない？」

コナン「!!!」

それを聞いた瞬間、コナンの脳裏に衝撃が走った。

誘拐ゲーム……。二つに切られた羽……。三つに切られた葉の中心……。箱の中……。

血まみれの遺体……、遺体の方に向けられていたホース……。
マイナス2度……。S A \……。ブローチの羽……。アリバ
イ……。死後硬直……。ダイニング・メッセージ……。
死亡推定時刻……。暗号……。そして、ハトの羽!!

全ての予測が、一本の糸に纏まった。

コナン「そうか……。そうだったんだっ!!」

蓮「どうしたの？ コナン」

反応の変わったコナンを心配しながら、蓮がその顔を覗き込むと、
コナンは鋭い目のまま笑みを浮かべ、皆に言った。

コナン「犯人……。分かったぜ」

26・痕跡とトリック(後書き)

どーも

あちらこちら蚊に刺されて『かゆい!』

KIDDでーす!!

コナン

「なんで? 家の中で?」

KIDD

いや・・・、家の近くにさあ、セミが毎回成虫になる場所があんだよ。

(あれ、幻想的なんですよねー。よく見に行きます)

そこに親と2人で行ってたら、蚊に刺されまくって・・・(笑)

(まあ、あんな夜中に半袖&半ズボンで行った、俺も俺だけ・・・)

快斗

「ああ! あの幼虫が殻を破って成虫になるヤツね」

コナン

「確かに『幻想的』つつつたら『幻想的』だけど・・・。んで? 何匹いたんだ?」

KIDD

全部で68匹!!--(^o^) /

最高記録ですよ！

（だから夏になると、あの辺はセミがぎょーさんいるんだろっな・・・）

それでは ミ

27・蒼い目

午後9時46分　パーティー会場。

事件現場を後にしたコナン達は、すぐにパーティー会場の方へと戻って行った。

トリックと犯人は一応分かったが、まだ完全な証拠がない。

アレ（・・・）が犯人を示していても、物理的な証拠がない限り、犯人を逮捕するのは不可能だ。

いつも推理小説に書かれていること・・・。

『ダイニング・メッセージだけでは、犯人を確保できない』

コナン（捕まえる為には、完全な証拠を見つけないと・・・）

コナンは胸中でそう呟きながら、後ろを付いて来ていた蓮達の方を振り返った。

コナン「皆。俺、ちょっと母さんに訊きたい事があるから、皆はパーティー会場に全員を集めてほしいんだ。多分、父さん達がいらないだろうから・・・」

蓮「そう言えば・・・、平矢のお父さんも哀姉さんも・・・」

平矢「OK！　分かったで。あの3人、すぐ集めてくるさかい」

コナン「ああ、頼んだぜ。あつ・・・、光夜。ちよつといいか？」

ふつと何かを思い出したように、コナンは光夜だけを呼び出した。

光夜は一瞬『何だろう？』と言った感じの表情を浮かべながら、コナンの元へと足を進ませる。

他の皆は、もう既に新一達を呼びに行つた後だ。

コナン「光夜。実は確かめてほしい事があるんだけど……」

光夜「何だよ？ 確かめてほしい事って……」

光夜がそう問い掛けると、コナンは光夜の耳に口を近付け、何かをヒソヒソと話し始めた。

そしてそこから出てきた言葉に、光夜は目を見開く。

光夜「まつ……マジかよ……。それって……！」

コナン「いいから！ まだ『完全に』とまでは言えねえけど、一応調べて欲しんだ。きつと、そうだろうから……」

光夜は一瞬迷つたような表情を浮かべたが、やがて『分かつた』と言つて、一足先に走り出した皆と同じ方向に向かつて走り出した。

コナン（さてと……。こっちはこっちで……）

そう呟きながら、コナンは蘭に視線を向ける。

蘭は先程から、園子達と一緒に集まっている。

青と白のドレスというのもあり、会場の中では目立つ衣装……。すぐに居場所は特定できた。

コナン「母さん！」

蘭「！……コナン！ 何処行つてたの！ 姿が見えないから心配してたのよ!？」

コナン「ごめんなさい……。ねえ、母さん。僕達が居ない間のパーティー会場、どんな感じだったの？」

蘭「えっ……？」

園子「どんなつて……」

コナンにそう訊かれ、女子4人は半分暗い表情を浮かべている。

ひよっとして……。

コナン「母さん、快斗さんの事は知ってるよ。僕達、第一発見者だったんだ」

蘭・園子「えっ!？」

青子「ほ……、本当に……?」

コナン「うん……。光夜も見たんだ……。ねえ、母さん。僕達が居ない間、ここ(パーティー会場)、どんな感じだったの?」

コナンが再度尋ねると、蘭はまだ多少迷ってはいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

蘭「別に……。大きな変化はなかったわよ。黒羽君が殺されたこと、知らされた人間は少なかつたし……。あんまり騒がなかつたし……」

コナン「じゃあ、快斗さんの遺体が見つかる前は? そうだなあ……。大体……。8時丁度くらい」

蘭「8時丁度? 皆、何かあつたかなあ……?」

蘭がそう呟きながら、園子達にその時間帯の事を尋ねる。

宙を仰ぎながら最初に口を開いたのは、和葉だつた。

和葉「その時つて……。工藤君が皆に『これにてパーティーは終了です! 眠い方とエライ酔つた方は、それぞれの部屋に戻ってくださいーい!』言つて、周りが爆笑ムードになつた時とちゃう?」

青子「そうよ! 工藤君が壇上上がった時よ。青子、ちゃんと見てたもん」

コナン「その他には? 全員ここにいたの?」

蘭「それは流石に分かんないけど……。でも、そのスピーチの前に元太君とコナンのおばあちゃん、それと新一と園子が……。スピーチが始まつた頃に服部君がトイレに行つたけど」

コナン「宴会終了のスピーチつて、大体どれくらい?」

蘭「うーん……。5分……。強くらいかな？ でも、新一はずっとその後ここにいたよ？ 元太君達としばらく話してたし、その後はお父さんとか、私達のところにも来てたし……」

つまり、先程服部が言っていた『新一のアリバイ』というのはこの事だ。

新一は絶えず、このパーティー会場で目撃されている。しかも、快斗が殺された後も、新一にはここを抜け出せる機会がない……。

唯一出来たのは、蓮が呼びに行った時のみ……。だがそれだけでは、殺害した時の凶器を捨てる隙すらない……。

蓮が呼びに行った通路は、内側ルート。

海に凶器を捨てやすい外側ルートからでは、快斗の遺体のあった現場からは遠周りになってしまう。

それに、新一の後ろには服部が居た。

もし仮に捨てられたとしても、後ろにいた服部が気付かぬはずがない。

『探偵』なのだから、それは当たり前……。

コナン（となると、犯人はもうあの人以上……）

青子「そうだ……。！ 思い出した！ あと同じ頃に、博士と哀ちゃんが喧嘩してたの」

コナン「えっ？ 喧嘩？ どうして？」

青子「なんでも、博士がまたこっそり『ローストビーフ』を食べよ

うとしたららしくて、それに気が付いた哀ちゃんが、博士に思いつきり怒鳴ってたの」

園子「そうそう！ 『あれほど言ったのに、またメタボルつもり！？』ってね」

コナン「ふーん……。ありがとう、母さん。それだけ訊ければ十分だよ。じゃあ、僕皆を待たせてるから」

蘭「あつ、ちよっと、コナン！」

蘭の呼び掛けも無視して、コナンは一目散に蓮達の方へと走り出した。

その姿を、心配そうに蘭は見つめる。

蘭「コナン……。まさか……。事件の事調べてるんじゃない？」
博士「ん？ どうしたんじゃない？ 蘭君」

その声に反応するように後ろを振り返ってみると、そこには同じく心配そうな顔をしている博士の姿があった。

蘭「あつ、博士……。実は、コナンがまた何かを調べてて……。それで私……」

博士「大丈夫じゃよ、蘭君。コナン君達には新一が付いておる。また事件に首を突っ込んだとしても、危ない目には合わせんよ」

蘭「そう……。ですよね」

それを聞いて安心したのか、蘭は軽く笑みを見せながら、園子達の集団の中へと戻って行った。

一方のコナンは、皆がパーティー会場に集まったのを確認し、光夜達の元へと急いだ。

5人は、船の入り口付近で壁に寄り掛かっている。

コナン「みんな！ 全員呼んできた？」

光夜「いや……」

平矢「工藤のオトンがまだ来うへんのや。なんでも、圏外地域かどうか確かめる言うて……」

コナン「ったく……。父さん肝心な時に限って……」

そう言いながら、コナンは『チツ！』と舌打ちをして、新一がやってくるであろう扉を睨みつけた。

いつも肝心な時はこういう父親である。

ふつと、光夜の姿に目が止まったコナンは、先程光夜に調べてもらった事を尋ねた。

どうだったのか、どうしても今訊きたかった。

コナン「光夜。それで……、どうだった……？」

光夜「……。あつたよ、一回……。今日の8時27分頃に……」

コナン「27分？ ……丁度俺と光夜が言い争った時だよな？」

光夜「ああ……。でも、一回あつたら確定じゃねえの？」

コナン「……。」

二人の周りにいる平矢達には、二人が何の話をしているのかさっぱり分からない。

唯一分かっている事は、コナンが何かを光夜に調べさせ、その結果を知らせていることのみだ。

平矢「おい……。何の話や？」

コナン「光夜……。」

平矢「おい！」

コナン「どうせ今日分かるからいいよ。それよりも父さんが戻んねえと、話のしようが……」

直子「新一さんなら戻って来たよ？ ついさつき・・・」
コナン「えっ!?!」

それを聞いて辺りを見渡してみると、服部と話をしている新一の姿があった。

その険しい表情から考えると、どうやら快斗の事を話しているらしい。

コナン「父さん!」

新一「コナン・・・。どうしたんだ？ 急に・・・。皆に俺を呼んでこさせて・・・」

新一はちよつと半分笑いを含ませたような表情で、コナンの顔を見つめた。

一方のコナンは、一応名前は呼んだものの、顔を下に伏せていて、全くその表情は掴めない。

そんなコナンの表情が気になったのか、新一はコナンの顔を慎重に見つめながら、膝に手を当てて中腰になった。

今は丁度、コナンと視線が一緒になる高さである。

新一「コナン・・・?」

コナン「父さん・・・。俺・・・」

そう呟くように言ったのと同時に、コナンは顔を上に上げ、新一を見つめながら口を開く。

コナン「犯人・・・、分かったんだ・・・! だから今、それを暴く! この場で!」

新一「!?!」

その発言に目を見開いた新一は、ただ真つすぐと己を見つめるコナンの目を見つめた。

自分と同じ、蒼くて大きな目……。

そうだ……。

コナンは生まれつき……、新一と目が似てたんだ……。
蘭から初めてそう言われて、初めてコナンが目を開いた時……、
自分でも『本当だ』と思った……。

何処までも濃くて、何処までも深い、蒼い目……。

その大きな目には、驚いた表情を浮かべている新一自身が、ハッキリと映り込んでいた。

それでもこの目は揺るがず、瞬きもせず……。
ただただ新一だけを見つめていた。

自分と同じ目で……。

新一を……!!

いつも新一が真実を見つめてきた目が、今は……、
息子コナンの中にも
ある……!

本当にその目が……。

犯人を映し出したと言っのなら……。

新一「……………失敗するなよ……。幼い時の推理の失敗は、周りはそうでなくとも、自分自身には大きなダメージを与えるぞ」
コナン「父さんも……………失敗した事があったの？」
コナンがそう問い掛けると、新一は「フツ……………」と小さく笑って、会場の奥の方へと踵の向きを変えた。

答えはなしか……………。

そう思ったコナンの耳に、後ろを向いたままの新一の声が響く。

新一「忘れたのか……………。俺は前に言っただろ？ 『迷宮なしの名探偵』って……………」
コナン「!!！」

再度新一の方に振り返ったコナンが見たものは、事件を解決する前の、新一の笑みの顔だった。

27・蒼い目（後書き）

どーも

まさかの今頃になって『予約投稿』が出来る事に気が付いた
KIDでーす！！

はあー。。。。

もう少しユーザートップ見るべきだった。。。。

コナン

「この機能に気が付いてたら、用事で投稿できない時も出来たのにな。。。」

KID

だろ！？

んで、丁度再来週は予定があって投稿出来ねえから『丁度いいなあ』と思った自分。。。。

（しっかし、なんで気付かなかったんだろ？）

来週はいよいよ、コナンの推理ショーが始まります！

それでは ミ

28・推理ショー開始!

新一からの許可も得たコナンは、早速皆が集まったのを再度確認した。

ついでに、犯人の人物もこの場にいるのかどうかも……。

コナン(大丈夫……。全員居る……)

コナンはそう呟きながら、なるべくパーティー会場の真ん中へと、皆と一緒に移動した。

とその途中、何やら端の方で小五郎の声が聞こえてくる。

小五郎「一体どうしたって言うんだよ!　ここに全員集めて、一体何を言うつもりだ!?　探偵ボウズ!」

新一「だから……。ここでこれから始めるのさ。さっきの事件の犯人を、推理ショーで……」

小五郎「ほう……。名前に『さ』の付く人間は、容疑者じゃねえんだろ?　誰か心当たりでもいたのか?」

新一「さあ……」

小五郎「『さあ』って、犯人分かったんじゃないのかよ!　オメーは……!」

新一「『分かった』と言っているのは、俺じゃなくてコナンだ」

小五郎「コナン……?　まさか、俺の推理の二の舞をすんじゃないえだろ?」

新一「さあね……。もつともコナンはあの場にいたし、もう犯人の証拠も手に入れてるみたいだから、俺は期待してるけどな……」

新一はそれだけ言うと、後ろにコナンが居たことに気が付いていたのか、こちらの方に視線を向けながら、笑みを浮かべた。

新一「さあ、コナン！ ギャラリーは集まったぜ。その推理、聞かせてもらおうか？」

コナン「ああ……。父さんがその推理を聞いて、退屈するかどうかまでは、保障しないけどね……」

そんな二人の会話が聞こえたのか、パーティー会場に集まっていた参加者全員が、コナン達の方に視線を向けた。

どうやら新一は、コナン達が推理ショーをスムーズに始められるように、わざと大きな声でそう言ったらしい。

コナン（まったく……。そんな事しなくたって……）

歩美「えっ！？ コナン君、犯人分かったの？」

元太「本当かよ！？」

コナン「うん。そのトリックも、ダイニング・メッセージの意味もね……」

参加者全員「！！」

皆の顔に驚いたような表情が浮かんだが、新一と灰原、服部だけはその場で真顔のままだ。

やはりこの3人は、いつもの事ながら反応はしないか……。

元太「んで？ 犯人誰なんだよ！！」

コナン「その前に……。あんまりこのパーティーに参加してる人は、この事件の事を詳しく知らないでしょ？ だからその説明から最初は聞いて欲しんだ……」

新一（……）

と言うと、コナンは色々な事をメモ書きした手帳を取り出し、その文書を読み上げる。

コナン「まず、午後6時30分頃。父さんが僕達のサプライズとして企画した誘拐ゲームを開始」

小五郎「ゆ・・・、誘拐ゲーム？」

コナン「うん。ゲームには『誘拐犯役』と『被害者役』がいて、その犯人と誘拐された人を、この船のあちろちらに隠されてる暗号を解読して探すんだ」

蓮「予定だと『誘拐犯役』は哀お姉さんで『被害者役』は快斗さんだったの」

光夜「丁度その頃、俺の親父が、トイレに行つたつきり姿が見えなくなつて・・・。それで、ゲーム開始に気が付いたんだ」

そこまでは、数名の人達が確認している。

計画者でもあつた博士と服部、灰原は、彼らの話と説明を聞きながら頷いた。

新一「ついでに言わせてもらえば・・・。コナン達が最初の暗号の答えが分かつたとされる50分頃、俺は快斗に予め持たせてたトランシーバーに連絡を入れた。内容は、快斗の隠れる予定の木箱・・・。後に遺体発見現場になる箱の中に隠れるように言つたんだ。その時はまだ快斗は生きていて、トランシーバーからいつもの能天気な声が聞こえてきてた・・・」

園子「えっ？ 木箱つて、最初から入つてたわけじゃなかったの？」
新一「ああ・・・。入るのは後の方で、最初は船の外側通路にある柱に隠れてもらつてたんだ。勿論、それも予定と手順通りでね・・・」

予定と手順と言うことは、予め新一は博士の家か何処かで船の地図を広げ、4人で念入りに決めていたという事になる。

おそらく『トイレに行く』というタイミングや順番も、この予定として決めていた事には入っているのだろう。

さらに分かった事は、灰原が『誘拐犯』、快斗が『被害者』。となれば、残りの新一、服部、博士は『見張り』と『連絡役』だったに違いない。

随分前に聞いた話や、これまでの3人の行動も含めて考えれば、博士は『見張り役』、新一と服部は『連絡役』だったということだ。

コナン「その後、午後7時18分に、僕達は3つ目の暗号解読の為、船の外に出た。ただし、出たのは真ん中通路だったから、快斗さんの隠れていた箱は一切見えてないし、その場所すら見えなかった。。その後、父さんは快斗さんに連絡を入れたんだよね？」

新一「ああ。。。57分くらいにな。。。」
服部「そやけどその時にはもう既に、黒羽は無線に出えへんかった。。。」

コナン「そして午後8時10分ジャスト。。。僕達が最後の4つ目の暗号を解読し、例の東側に辿り着き、快斗さんの遺体を木箱の中で発見した。。。」

大まかな流れはこうだ。

その途中にパーティーの広場で、新一のパーティーお開きのスピーチがあつたとか、凶器に使われたとされる厨房の包丁が一本なくなっていたなど、その手の話は多々あるが、今はとりあえずいいだろう。

それよりも大事な話と言えば。。。。

紅葉「そんで、その快斗はんの傍に、ヘンなモンが残ってたんや」
歩美・元太・光彦「ヘンなもの。。。？」

光夜「ああ。。。一つは、二つに切られた白いハトの羽と、ここに置いてる柚子の葉の一枚が3つに切られ、その内の真ん中の部分

が現場に残されていたこと……。しかもそれがキレイに『ハトの羽・葉の真ん中・ハトの羽』という順番に並べられていた」

平矢「もう一つは『SA』と大きな字で書かれた英語と、その隣に少し小さめの『\』が書かれていたことや」

直子「つまり『SA\』ってこと」

コナンはその説明を分かりやすく伝える為、両手にその暗号のようなものを持って撮った写真を持ち上げ、皆に見せた。

やや血が目立つ写真だったが、それでも構わずに、青子はその写真を鋭い目で見つめる。

その横で、少年探偵団のメンバーは必死に暗号を見つめながら考え込む。

勿論、そんなに単純な暗号ではないのだが……。

光夜「これを俺達は、親父の『ダイニング・メッセージ』として考えた……。そうだよな？ コナン」

コナン「ああ……。だけど、俺達は決定的なことをに気が付いていなかったんだ……」

光夜「えっ？」

予定として聞いていなかった言葉に、光夜達は『？』マークを浮かべる。

一応、自分達がやらなければならない事の説明だとかは聞いていたが、そんな大事な事は聞いていない。

もともと『大事そうな話』と言えば、まだ犯人や暗号の答えも、自分達は聞いていないのだが……。

平矢「なんや？ 決定的なことって……？」

コナン「よく考えてみるよ。俺達はこのゲームを知っていたし、そ

の後で偶々話を聞いていた母さんが周りに話したから、この事は公になった。だけど・・・『快斗さんが予定で何処に隠れていたか』までは、全員知らなかっただろ?」

蓮・光夜・直子・平矢・紅葉「!!」

確かにコナンの言う通りだ。

自分達は快斗が何処に隠れていたのか、全く以て知らなかった。

そもそもあの場所に行き着いたのは、最後の暗号を解読したから・・・。

それにコナンの母親でもある蘭は、コナン達の行動に不思議がる皆に説明していたが、考えてみれば蘭も、快斗の隠れていた場所は知らなかったのだ・・・。

コナン「何処にいるのかも分からない人間を、いきなり刃物で殺すことは出来ない・・・。出来る筈がないんだ!」

蓮「じゃ・・・、じゃあ・・・。犯人は・・・」

コナン「今、蓮が思っている通りさ・・・。犯人はこのパーティーの計画者だった4人以外に、まずありえない!!」

博士「!?!」

灰原「!!」

服部・新一「・・・・・・・・」

コナンの鋭い目が、4人の目とぶつかり合った・・・。

28・推理ショー開始！（後書き）

どーも

『実は最終話真近だ』と気が付いた
KIDでーす！！

意識してないと忘れますね・・・、これ・・・。

最終話までは、多分10話ないかも・・・。

（という現在の状況・・・）

コナン

「マジかよ！ 聞いてねえぞ！？ それ！」

快斗

「しかも・・・、俺を殺した（何故、俺（一一）（犯人、まだ分かってねえし・・・）」

KID

一応、あと3話後（？）くらいに判明する予定・・・。

でも、容疑者絞られちゃったし、適当に予想付くでしょ？

（『あの人』か《あの人》のどっちか！ みたいな・・・（苦笑）

コナン

「でも、それ考えると詰まんない・・・（・・・）」

KID

という方は、この先の話と推理に注目して下さいーい！
それでは ミ

29・死亡推定時刻

コナン「犯人はこのパーティーの計画者だった4人以外、まずありえない！」

コナンがそう言い切ると、参加者の人々は驚いた表情のまま、自分の一番近くにいる容疑者の方に視線を向けた。

自分達の知り合いにこんな視線を向ける事になるうとは、きっと誰しも思わなかっただろう……。

ふっとコナンのその言い文に口を開いたのは、容疑者達ではなく光夜だ。

光夜「だ……、だけど……！！ この4人には全員、アリバイがあるだろ！？ ずっと『このパーティー会場に居た』っていうアリバイが……。だったら、この4人に犯行は無理なんじゃ……」

確かに光夜の言う通り、彼らが容疑者から一番最初に抜けたのは、パーティー会場で目撃されていたから……。

他の人達は目撃情報がなかったから、今も容疑者のままだったわけだ。

でも……。

それを考えると、引つ掛かる事がいくつかある……。

コナン「確かに……。この計画者全員はアリバイがあるけど、逆に考えれば、計画者全員がキレイにアリバイが成立しているのはおかしいんだ……。ましてや、ずっとこの4人が一緒に固まっていたならともかく、バラバラに行動をしていて、にも関わらず目撃情

報があつたのはおかし過ぎるんだよ。犯行時間が合っていたのも……」
直子「た……、確かに……」

そうなつてくると、犯行時刻や死亡推定時刻も怪しくなってくる。まるで……、自分達に都合よく偽造させたようだ……。

コナン「それに、普通こういうパーティーの時、その人個人の目撃が確実になるのは、人が少なくなった時なんだ。一般的に何かの余興があつて人が集まつた時は、目撃情報は時間よりも、その人を『その時間の時に見ていた』という、人の数が目立つてくる……。その途中でその人物が消えても、人々は人混みを見て『紛れて隠れているだけ』としか思わない……。ましてや、何かを見ていたら尚更気付かないからな」

蓮「でもそれじゃあ、その人がいつ会場を抜けても、誰も気が付かないんじゃない……」
コナン「その通り……。目撃情報がこんなにきれいに4人もあるわけがない……。ましてや犯行時刻の時、パーティーではおじいちゃん達が騒いでたみたいだし……」

それを聞いて、小五郎は小さく「あつ……。ああ……」と頷いた。

実はこの時、会場の方ではカラオケ大会を行つていて、酔つた人間やら、高校生軍・女子軍やらで大賑わいだったのである。

だが、誰かが歌い出すと、その後で歌い終わった人間の目撃例が不十分だった為、アリバイとしては成立していなかった。

紅葉「じゃあまさか……！ 犯人は計画者全員なん!？」

紅葉が驚いたように博士達に視線を向けたが、コナンはそれに対し

て、首を横に振った。

コナン「いいや……。実際の犯人は一人だけさ。多分、犯行手順はこうだ。まず……。予め連絡用として持っていたトランシーバーで、快斗さんと連絡を取る。快斗さんの遺体の傍に落ちていたトランシーバーから見て、それで父さん達と連絡を取っていたと考えていい……」

平矢「せやけど、博士と灰原の姉ちゃんは……」

コナン「もしこの二人の場合は、直接木箱のところに言つて、声を掛ければいいんだ……。そしてその声に答えた快斗さんは、まず、声を掛けられて要件を聞くだろ？ その時に、犯人の人間はこう言つただ」

『ちよつと予定に変更があったから、それを話したい』

コナン「それを聞いたら、快斗さんは無線の場合『分かった』と言つて、蓋を開けられる用意を……。直接の場合は、その木箱の蓋をその場で開けてしまう……。」

そこから先は、皆、察している通りだ。

直子「そのまま……。包丁で刺される……」

コナン「そう……。厨房から盗まれた包丁でね……。そしてその後は、快斗さんが死んだとは確認せずに蓋を閉め、凶器を海に放り、事件を知つたフリをするだけ……。それだけで、演技は十分だ」

皆の脳裏に、その時の犯人の行動が一気に駆け巡る。

快斗を刺し、返り血を浴びぬようにゆっくりとナイフを抜き、蓋を閉め、凶器を海に捨て、皆のいるパーティー会場に顔を出す。そして蓮達に呼び出されるか、直接新一達から事情を聞くかで、初めて事件を知ったフリをする。

内心、博士には無理な事だろうとは思うが、感情面だけで容疑者候補から外すことは出来ない。

それに、そんな事をするのは、まだ容疑者となっている3人に対して失礼な事である。

小五郎「しっかしなあ……。いくらなんでも、死亡推定時刻までは誤魔化せねえんじゃねえか？ 全員、アリバイがあるんだし……」

コナン「フツ……。確かに……。その死亡推定時刻があったら、この4人に犯人を絞り込ませる事は出来ないけど……。でももしこの死亡推定時刻が、偽物だったら？ 犯人がし掛けたトリックにまんまとハマったものだとしたら……。どうなる？」

メンバー全員「！！」

死亡推定時刻を……。
偽る……？

光夜「だけど！ 親父の死んだ時間は、お前の父親と平矢の父親が調べてたじゃないか！ しかも、二人とも時間を置いて確認してたけど、全く同じ時間を……」

コナン「だからそれは、どっちかが嘘を言ってるか、犯人の思惑に嵌められたかのどっちかなんだよ」

和葉「でも！ そんなこと……。ホンマに出来るん！？」

蘭「だって……。死亡推定時刻よ！？ いくらなんでも、それは

無理なんじゃ……」

いつも新一や服部の推理を聞いていた蘭と和葉には、その死亡推定時刻を偽るというトリックが、全く以て理解できなかった。

いつも事件解決の時に役立つてもいる『死亡推定時刻』……。現にそれのおかげで、アリバイが成立したり、その時に何が周りであつたのかを読み解く事が出来た。

いくつもの糸が絡まっている事件に置いては、まさに『本線』のよ
うなものである。

それを偽られたら、事件などは解決しようがない……。本当に、偽ることなど可能なのか……。

二人には理解しがかかった……。

だがコナンは……。

コナン「出来るよ……。あの現場の近くにあつた、換気用ホースを使えばね！」

自信に満ちたその目に、皆はまたしても驚いた表情を浮かべる。

たった一人……。

顔を蒼褪めた人間を除いて……。

29・死亡推定時刻（後書き）

どーも

今頃は東京の孤島に行っている

KIDでーす！！

現在、私は待ちに待ったキャンプ中です！！

（コナン達が旅行しているのと同時に（＾・＾））

その為、予約の投稿と致しました！

いや〜、しかし・・・。

この機能に気が付いてよかった〜（ホッ）

去年くらいは全く気が付かなくて、投稿日を変えてましたからねえ・
・・・。

（もったいねえ〜）

コナン

「だけど、完全に予定が入って（しかも小説書く暇がなかったら）
この機能、役に立たねえぞ？」

KID

（それは御尤も・・・）

さて、次回はいよいよ・・・。

いよいよ犯人判明です！

(理由とかは再来週になるかもしれませんが・・・)

楽しみにしていてください！

それでは ミ

30・真犯人

蘭「か・・・、換気用ホース？」

和葉「ホースつて・・・、蘭ちゃんが言ってた冷凍室の？」

和葉がそう問い掛けると、コナンは静かに頷き、そのホースがあった場所を指差す。

コナン「あの換気用ホースからは、冷凍庫から排気されたマイナス2度の冷気が、いつも外に出ているんだ・・・。それを遺体に10分くらい当たらせれば、死後硬直は一時的に早まる。つまり・・・、死亡推定時刻を調べる時、本来の死亡推定時刻よりもかなり時間を前の方にする事が出来るんだ」

一般的な死後硬直の発生時間は、死後約30分～2時間。
その後9～12時間で全身完全硬直。

約30時間、つまり1日と6時間で完全硬直が解け始め、70時間でもある2日間と22時間で元の状態に戻るのが普通。

だがそれに暖房と冷房の力が加われば、死後硬直などいくらでも誤魔化せられるのだ。

暖房を入れれば死後硬直の溶ける時間は早まるし、逆に冷房を入れれば、死後硬直の発生時間を早められる。

ましてや『マイナス2度』などというとんでもない温度の冷気を10分も浴びていれば、死後硬直が早まるのは当然・・・。

いや・・・。

たとえば死後硬直が始まっていなかったとしても、遺体は半冷凍され

ていたのと全く同じ状態になる。

平矢「なるほど〜！ 確かにそれやったら、あの場所なら可能やで。あのホースの場所、快斗はんの真上にあつたからなあ」

直子「それに、あの埃が変な形で寄つたのも、それだつたらすぐに筋が通るものね」

紅葉「誰かがホースの向きを快斗はんの方に向けて、冷やしてたつて事や」

コナン「まあ・・・、そういうことさ」

つまり、コナンが言いたい事はこういうことである。

まず、無線が直接その現場に行つて快斗を呼び出し、やってきた快斗を殺害。

その後、例の換気用ホースを快斗の遺体に当てさせ、死後硬直を早まらせる。

元々快斗の殺害された場所の真上には、向きは違っていたが、その換気用のホースがあつた。

快斗の方に当てさせるのは十分可能である。

そしてその後、ある程度死亡時刻を遅めたところで、換気用ホースを元の向きに戻し、コナン達に気付かれぬよう現場を後にする。

あとはコナン達が予測通りに快斗を見つけ、事件に気が付いたフリをすればいいのだ。

またはその時に、皆と一緒に再びその現場に戻り、皆が遺体に視線がいつている間に、ホースの向きを元に戻してしまつてもいい。

それだけで、一応仕掛け&演技は完了だ。
だが……………。

蓮「でも……………。私達が現場に着いた時、快斗さんの遺体のあった箱の蓋は閉まっていたよ？ もし換気用ホースの冷気を体に当てて冷やしてたんだったら、箱の蓋は開いてるはずでしょ？ 蓋が閉まっていたら、何も出来ないんじゃない？」

コナン「確かにそれだと何も出来ないけど、俺達がこっちに向かうギリギリの時間まで蓋を開けておけば、普通に冷気が入る。俺達が来そうになったら、慌ててもいいから蓋を閉めればいいだけのことさ」

光夜「なるほどな。確かにそれだったら、十分可能だったかもしれない……………。少なくとも10分くらいは……………」
蓮「それに私達……………。一旦快斗さんの方に向かうのを止めて、羅針盤を見に行っちゃってたし……………」

コナンの説明を聞いた蓮は、顎に右手を当てながら、そう口を開いた。

確かに蓮の言った通りだ……………。

今になってよく考えてみれば、あの時自分達は光夜の発言によって、あの時の方向を調べる為に、快斗さんが居た場所の近くでUターンしたのだ。

あの時点でも、犯人からしてみれば、かなりの時間稼ぎ……………。きつと『ラッキー』だったと思っていたに違いない……………。

犯人にとっての唯一の誤算は、快斗のダイイング・メッセージに気が付かなかった事だろう。

おそらく犯人は、快斗を完全に殺害し切ったと思い込み、包丁を腹部から抜き取り、辺りを警戒しながら凶器を海に放り投げ、やや固めのホースの向きを遺体に向ける作業を行っていたのだろう。

その隙を見て、快斗は自らの血で文字を……。

そしてハトの羽と葉を使った暗号を残し、それを手と腕で隠して息絶えた……。

その証拠に、もし刺してすぐに箱を閉めたのであれば、快斗がダイイング・メッセージを隠す必要はない。

その場合、一番最初に遺体を見つけた人達に見られるのだから、むしろ隠してしまっただけは本来の犯人を指し示す目的に反する。

つまり、あの隠されていたダイイング・メッセージは、快斗の近くに犯人がまだいた事を意味していたのだ。

小五郎「だがなあ……、それだとなんか変じゃねえか？ そのトリックをやったんだしたら、時間が経つちまったらすぐに分かっちゃうぞ？ 遺体は冷気で凍らせて、少し冷やしたただけなんだから……」

前にも似たような事件にあった事はあるが、あの時は遺体を完全に崖から車ごと転落&爆発させ、他の人間に調べられないようにしていた。

だが今回は、遺体はまだ手の届くところにあるし、いくらでも調べられる。

正直言つて何もしていないのだ。

小五郎はその事をコナンに言おうとして、思わず息を飲んだ。

コナンは蒼い瞳を一ミリも動かさず、ある人物を鋭い目つきで睨みつけていたのだ。

その目つきは、まるで逃げ場をなくすように追い詰める野獣のようである。

コナンはその目つきのまま、小五郎達にそつと口を開いた。

コナン「だったら、おかしい人はどっちか……。もう分かるよね？ まんまと犯人のトリックに騙されていた人と、あえて自分の犯行を誤魔化そうと、その人物の予測死後硬直時間に合わせた、そうでない人が……」

和葉「えっ……。？ どういうこと？ ……」

コナン「死亡推定時刻を調べた人間はたったの二人だけ……。しかもその二人は、死後硬直を調べた時間がバラバラ……。その状況で誰が一番怪しいのかは、すぐに分かるはずでしょ？」

それを聞いて、皆の視線が徐々にある人物へと向けられる。

その人物は、見た目にはよく分からない程度ではあるが、その後ろの方では冷や汗を……。

前の方ではやや瞳孔を開き、顔を蒼褪めていた。

そんな犯人を見つめながら、コナンはその人物へと一歩・・・、また一歩と近付く。

その度に、その人物の顔は蒼褪めていった。

英理「なるほど・・・。最初に死亡推定時刻を調べた人間は、おそらく犯人が誤魔化した方の死亡推定時刻で調べたはずよ。犯人がその時に調べてしまったら、二回目調べた人間にはすぐに気が付いてしまつて、トリックが台無しなもの・・・。ということは、一回目に調べた人間は白で、後から調べた人間は、最初に調べた人間の言葉に合わせただけ・・・」

博士「ま、待つんじゃない！ じゃつたら・・・、じゃつたら犯人は・・・！」

コナン「ああ、そうさ！ 黒羽快斗さんをこの船で殺害した犯人は・・・」

コナンの目の中に、その人物の蒼褪めた顔が映り込む・・・。
強くて弱い光の中に照らされながら、コナンは下げている右腕を徐々に上に上げ、人差し指をその人物に差した。

コナン「同じくこのゲームの計画者でもあった、服部平次さん！
あなただ！！」

3 1・根拠と証拠

コナン「服部平次さん！ あなただ！！」
メンバー全員「！！」

皆の視線が一斉に服部の方へと向けられた。

一方の服部は、一瞬コナンが何を言っているのか分からなかったらしく、しばし瞳孔を開いたまま固まっていたが、やがてコナンが「自分が犯人だ」と言っていたのに気付くと、反射的に苦笑いを浮かべながら口を開く。

服部「じよ・・・、冗談はよせや。なんで俺が・・・」

コナン「消去法だよ。簡単に言っちゃえばね・・・」

コナンはそう言うと、やや新一と服部を見比べながら、服部が犯人だという証拠を述べ始めた。

コナン「最初に犯人を考えた時、さっき言ったように怪しかったのはあの4人だけ。そして本来、死亡推定時刻をわざと別の時間にセツトするのであれば、普通は自分にアリバイのある時間に戻るか、早まらせるかをさせるはず・・・」

蓮「それは・・・、そうよねえ・・・」

直子「自分にアリバイがない時間に死亡推定時刻を設定させても、犯人として疑われるだけだし・・・」

光夜「ってか普通、それだったらそんな作業しないはずじゃあ・・・」

確かに蓮達の言った通りだ。

もし故意に死亡推定時刻の時間を変えたとすれば、大概は犯人にアリバイが存在する時間にするはず……。

自分にアリバイのない時間に合わせてしまつたら、犯人として疑われるだけだし、むしろ最初から、そんな事をする必要がない。

犯人は、自分が周りや警察に『犯人だ』と思われるのを逃れる為にやっているのだ。

コナン「ところが……。容疑者でもあつた父さんは、快斗さんの偽死亡推定時刻も、そして、こちらの予測として上げている本物の死亡推定時刻。つまり、偽死亡推定時刻の少し後の時間だけど、その間もアリバイがあつた……。パーティーのスピーチを行つていた、というアリバイが……。」

光彦「ちよ、ちよつと待つてください！」

元太「それじゃあ、わざと偽物の時間にする必要ねえじゃねえかよ！」

コナン「その通り……。しかも、両方ともアリバイがあるのであれば、元々の犯行も不可能……。一方の博士と哀姉さんは、偽死亡推定時刻の方はアリバイは、哀姉さんだけがアリバイがなかったけど、本来の死亡推定時刻であるはずの時間には、二人ともしっかりと目撃証言があつたんだ」

平矢「目撃……。証言……。？」

平矢が半分疑問形で問い掛けると、コナンは自分の後ろにあつたバイキングのところへと向かい、ある器を手に取つた。

中に入っているのは、かなり高級そうなローストビーフ。

コナン「ああ……。博士と哀姉さん、ここのバイキングのところ

で口論を起こしてて、皆が見てたんだよ。そうでしょ？ 哀姉さん
灰原「ええ……。博士が『相変わらず！』肉料理を取ろうとした
から、ちよつと口出ししただけよ」

博士「ハハハ……」

新一（十分口論に見えてたよ……。アレは……）

と、内心あの時の事を思い出しながら、新一はジト目&苦笑いを浮
かべた。

コナン「だから、この二人もでつち上げる必要がなかった。博士は
父さんと同じ……。哀姉さんは、わざとアリバイがない時間に変
えていた事になるからね。もうこの時点で、犯人は平次さん一人に
決まってるのさ！」

コナンはバイキングの台から離れると、服部のやや真ん前に立ち、
睨んだ。

だが服部も、こんなコナンの推理に黙っちゃ置けない。

服部「そやけど……。まだあの死亡推定時刻が偽物かどうかも
判断出来てへんし、それに、黒羽が無線に出えへんかったのは、一
体どう説明するんや？ 丁度皆が言つとつた偽物かもしれへん死亡
推定時刻とも、時間帯はちゃんと合う……。その間、俺はずつと
このパーティー会場の中におつたし、勿論工藤も見てる……。あ
ん時にもう死んどつたんやったら、俺には犯行は不可能……。あ
コナン「いて当然だよ……。快斗さんはまだその時『隠れていた』
だけで『殺されてはいなかった』んだから」

服部「！！」

メンバー全員「！？」

皆の顔がまた、一段と驚愕の表情へと変わった。

そんな様子の中で、コナンは自分の後ろに立っていた蓮に問い掛け

る。

コナン「蓮、ここで問題だけど……。どうして快斗さんは、父さん達の無線連絡に出なかつたと思う？」

蓮「えっ……。？ そんな事、いきなり訊かれても……。」

確かに、たったこれだけの問題だけで『正解を言え！』というのは難しい。

ならばと、コナンはある事を口にした。

コナン「じゃあ……。父さんが無線で連絡を入れた7時57分頃、俺達はどこで何をしていた？」

蓮「えっ？ それこそ、まだ事件には気が付いてなくて……。ただ単に隠されてた暗号を探しに外へ……。あっ！！」
それを自分で言ってみて気が付いたのか、蓮は自分の周りに立っていた平矢や光夜、そして直子と紅葉を見つめた。

そうだ……。

あの時あそこは……！

蓮「私達……？」

コナン「……。」

蓮「私達があの場所にいたから……？」

コナン「そう……。その通りだよ、蓮」

コナンは、まるで『この答えを聞きたかつた』と言う風な口調で言うと、再び服部の方へと向き直った。

コナン「あの時、無線で快斗さんと連絡が取れなかつたのは、殺さ

れていたんじゃない……。俺達が近くにいたことによって、話すことが出来なかったんだ！」

服部「ツ……！」

コナン「あの箱の中じゃあ、小さな声でも響いて分かってしまう……。それに、俺達はその時、暗号を解こうとして必死だった……。だから無線での会話を聴き逃さなはずがない。多分平次さん、発信器で俺達の居場所を特定しながら、父さんに無線を使うように頼んだんじゃない？ 予測通り、快斗さんは無線に出ないと踏んで……」

服部「……ツ」

服部はその推理にやや恐れをなしたのか、咄嗟に一步だけ遠ざかった。

その隣からは、何やら冷たい視線を感じる。

服部がその視線に気が付いて隣を振り向くよりも先に、その冷たい視線の主は口を開いた。

新一「そう言えば……。あの時『快斗に連絡を取った方がいい』て言い出したの、服部だったよな……。まさか服部！ お前、初めっから分かっててあの無線をつ！？」

服部「くっ……。！」

新一の冷たい視線はいつの間にか、怒りの目へと変わっていた。そんな二人の会話が、コナンの推理が当たっていた事を物語る。

コナン「あの死亡推定時刻よりも後だったら、平次さんにはアリバイがないですよ？ ましてや、父さんはパーティーのお開きのスピーチを……。博士と哀姉さんは、パーティー会場にずっと居ただから……！」

光夜「そうか……。！ あの時コナンが、お前の父親に死亡推定時

刻が正しかったかどうか訊いた時、咄嗟に『こつちも調べた』って言ったのは」

直子「死後硬直を調べた人間が一人しかいなくて、情報不十分とかで二回調べられるのを防ぎたかったから・・・」

コナン「ああ・・・。ただ単に体を冷やしたただけでは、時間が経てばすぐにバレちまうからな」

あの時の服部の発言は、まさに『咄嗟』という言葉によく当てはまっていた。

コナンに訊かれて『マズい』と感じ、咄嗟に『自分も調べた』と・・・。

だとしたら・・・。

コナン「平次さん・・・。本当は調べてないんじゃない？ 死亡推定時刻・・・」

服部「ちゃッ・・・、ちゃう！ 俺はホンマに・・・、ホンマに調べ」

コナン「じゃあどうして、平次さんの服の袖に血が付いてないの？」

服部「！！」

そうコナンに問われ、服部は慌てて自分の服の袖と、新一の服の袖口を見比べた。

自分には一切残されていない血痕・・・。

だがそれが、新一の下側の袖先に、ちゃんと付いていた。

赤黒く固まった、快斗とひの血が・・・。

服部「・・・なんで・・・？」

コナン「普通、あんな血まみれの人間の脈を測るとなれば、必ず下側の袖は体に触れて、血が付く……。父さんは手首と首の両方を調べてこの状態……。必ず何処を調べても、こうなるはずなんだよ！」

服部「んなアホな……。俺は確かに……。……。そうや……。！ 洗ったんや！ 血が付いとったから、俺、さつき洗面所で……」

慌ててそう言い直した服部だったが、そんな発言に新一達の怪しい視線が無くなるはずもなく、逆に新一はより一層疑うような視線を服部に向けた。

新一「どうして洗ったんだ？ 服部。あんな状態の快斗の体を触って調べるんだったら、血が付くのは当然だろ？ ましてやお前みたいな奴が『血が怖い』なんて言うはずもない……」

服部「だから……。それは……」
新一「お前が袖を洗った理由はただ一つ……。快斗を殺した時に付いた血だと思い込み、慌てて洗い落としたから……。そうだろ！？ 服部！！」

服部「！！……」
新一が鋭い視線で睨みながら怒鳴りつけると、服部はそんな新一の視線と態度に恐れをなしたのか、一歩ずつゆっくりと、後ろの方へと下がり始めた。

が、ここまで言われて流石に弱そうに黙っているわけにもいかない……。服部は冷や汗をすぐに無くすと、逆に新一やコナンの方を睨み返しながら、怒鳴るように口を開いた。

服部「なんでや……。なんで皆で俺を『犯人』やと決めつけるんや！！ 工藤も工藤やで！ 自分の子供の推理が間違ってるとも

思わへんで、むしろそれで俺を犯人にしようとしてるだけやないかい！ それは死亡推定時刻が偽物やったらの話やる！？ まだそれもどうか調べてへんのに、勝手に犯人にされたら堪らへんわ！ わざわざ遺体にホース当てて凍らすくらいやったら、あの場にずっと居らんでも、5分そこらで出来る……。それこそ、工藤にも俺を犯人に仕立て上げる為に出来る事やろつ！！」

新一「なんだとっ!？」

服部「それにそこまで言うんやったらなア……。早よ証拠を見せろや！ 俺が『犯人や』っていう、決定的な証拠を！！」

服部は粗方怒鳴り散らすと『ハア……。ハア……。』と息を荒げながら、コナンを睨みつけた。

確かに、今までの推理はすべて、事件の大まかな流れや、トリックのタネ明かし。

そしてその中で、一番に怪しい人間を言い当てただけのこと……。

まだ犯人を決定付ける為に必要な『証拠』というピースを、コナン達は伏せたままにしていた。

そしてその事によって、ややではあるが、服部が余裕を感じているのも事実……。

『証拠がなければ「推理が成功した」とは言えない』

『犯人に「負け」を決定付けることも出来ない』

新一が推理を行う前に言っていた『失敗』とは、この事だったのだ。

『証拠の使い方』を間違えれば、推理そのものが崩れる。

そしてそれを起こせば、犯人を捕らえる事は出来ない……。

コナン（分かってるよ……。父さん……。それを知ってて、僕は『暴きたい』って、言ったんだ……）

コナンは胸中でそう呟くと、服部の方に視線を向け、自信に満ちた声で言った。

コナン「あるよ……。ダイニング・メッセージにも、物理的なものにもね！」

服部「……！」

そう言ってコナンが取り出したのは、快斗の事件現場で撮った、3枚の暗号写真だった……。

31 根拠と証拠（後書き）

ども

ようやく予定が済んで、家に帰ってパソコンを見たら『小説家になる』の設定が変わっていて驚いた

KIDです!!

正直かなり焦りました・・・（；ーー）

何せ家に帰ってサイトを見てみたら、つい最近の投稿が『18日』
で『あれ？いつも毎日10個くらい、返信されてたよなあ・・・。
それに・・・。私の小説がない!!』と、かなりパニくりました・・・
（汗）

コナン「んで『じファン』に入ってみたら『工藤コナン』と『ヴェスパニア』はあるのに『赤鴉』がなくなってる余計に焦ったんだろ？」

KID

そっ！

内心『消された?!』と思ってしまったくらいでしたが、後でよく探してみたら、ようやく見つかったっていう・・・。

んで、短編の方も探しまくって、現在『お気に入り』に『小説家になる』のサイト名が2つあります。

（正直言って、前の方が分かりやすかったんだけどなあ・・・（内心））

快斗

「ところで……。来週はいよいよ『ダイニング・メッセージ』のタネ明かしか。どんな内容なんだ？」

KID

さあねえ〜（＾・＾）

こっちは秘密

ただし、当然『犯人』服部』だという答えになっています！
皆さんも考えてみてくださいね。

それでは ミ

P.S.

『赤鴉』にて、まだまだ曲募集行ってまーす！
ドシドシ応募して下さいねー！！

3.2. ダイニング・メッセージの答え

コナン「じゃあ、早速……。タネ明しを試してみようぜ」

コナンはそう言うと、ハトの羽と葉っぱの暗号、英語と記号の暗号の写真を取り出し、テーブルの上に並べる。

そのわざとゆっくりとした作業が、服部の顔を余計に蒼褪めさせていた。

と突然、あまり状況理解が出来ていない小五郎が、コナンに対して声を掛ける。

小五郎「ちよつと待て！ ってことは……。コナンは分かったのか！？ 暗号の答えが……」

コナン「うん。ちよつと考え方を変えれば、すぐに分かるような暗号だったよ。ちゃんと平次さんを示してるし……」

服部「！……」

まず最初に解くのは、ハトの羽と葉っぱの暗号。

そう言わんばかりに、コナンはテーブルの上に並べた2枚の写真の一枚を手で取り、そつと皆に見えるように上に上げた。

コナン「まず最初に、この『ハトの羽』と『葉っぱ』の暗号から解きたいと思います。これは、一種の『単語暗号』と呼ばれるものです」

光彦「『単語暗号』……。ですか……?」

歩美「なあに？ それ?」

歩美と光彦が『?』マークを浮かべていると、代わりに新一が説明をし始めた。

新一「『単語暗号』って言うのは、その物の形や名前の単語を使っ

て表す暗号さ。場合によってはアナグラムや、必要な文字の部分だけを取り出して並べるものもある……。結構一般的な暗号の種類だよ」

歩美・元太・光彦「へえー……」

説明も軽く済んだところで、コナンは引き続き、暗号の解き方を話し出す。

コナン「それで、この暗号は『ハト』という単語と『葉っぱ』という単語を使った、初歩的な単語暗号だったんだ。まず『ハト』という単語は、全部で2文字だから2つに切る。次に木の葉っぱは、そのまま『葉っぱ』という単語で考えて、全部で3文字だから3つに切る。これで駒は完成」

コナンはそう言いながら、皆に分かりやすいように、紙にマジックで『ハ』『ト』『は』『つ』『ぱ』という文字を書き、テーブルにそれぞれの言葉として並べる。

その光景を見ていた蓮は、ふつとある事に気が付いた。

それは、ついさっきまで、蓮が不思議に感じていたこと……。その答えが、ようやく分かった……。

蓮「そっか！ だから自分の服に付いてた羽を、暗号として使わなかったのね！ 誰もあれを見たら『ハトの羽』とは想像出来ないから……」

コナン「ああ！ それだと、周りはこの鳥の『種類』よりも『色』の方に目が行っちゃうし、あれは『カラス』だったから、どちらにしろ使えなかったんだ。たとえ使えたとしても、この暗号ではなくて、もっと別の暗号になってただろうし……」

正直な事を言ってしまうえば、コナンがこの暗号を解けたのは、蓮のおかげなのだ。
この疑問に蓮が気が付いたからこそ、コナンは『真実』を見つめる事が出来た。

これが全ての『解決』のきっかけだったのである。

博士「それで？ 一体この単語には、どんな意味があるんじゃない？」
灰原「どう読めばいいの？ この暗号を・・・」
コナン「このメッセージの順番は、下の部分の羽・葉っぱの真ん中・下の部分の羽。ハトの羽の向きは、体に生えている向きから考えて、おそらく下部分が『ハ』。だからその順番通りに、この文字を読んでいくと・・・」
と言いながら、コナンがその単語が書かれている紙を選んで、テーブルの上に順番通りに並べる。

その前の方では、蓮と紅葉、そして直子がそれぞれ、単語の答えを導き出そうとしていた。

直子「えつと・・・。つまり順番通りだと『ハ』と・・・、小さい『つ』と・・・『ト』だよな？」

紅葉「ハ・つ・ト・・・。ハット・・・？・・・。あっ！」

蓮「分かった！ 『ハット』！ 『帽子』の事ね！！」
解けたのが嬉しいと言わんばかりに、蓮は満面の笑みを浮かべながら、発音よく言った。

ここにきてまた『英語か』と、光夜達は思っただろうが、おそらく快斗が単語暗号で『英語』を選んだのは、分かりにくいからだろう。日本人の名前をローマ字で書いてしまえばかなり簡単だが、何かのモノや言葉などを英語で暗号化にしてしまえば、意外と分からない。何故なら、その国に暮らしていないからである。

日本に住んでいて、日本語で表している暗号なら、解くのは簡単だ。ある程度の言葉は予測できるし、その被害者が考えそうな事を蓮想させれば、大概答えは出てくる。

だがあまり親しみのない言葉や、普段完全な文章として使っていない言葉は、どんなに簡単なものでも頭をかなり捻らなくてはならない。

おそらく快斗は、それを見通してこの暗号を作ったのだろう。いや……。

まずそうとしか考えられなかった。

服部「『Hat』……?」

小五郎「ぼ……『帽子』だああ!？ 本当に合ってるのかよ。それで……」

新一「だけど今まで上げてきた例の中で、ちゃんとした単語になったのはこれだけだ。コナン、続けてくれ……」
やや真剣な眼差しで、新一は服部と小五郎の方に視線を向けたあと、コナンの方に首を向けた。

その姿はまるで、コナンの推理を厳しく審査する審査員のようなのである。

コナンはそんな新一の視線に圧倒されながらも、新一達に聞こえるくらいの声で『うん』と言って頷き、もう一枚の写真を持ち上げる。

コナン「そしてもう一つの『SA』という暗号は、正直な話……最後の最後まで、よく分からなかった暗号です……。だけど、最後に書かれたこの『』を見た時、僕はふつと気が付きました。あれはただ単に『』を書きたかつたんじゃなくて『もう一つ『殺害現場』に、英語を書きたかつたんだ』ってね」

平矢「？」

光夜「もう一つ？」

コナン「そう。この暗号は『未完成』だつたんだ。完全に書き切れなかったわけじゃなかった……。その事もあって、僕も父さんも、解読にかなり時間が掛かつたんだよ」

あの『』が、前の方に書かれている英語よりも小さかつたのは、何も考えずに書いていたからではない。

英語の方が全角で、記号の方が半角だつたからでもない……。

あれも同じ英語だつたから……。
まだ書き途中の英語だつたからだ。

青子「でも……！ どうして『英語』だつて……」

コナン「理由は『』の文字が、隣に書かれた英語2文字よりも小さかつたからさ。普通なら『』の文字の方が大きいはず……。それが小さい且つ、その『』の上の部分に、快斗さんの指が置か

れていたということは、あともう一筆付け足したかったということ……。英語の大文字で『\』にもう一筆書きで出来る英語は、一つしかない!!」

コナンの発言を聞いて、蓮達はそれぞれ、口でアルファベットを言い並べてみた。

今度はちゃんと……。

全部を順番通りに……。

紅葉「A・・・B・・・C・・・D・・・、E・・・F・・・G・・・

光夜「H・・・I・・・J・・・K・・・、L・・・M・・・N・・・

直子「O・・・P・・・Q・・・R・・・、S・・・T・・・U・・・

蓮「V・・・W・・・あつ!!」 『X』!!」 最後に

書きたかったのは『X』よ!!」

そう……。

『X』の書き順は、一画目は右下がり、二画目は左下がり。

あの『\』の下がっていた向きも、快斗の指が当てられていた位置も『X』の書き方と合致する。

ということは……。

光夜「じゃあ……。親父は最後に『SA\』じゃなくて『SAX』って書きたかったってことかよ」

コナン「ああ……。そういうことさ」

服部「アハハハッ! なんやねん! 『SAX』って!?! バンド

とかの木管楽器やあるまいし、それに、その何処に『Hat』が関係してるん言うんや？ 何の暗号にも、犯人示しにもなつとら・・・！！」

と、ここで馬鹿のように笑っていた服部の顔が徐々に蒼褪め、そして瞳孔を見開き始めた。

そんな服部の視線の先に見えたのは、皆が先程までワインを飲んでいたワイングラス・・・。

そのワインの中には、まだ誰も口を付けていなかったのか、たつぷりとワインが入っていた。

そしてそのワイングラスのガラスに映り込んでいるのは、今の自分の姿・・・。

前に新一から・・・、こんな事件の話聞いた事がある・・・。

ある特殊メイクをしていた人間が起こした殺人事件・・・。

その犯人は、あえて素顔で、犯行を行ったと思われた。

何故なら、皆が知らない素顔で犯行を行えば、誰も自分が犯人だとは思わないからだ・・・。

だが、その人が犯人だという根拠は、意外なところで遮られた。

何故なら、犯行後にメイクをし直すようにも、その人が『ずっといた』と証言する部屋の中には、鏡がなかったからである。

鏡がなければ、メイクを塗り直すこともできない・・・。

勿論、トイレになんかに行っていれば、誰かに見られるのは当然の

こと……。

誰もその人物のメイクをした顔を見ていなかったということは、その証言は『本物』ということになる。

その事件を解決した話を前に教えてくれた時、新一は言っていた。

服部『定規と黒い折り紙？』

新一『ああ。ほら、よく夜になると、窓ガラスに自分の顔が映る事があるだろ？』

服部『それはあるけど……。それ、顔近づけると、中央から消えてしまわへんか？』

新一『ああ、基本的には覗くのは無理だ。何故なら、ガラスは絶えず物を映してるけど、それよりも周りからの光が強いから、あんまりハッキリと見えねえんだよ。だから、その光を遮るように、定規の裏から黒い折り紙を当てる……。』

新一『そうすると、まるで「鏡」みたいになるんだ。ただのガラスでもな……。』

服部（こ……、これは……。!）

服部はそれと全く同じ原理で鏡化したグラスを見て、慌てて『ソレ』に手を伸ばし、掴み取る。

服部お気に入りのキャップには、しっかりと『SAX』という太めの字のロゴが書かれていた。

帽子……。

『SAX』というロゴ……。

それを真近に目にして、服部の驚愕の表情は、一気に頂点へと変わる。

コナン「もう気が付いたでしょ？ 平次さんの帽子に書かれた『SAX』という文字……」

メンバー全員「!!」

新一「……………」

服部「なっ…………！んな……、アホな…………!!」

未だに驚きの色を隠せない服部に対して、コナンはまるで追い打ちを掛けるかのように言った。

実証的な証拠を……。

コナン「さらに、平次さんは俺達がやってきた事に気付き、血の付いたままの指で、あの木箱に蓋をした……。その証拠に、あの遺体現場の傍には、血の付いた指紋もあった……」

服部「えっ…………!?!?」

それは、コナンが最初に皆と、快斗さんが隠れていた木箱にやってきた時。

木箱の淵に、垂れたような血の跡があったことの事だ。

その血を見て、コナンは咄嗟に皆に『開けるなっ!!』と叫んだのだが、その時は時既に遅しだったのである。

そしてその後疑問に残った事……。

あの血の跡を見に行ってみた時、そこにはちゃんと指紋の跡もあった。

だが、犯行が行われてからあれほどの時間が掛かっていたのだから、こんなにハッキリと指紋になっているはずがない。

そして、殺害されてから誰も箱を開けてはいないのだし、触れてもいない。

凶器から零れたにしろ、コナン達があの木箱に辿り着いた時には、もう既に血は固まっていたはずだ。

にも関わらず指紋になっていたということは、それはもう犯人のモノ以外にありえない。

コナン「多分平次さんはその袖の血痕を洗った時に、一緒にその指の血も落としてしまい、その事に気付かなかった……」

服部「あっ……！ ああ……！！」

思わず後ずさる服部に、コナンは蒼い目を何度も揺らしながら、服部を睨みつけ、言った……。

コナン「その血痕の指紋が、平次さんの指紋と一致すれば……。

あなたが犯人だという、決定的な証拠だ！！」

32・ダイニング・メッセージの答え(後書き)

ども

実は27日にパソコンが不具合を起こし、全くネットが見られなかった

KIDです!!

あれは辛かった・・・っ!!!

GARNETのブログとか、小説の投稿とか、自分が目を付けてるサイトの小説投稿とか・・・。

そういうの全部見れなくなりましたからねえ・・・。

コナン

「特に大きく変わった事もなかったから、見れた後は『ホッ!』としたんだろ?」

KID

まっね (^.^)

次回の『工藤コナン』は……………

『超衝撃! 珍展開!』 予定です!!

あり得ない展開になってます…………。

あっ！

それとライブ、行ってきましたよ！！＼(^o^)/

あの日はグッズだとか、『小説家になろう』のある作家様との対面だとか、メンバーの話だとか、出待ちだとか、色んな事でホツカホツカしながら帰ってきました！！

(詳しい事は『赤鴉』で)

それでは ッ

33・驚きの展開

コナン「その血痕と指紋が、平次さんのと一致すれば……。あなた
が犯人だという、決定的な証拠だ！」

服部「!!!!!!」

コナンの推理が終わった時、服部の目はこれ以上開かないと言っ
てもいくらいにまで、大きく見開いていた。

まるで今にも、その目から目の玉が転がり落ちてきそうくらいで
ある。

服部はその目を閉じる事も、瞬きすることも出来ず、ただ力なく、
パーティー会場の床に座り込む。

と言うよりは、足から全身の力が抜けて、ゆっくり崩れ落ちたかの
ようだ。

そんな変わり果てた姿の父親を見ながら、平矢は一步だけ前の方に
歩き、服部に声を掛ける。

平矢「オヤジ……?」

服部「……………」

平矢「……何か言えや……。オヤジ……」

服部「……………」

平矢「『何か言え』言ってるねん! 早よ答えろ……。! 答えろ、
オヤジ!」

平矢がついつい感情が高ぶって声を出してみても、服部は一切口を
開こうとはしなかった。

その姿を見て、今度は和葉が服部に対して叫ぶ。

和葉「どないして・・・？ どないして！？ 平次！！ なんて黒羽君を殺ったん！？ 平次、あんなに仲良かったやないの・・・。なのに・・・、なのにッ・・・！ なのにどないして！ 平次ッ！」

そう叫ぶ和葉の目からは、溢れんばかりの涙が零れ落ちていた。

その涙を見ながらも、青子は服部に対して、かなり冷たい視線を送る。

その目の色は、見方によつては怒りの目のようにも見えた。

小五郎「警察としばらく連絡が出来ねえんだったら、コイツを何処かに閉じ込めといて、明日港で警察に引き渡した方がいいな・・・」
蘭「お父さん！ 皆の前でそんなっ・・・！」

小五郎「蘭！・・・もう少し現実を見る・・・。これが現実なんだよ」

蘭「・・・」
それ以上は何も言えず、蘭はただ無言で、服部とも和葉達とも視線を合わせられないまま、視線を下の方へと移してしまった。

その間に、小五郎がゆっくりと服部に近寄る。

小五郎が近付いても全く微動だにしない服部を見下ろしながら、小五郎は遺憾そうに口を開く。

小五郎「しかし・・・、残念だったよ・・・。どういう理由があった知らねえが、あの名の知れ渡った『西の探偵』が、こんなくたねえことで世間から消えるとはなあ・・・」

服部「・・・や・・・う・・・」
小五郎「ん？」

ふっと、微かに服部の口元が動き、何かをポツリと呟いた。

が、声が小さかったのと、少々震えていた事もあって、完全には聞き取れない……。

小五郎は背広のポケットに両手を突っ込みながら、やや中腰体勢になって、服部と同じ目線になったところで訊き返す。

小五郎「なんだ？ 声が小さいせえし、色々震えてて聴き取り難いぞ？」

服部「……………や……………う……………や……………う……………」

小五郎が『最後の発言、聞いてやるよ』と言った感じで、服部に再度訊き返す。

すると、服部の口から、とんでもない発言が飛んできたのだ。

服部『……………ちやう……………俺やない……………』

いきなりの発言に、メンバー全員は一瞬キョトンとした表情を浮かべていたが、それはすぐに小五郎の説教染みた怒鳴り声によって、綺麗に吹き飛ばす。

小五郎「おい！ 何、わけ分からない事言つてやがる！！ 証拠だつて拳がつてんだ！ 今更自分の無実を証明したつて、あとの祭りに決まつてんだろっ！！」

服部「ちやう……………ちやう……………ちやう……………俺やない……………！！ 黒羽を殺したんは、俺やない！！」

『今更何を？』と言いたげに、メンバーは服部の表情を見つめた。

が、どうしてだろう……。

何故か服部の発言が、嘘のように聞こえてこない……。
まるで、本当の事を言っているように感じる……。

最初は『自分が平次さんを犯人だと思いたくないだけ』だと思って
いたのだが、それとは明らかに様子が違う。

異常なくらい、服部の発言が、本当の事のように聞こえてくる。

服部「ホンマや、おっちゃん!! 殺ったんは俺やない! 俺やないんや!!」

小五郎「いい加減なことを言うなっ! 関西坊主!! もうこんな
に証拠が出てきてるんだ! ダイニング・メッセーじだって一致し
てる! もう犯人はお前以外に考えられねえんだよ!!」

服部「それはっ……!! ……そうやけど……」
それを言われると『こちらは何も反論出来ない』と言いたげに、再
び服部の視線が下を向く。

その様子を確認し、小五郎は貨物室の方へと、服部の体を引っ張り
出そうとする。

あの部屋には鍵もあり、人を閉じ込めておく事が出来る。
それに、暖房も冷房もあるのだから、体調を崩すような事にもなら
ないはずだ。

唯一何か問題があるとしたら、トイレと蛍光灯がない事だろうか……。

ふっと、コナンの視界に何かがある『スツ』と、入り込んできた。

コナンの目の前には、パーティー会場のディナーを取る為の取り皿が数枚。

全てに汚れや食べ残しがあるところを見ると、どうも誰かが使っていたらしい。

まあ『あの席』なら、大体誰が座っていたのか想像が付かなくもない。

そしてそれは、コナンの読み通りでもあった。

コナン（やっぱり、そういうことだったか……。あとは……………
……………!）

コナンの目が、再びあるものを捕える。

コナン（そろそろ……………）

服部「ホンマなんや！俺が黒羽をあ箱の中で見つけた時、黒羽はもうとっくに死んどったんや！血痕やて、全部乾ききった。

……。ホンマの事なんや！おっちゃん!!」

小五郎「うっせえ！往生際が悪過ぎると、一発背負っぞ!？」

服部「俺は誰も殺してへん！殺してへんのや!!!」

メンバー全員「……………」

服部が死に物狂いで抵抗する姿を、皆は一心に見つめていた。

『本当に往生際が悪い』……。

そう思いながら、一人の人間がゆっくりと、自分の後ろのテーブルの方へと右手を伸ばす。

勿論、視線は服部の方に向けたままで、だ。

その右手の近くには、水の入ったガラスコップが一つ……。まだ水は満タンに入ったままのものだ。

その人物はゆっくり、慎重に手を伸ばしていく。誰にも見られぬよう……。誰にも気付かれぬように……。

今後ろに伸ばしている右手と、このコップとの差はもう凶り切っている。
あとは、これにゆっくりと伸ばしている右手が触れるのを待つだけ……。

慎重に……。慎重に……。慎重に……。慎重に……。慎重に……。まるで呪文のように唱えながら、その人物はある程度右腕を伸ばすと、一気にガラスコップを払い退けようとした。

その時。

シュンツ！

ガバツ！

??「!!」

一瞬何が起こったのか分からず、その人物は咄嗟に後ろを振り返る。

先程までテーブルの上にあったはずの、ガラスコップがない。

ならば下に落とせたのか？

しかし、床からはコップが落ちて割れる音は一切聞こえては来なかった。

一体何がどうしたんだ!？

そう思ってその人物は、自分がコップを払い退けるつもりだった左方向に首を向け、そして目を見開いた。

そこには、こちらに鋭い視線を浴びせているコナンの姿。

そしてその手には、今自分が払い除けようとした、水の入ったガラスコップが握られている……。

コナン「何してるの？ 父さん……」

コナンが一切表情を変えぬまま……。

しかし真実を求めるかのような目で、新一を見つめる。

新一は一瞬その目を見て表情を変えつつも、何事もなかったかのように、払い除けるような形になっていた右手を、慌ててズボンのポケットに仕舞った。

新一「『何』って……。喉が渴いたから、水を飲もうと……」

コナン「そういう振りをして、この水の中に入っている証拠ひみつを消そうとしたんでしょ？ 父さん、いや……」

コナンはそう言うと、一旦瞳を閉じ、さらにハッキリとした眼光で新一を睨みつけ、そしてこう言った……。

コナン「真犯人の……、黒羽快斗さん」

33・驚きの展開（後書き）

どーも

この時期花粉がツライ

KIDでーす！！

杉ではないようなんですが、一体原因何なんでしょねえ？
（9月に花粉症を起こす植物・・・）

コナン

「ブタクサとか？」

KID

そう！

俺もそれ疑った！

だって9月頃って、それが一番多いって言うだろ？
（もっとも、この辺見かけないんだけどさあ・・・）

快斗

「もしかしたら・・・。ねじじゃらしかもよ？」

コナン・KID

「「ねっ・・・、ねじじゃらし？？」」

コナン

「んな植物あったか？」

K I D

快斗、それどんな植物？

快斗

「えっ？ 普通にねこじゃらしみたいなの……。緑色の草」

コナン・K I D

「『エノコログサ（莠）』と見え！』」（正式名称）

K I D

それでは ミ

34・螺旋の糸

コナン「この事件の本当の真犯人は、黒羽快斗さん。あなたでしよう……」

メンバー全員「!!」

全く以て予想外の発言に、皆の目がコナンと新一に化けているであろう快斗に向けられる。

一方の快斗は、流石元『月下の奇術師』と言うのもあり、顔の方からボロは一切見せようとしなかった。

ほぼ真顔で、こちらをジッと見ている。

平矢「ちよつ、ちよつと待てや、工藤！ どないしてお前のオヤジが、黒羽のオヤジやと……」

コナン「皿に盛ったディナーだよ」

平矢「えっ？ ディナーって……、メシ？」

それを訊いた蓮達が、新一達が座っていたテーブルの方へと向かってみる。

本の少しだけ、皿の上には料理が残っていたが、ほとんどは完食だ。

ただ一つ気になったのは、新一の椅子の前に置かれている皿。

何かの生地を食べた時に残った食べカスのようなものがあつたが、その中の一つによく目を凝らしてみると、どう考えても生地ではないものがある。

さらに香りを嗅いでみれば、何やら甘い香りと、シナモンのおいしそうな香りがした。

ということは……。

コナン「その皿の上に残っているカスは、今日ここの料理として出されていた『アップルパイ』さ。それも香り付けの為に、レーズンを入れたヤツの・・・」

新一「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コナン「快斗さん、知ってるよね？ 父さんがレーズン大っ嫌いな。僕もあんまり好きな方じゃないけど・・・」

コナンが半分怪しむかのような目でそう尋ねると、一瞬『しまった・・・』と言いつつ妙な快斗の表情が浮かぶ。

が、それは本当に本の一瞬で、まるで快斗は『それは気のせい』と言いつつ感じに、あっという間にその表情を消してしまった。

それどころか、逆にこちらに『それだけか？』と、真顔で訊き返されてしまった。

その要望に答えるように、コナンもここから先は慎重に口を開く。

コナン「あとは逆に・・・。父さんは仕事柄、魚がほとんど食べられない。調理が難しいみたいだしね・・・。なのに、こんな食べられるチャンスを逃すのはおかしい。皿を見てる限りじゃあ、一回も魚料理をよそわずに、肉と野菜と、大量の甘いものだけで済ませてたみたいけど？」

新一「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コナン「何なら今この場で・・・、無理矢理でもあの魚料理を食べてみて欲しいものなんだけどね・・・」

そう言つてコナンは、目線だけで鯛と鮭のカルパッチョの方を示す。それを見て一瞬唾を飲み込んだのか、やや相手ののど元が動く。

新一「悪いが、それは遠慮させてもらう。友人が殺されて、呑気に食事なんかできないし・・・。それにコナン。俺には元々犯行なんて不可能に決まってるだろ？ 現に俺は、ずっとここにいたんだか」

コナン「確かに、快斗さんは父さんに成りすまして、ずっとここにいた……。でも実際、そんなのは一切関係ない！ 本物の父さんは、平次さんが見つけるずっと前から、もう既に殺されていたんだから！」

蘭・青子・和葉「えっ！？」

博士「なっ、なんじゃと！？」

その発言を聞いて、小五郎が驚いたように服部の方に視線を向ける。一方の服部は服部で、コナン達の方をやや混乱しているかのような目で見つめる。

たった数分の間はどう状況が変わったのか、服部は全く判断できていないようだ。

その様子をすぐに表情で察したコナンは、二人に対して軽く目だけに笑みを濁らせながら、そっと口を開く。

コナン「ごめんね、おじいちゃん。平次さん。快斗さんがボ口を出すまで、犯人に仕立てただけなんだ」

小五郎「えっ！ん、んじゃあ……。コイツは本当に……」

コナン「そう……。捜査を混乱させはしたけど、実際は誰も殺していない……。むしろ『もう一人の被害者』って言った方が、今は一番いいかもね」

コナンがそう口にする、服部は『ようやく解放された』と言う感じに息を吐き、その場にへなへたと座り込んだ。

そんな二人の様子を見ながら、快斗は相変わらず新一に成りすましながら、物理的に辻褃の合わないところをコナンに訊き返す。

新一「ちよつと待ってくれよ、コナン……。俺は快斗に無線で連絡を取っていたし、服部がまだ会場を出ていない時、快斗は『りよーかい』って、ちゃんと答えてたじゃないか。もしもあの時に快

斗が死んでたとしたら、あの無線は一体どうなる？ 答える相手が居ないのに、どうし」

コナン「あんなのは簡単さ。平次さん、まだ持つてるんでしょ？

快斗さんにされていた父さんの傍に落ちていた、あるものを・・・」

服部「・・・・・・・・・・・・・・・・この事か？・・・」

新一「？・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

そう訊き返しながら、何やら服部がゴソゴソと胸ポケットから取り出したのは、極々普通の黒いボールペン。

やや太めの形ではあるが、キャップの先の方の金色の線や『DETECTIVE』と書かれた金色の筆記体文字は、ただの安いその辺のボールペンとは、明らかに雰囲気違っていた。

本の少しばかり、高級感が感じられる。

だがそれと同時に、妙に気になるところもあった。

それは、ボールペンの上の方（シャーペンでは消しゴムが入っているとこ）に、妙なボタンが付いていること。

黒いボタンなのだが、普通に考えてこんなものは必要ない・・・。

さらにそのキャップの上辺りには、音を出す為のスピーカーのような物が取り付けられていた。

それを見た瞬間、快斗は新一の顔でポーカーフェイスを隠しきれず、力強く下唇を噛む。

さらにその横で驚いていたのは、それを作り上げた阿笠博士自身。

博士「こ、これは・・・！ ワシが作ったボールペン型録音機！！」

光彦「ボ、ボールペン型っ！？」

元太「録音機？ んじゃあ、録音出来るのかよ」

光彦「当たり前ですよ、元太君！ それどころか、多分スピーカー

が付いているところを見ると、録音した声も再生でき・・・ああ！
」

録音・・・。
再生・・・。

となれば・・・。

コナン「平次さん。平次さん達が聴いたのって、この声？」
そう問いつけながら、コナンはその黒いボタンを親指で押す。
その瞬間・・・。

快斗「りょーかい」

服部「！！これや！この声や！そやけどこれは黒羽の・・・」
コナン「予め録音しておけば、いつでもタイミングを見計らって流せるし、どうもこの録音機・・・。勝手に快斗さんに改良されてるみたいだしね」

そう言いながら中を開けてみると、何やらネジを一回回した跡や、コードの配線の繋ぎ方が変わっている。
いやむしろ・・・、コードの本数が多くなっているように感じた。

コナンもこのボールペン型録音機は持っているので、中を見ただけですぐにそれに気が付く事が出来た。
大方、遠隔操作でも作動できるように変えたのだろう。

コナン「これで連絡を取ったフリをしたんでしょ？ 快斗さん」

快斗「……………」

コナンが静かにカマを掛けてみても、快斗は一切、口を開かなかつた。

34・螺旋の系（後書き）

どーも

家の近くのお祭りで、再び金魚すくいをしてしまった

KIDでーすー！

てなわけで・・・、家に現在5匹おります・・・（- -）

コナン

「ハハハ・・・。ところで、話延びた？」

KID

ツー！

なっ、なんで!?! (@_@) (@_@)

コナン

「いや・・・。『10話くらい』って言った割には、なんか長い
など思って・・・。」

KID

実は・・・、かなり延びました・・・oZu

コナン

「やっぱり・・・」

K I D

でも、ラストがかなり遠くなったのか言っと、そういうわけでもありません。

（ただ、終わるのが9月上旬から10月中旬に変わりました・・・）

次回も推理が続きます！

それでは ミ

35・本当の真実

午後10時51分 パーティー会場。

録音機から流れた快斗の声に驚愕しながらも、服部や小五郎達は、新一に変装した快斗に目を向ける。

快斗は相変わらず『自分は新一ではない』と言わず、変装も勿論解こうとしない。

一体何処まで新一に化け切るつもりなのか、コナン達にも想像がつかない。

が・・・、そっちがその気なら、こちらは推理を続けるのみ・・・。

コナンはそう決意を決め、自分が予想する推理を進めた。

コナン「船が出港してしばらく経った後・・・。おそらくトイレに行った快斗さんは、そこから出る際に、皆が集まっていけない場所を通って、手順通りの柱に隠れた。僕達は丁度真ん中の辺りに集まって話をしていたから、端っことを通れば気付かれない・・・。そして柱に隠れた後、快斗さんは無線で父さん呼び付けた・・・。」

快斗「ちよつといいコト思いついたからさあ・・・。柱のところまで来てくんない?」

新一「いいこと? なんだよ・・・、それ?」

快斗「ん? 被害者役でも十分楽しめるコト・・・。とりあえず、新一だけ来てくれよ。あとで平次も呼ぶから」

新一「あ、ああ・・・。」

そんな風な会話が、コナンや小五郎達の脳裏を過る。

おそらくあの新一のことだ。
見知らぬ人間ならともかく、顔見知りで……。
しかも親しい人間であれば、絶対に行ってしまうに違いない……。

コナン「そして、父さんが現場に着いた時に『ちょっと服を入れ替えるのが重要なんだ。交換してくれないか?』と、父さんに言った。多分父さんは、何も疑わずに着替えただろうね……。」

快斗「新一。来てくれたところ悪いんだけどさあ……。服、俺のと交換してくんない?」

新一「はあ? お前、何する気だよ……。」

快斗「頼むよ、新一。それやないと、正直言って意味ねえんだ。な? 頼むって」

新一「全部を……、か?」

快斗「いやっ! 上だけでいいよ。下と中のシャツは同じだからさ」

新一「へいへい。何する気だよ、オメー……。」

快斗「まっ! いいから いいから」

そう言いながら、新一は紺色の服を……。

快斗は黒い服を互いに手渡し着替える。

そんな二人の絵が、リアルな映像となって浮かんでくる。

コナン「そして……。服を交換し終えた快斗さんは、父さんを隠し持っていた包丁で殺害した……。」

新一「おい、快斗。ところでどうして服を入れ替える必要が……
……、なんで俺の髪型になつてんだよ、快斗……」
快斗「ん？ ああ……。これ？ 必要だったから……。ただそれだけ……」

新一「お、おい！ 快斗！！ その手に持つてるヤツ……！！」
快斗「そ？ 分かる？ だから言ったんだよ。「服を入れ替えてくれ」って……」

コナン「父さんを殺害した快斗さんは、さっき僕が言ったように木箱の中に父さんを入れ、ホースを当てて死後硬直を早まらせた。その後は木箱の中に録音機を入れ、凶器を捨てた後、木箱の蓋を閉じずにそのまま出ていく……。一旦は、それで準備完了だった……。そうでしょ？」
新一快斗「さあ……。何のことかなあ」
相変わらず白を切る快斗に内心ムツとしていると、ふっといつの間にかコナンの横に立っていた蓮が、やや首を傾げながら問い掛ける。

蓮「コナン……。その推理……。おかしくない？」

コナン「ああ？」

蓮「確かに、新一さんを木箱に詰めたり、凶器を捨てたのは分かるよ？ でも……。ホースを当てる必要、あつたのかなあ……」
コナン「？ ん？」

蓮「だって、死後硬直を早めるのよ？ 本来新一さんが殺された時間よりも前に死後硬直を早めちゃったら、一体いつ新一さんが殺されたのか分からないじゃない。下手したら、船に乗る前に殺されていたかもしれない計算になっちゃうのよ？」
蓮の言う通りだ。

一般的に死後硬直は『早める』。『何時間・何分前にさかのぼる』
という意味になる。

それでいつも警察や探偵などは、殺害された時刻を割り出している
のだ。

今回の場合、おそらく新一が殺されたのは午後6時30分ジャスト。
船が出港したのが午後5時50分、ゲームが開始されたのが午後6
時30分と考えると、空間となる時間は、わずか40分しかない。
。

たったそれだけの時間を紛らわす為だけに、ホースを当てるのはお
かし過ぎる……。

と言うよりも、トリックがすぐにバレてしまいかもしれない危険行
為だ。

もしやるとするなら、逆に温めて時間を遅める方を行うはず……。

コナン「確かに……。そのままホースを当てていたら『余計に死
後硬直が早まってしまっ』が……。途中からホースを当てないで、
それで冷気が閉じ込められるように蓋をしたら、快斗さんの思い通
りになる」

蓮「？……………どういうこと……………？」

コナン「僕達よりも先に遺体を見つけて、ホースを退けた人間がい
たんだ……。そうでしょ？ 平次さん」

服部「！！」

いきなり名前を当てられ、服部は半分驚いた表情を浮かべながらも、
やや迷ったように目を泳がせる。

どうやらコナンの予測は、外れてはいないようだ。

その横で、新一に化けていた快斗は『チッ』と、小さく舌打ちをした。

その舌打ちを微かに聞いて、服部もようやく決心が付いたのか、あの時の事を静かに語り出す。

服部「実は、俺……。あん時、無線に出えへん黒羽が心配になって……」

午後7時59分 船の外通路 東側。

服部「つたく……。黒羽の奴、まさかホンマに寝てんやるか……。早めに起こさへんと、皆に見つかってまうで……」

そう思うて、黒羽が予定で隠れる木箱のところに行ってみたんや。そしたら……。!!

服部「く……。黒羽!! なっ、なんで……!」

俺、一瞬どないしたらええのか分からなくなって……。

黒羽はそんな時もう死んどったし、ホースを当てられてるのを見て、すぐに誰かがこのトリックをやった事には氣いついたんやけど……。

服部「どないする? とっ……。とにかく工藤に……?」

色々考えとったら、木箱の中で、その録音機のボールペンを見つけたんや。

勿論、黒羽の『りょーかい』つちゆう声が入つとるのにも気が付いたし、それに……。

それは船に乗る時、工藤がポケットに差してたボールペンやったから……。

せやから俺……！
てつきり……！

(……工藤！？)

コナン「父さんが殺した』って、勘違いしたんだね？」

服部「ああ……。せやから、ホースも元の場所に戻して、蓋も閉めて分らんように……。」

コナン「ボールペンと血痕付きの指紋は？」

服部「それも俺が全部……。ホンマにあの後に『何やってんやろ』と思うて……。それで、工藤に自首するように話そうとしたんや。そやけど……。」

そこまで言うと、服部は半分怒りを表すかのような目で、快斗を睨みつけた。

その目つきに恐れるでもなく、睨み返すでもなく、快斗はただ冷たい目で隣を見つめる。

もうその目つきから考えれば、大体の流れは想像できた。

コナン「もう一度現場にやってきた時……。そしてさっきの引っ掛けの推理の時に気が付いたんでしよう？ 『自分は嵌められたんだ』って……。考えてみれば危うい綱渡りだけど、平次さんの前

で無線を使う事なんて、快斗さんには容易に出来ること……。今回は偶々平次さんの方が自分から言ってきたから、好都合だと思っ
たんじゃない？」
メンバー全員「!?」

コナンが静かにそう問い掛けると、服部はコナンの方を向き直りながら、ハッキリと頷いた。

服部「ああ！ それ以外に言わしてもらえばや……。俺があんたの遺体を見つけた時、ダイニング・メッセーじなんか何一つなかった……。それは確かや！ しかも、丁度ホースを退かして元に戻り始めた時刻が、さっきの作り話の方の推理と嫌っちゅうくらい結びついてて……。コイツのことや。そこまで計算しとったんやろ……。せやから俺、自分が騙された事に気が付いて」

新一快斗「アハハハ！！ ハハハツ！！」

服部「何がおかしいんや！！」
いきなり笑い出した快斗に掴みかかる勢いで、服部は両腕伸ばす。

幸いにも小五郎が近くに来てくれたおかげで、快斗は殴られずに済んだが、狂ったような笑い声は全く以て消えない……。その声に、服部の顔も怒りの色に変わり始める。

新一快斗「ハハハツ……。まさかその暗号『俺があの後で作った』なんて言うんじゃないだろうな？ コナン。けどその時には、もう完全に血は固まり切ってて、とてもダイニング・メッセーじなんて」

コナン「だから『ペパリン』を一部の血に含ませ、あえて平次さんが自分に罪を被せられやすいようにし掛けたんでしよう!? 平次さんが『父さんが殺した』と勘違いして、自分の罪を被ると踏んで！！」

そう言い述べたコナンの視線は、先程快斗が割ろうとしていたガラスコップの方向に引き、その目はキラキラと、何度も蒼い光を放っていた……。

35・本当の真実（後書き）

どーも

現在『工藤コナン』が終わった後の短編を書いている
KIDですー！！

予め言っておきます・・・。

途轍もなく長いです！！

（今までで一番長い短編です！ 軽く『かくれんぼ』&『さよなら』とたった一言で・・・越えてます！！）

やっぱり短編は苦手な人間です・・・はい・・・。

（学校の作文とかも、平気で2枚必要だったり・・・？ 決して無駄に引き延ばしたりしていないんですけどねえ・・・）

コナン

「ところで、今小説書く以外に、何か別のヤツにハマってるんだって？」

快斗

「一昔前は『麻雀ソリテア』と『コナンのポーカー』と『花札』。今は『麻雀』と『ナンプレ』と『プロキシー』だよな？ それ以外に何やってんの？」

KID

ジグソーパズル (^ - ^)

昔っから(それこそ4〜5歳くらいから) 大大好きで、つい最近、
また買ったちゃったんですよねえ」。

コナン

「えっ? 一回ブーム去ったの?」

KID

いや……。

高くて買えなかったの話で……。

(なんか保育園くらいの時に買ったディズニーの10000ピースを
やったのが、中学生の時で……、それで最後だったような……)

今回もまた10000ピースチャレンジで

快斗

「何のパズル? クジラとか?(よくあるヤツ……) ディズニ
ー? それともストレイシープ?(知ってる人いるかな)? 羊の
やつなんだけど……」

KID

ゴメラ〜っじゃなかった……!!

ゴジラのヤツ(笑)

(赤いの……)

コナン・快斗

「どんなパズルだよ……!!」

K I D

雑談が長引いたので、失礼

36. はられた罠(トラップ) 掛かった獲物(ターゲット)

コナン「快斗さんは最初から、予測してたんでしょ？ 平次さんが父さんの犯行だと思ひ込み、自分に罪を被せて、父さんを庇うと・・・。だから一部の血の中に『ペパリン』を含ませ、あえて平次さんが証拠を残しやすいように細工した」

メンバー全員「!!!」

服部「何っ!？」

快斗「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いて再び服部の鋭い視線が向いたかと思うと、逆に快斗は何があっても動じずの反応を示した。

このまま快斗は、コナンの推理から上手い事逃げるつもりらしい。

紅葉「『ペパリン』って?」

平次「凝固剤の一種や。本来は輸血用の血液を固まらへんように使われてる薬品のことやで」

直子「そっか！ だから輸血する時の血液は、普通の血みたいに固まらないのね」

光夜「それに・・・。偽物のダイニング・メッセージと、平次さんの指紋を付けさせる事の出来るだけの量なら、簡単にこの船に持ち運ぶことも出来るし、元々害がない薬品だから、自分で飲んで証拠も消せる・・・」

その光夜の推論の答えを表すかのように、コナンはテーブルの上に再び置き直したコップを見つめた。

中身は透明な液体だが、その何%が水かは分からない・・・。
もしかしたら、このコップの中の液体半分以上が、あの薬品の可能性もある。
ペパリン

コナン「父さんに化けてるせいで、中々抜け出せる機会のなかった快斗さんは、それ（ペパリン）の容器を捨てる事も、中身を完全に使い切らせる事も出来なかった……。だからそのコップの中に、使い切れなかったペパリンを入れ、飲むかコップを割るか、あるいは両方を行って、証拠を消そうとしたんでしょう？ そうだよな？」

快斗さん「

もう少し詳しく結論を言えば、快斗が証拠を隠滅するために取るうとした行動は、おそらくコップごと割るだ。

あの現状からも分かるように、快斗はまだ水が入っている状態のコップを手で払い退けようとした……。

あれは、完全にコップをあの会場で割り、ガラスの破片は袋に……。中の水は、布巾や雑巾などで拭き取って、周りからも警察からも調べられにくくしたかったのだろう……。

流石に割れたコップの中のモノまでは、普通は調べようとは思わないうし、布巾や雑巾などに付着したペパリンは、一回水で濯いでしまえばほとんど流れてしまっただろう。

きつと快斗は、それを狙ったに違いない……！！

コナンがそう確信しながら快斗を見つめていると、快斗は逆に、それこそ今まで一度も見た事のないような形相で、コナンを睨み返した。

そして低い声でゆっくりと、コナンに対して口を開く。

新一快斗「俺が殺ったっていう証拠は？　それがなくちゃ、犯人は逮捕出来ないぞ？　ましてやこんな、警察もいなく、痕跡も調べられない場所じゃあ尚更な！」

コナン「……………証拠……………？……………」

新一快斗「ああ、そうだよ……………。証拠だよ。どうした？　さっきまで散々人の事を犯人扱いしていたくせに、証拠は一つもなかったのか？」

コナン「……………」

快斗がそう尋ねながらコナンをやや上から見下ろす感じで見つめたが、コナンは一向に口を開こうとしない。

まさか本当に……………。

証拠なしの推理を……………。

蓮「コナン？　どうしたの？　快斗さんが犯人だっていう証拠は？　まさか……………！！　本当にないのっ！？」

コナン「……………」

蓮「ねえ！　コナン！！」

蓮の呼び掛けに対しても、コナンは全く口を開かずに、やや目線を下に伏せてしまっている。

その表情からは、さっきの堂々とした姿は、一切見受けられない……………。

新一快斗「フツ……………。所詮、証拠なしか……………。となればやっぱり……………、疑わしいのは服部しかいないって事だよな？」

服部「くっ……………！」

新一快斗「そうだろ？　服部。必然的にそうなるだろ？」

快斗が半分微笑を浮かべながら、横目で服部にそう口を開いた。
一方の服部も、快斗に好き勝手にやられている怒りと、コナンの不
証拠推理に腹を立て過ぎて、半分何が何だか分からなくなり始めて
いた。

コイツ……。

ホンマに殺してしもてもええやるか……。

そんな気持ちを体中に燃やしながら、服部が再度快斗に飛びかかる
うとした。
その時！

コナン「トゥルーイット……、ワンオールウェーズ……」

突然コナンが口を開いていった、意味深な言葉……。

その言葉に『？』マークを浮かべていると、コナンは顔を再び前に
上げ、快斗の方を見つめながら口を開き言う。

コナン「分からないの？ 快斗さんもう自分で、証拠を口にしちゃ
ってるんだよ？ ハッキリとね……」

快斗「？ ……何？ ……」

何を言っているのか分からない……。

一体コナンは、自分がどんな間違いをしたと言いたいのだろう。

しかも、自分が『新一を殺した犯人だ』と決定づけるような証拠を・
・。

一体いつ……？

どこで……？

その言葉の意味が理解できていない様子の快斗に、さらにコナンが
分かりやすいように問い掛ける。

しかも……、かなり致命的な内容で……。

コナン「じゃあ、逆に訊くけど……。どうして血痕が固まってる
なんて言ったの？」

快斗「！！！」

快斗『だけどその時には、もう完全に血は固まり切ってる』

コナン「その時って……。僕の前に話した推理じゃ、まだ平次さ
んが父さんを殺害したばかりの時だよね？ 快斗さんは、その最
初の推理が『真実だ！！』って思ってるはずなのに、なんでそんな
こと言ったの？」

快斗「そ……、それは……。」

そう……。

その事を知っているのは、最初のコナンの推理は丸っきりのデータラ
メで、今コナンが説明した推理が当たっていると分かっている人・
・。

そしてその遺体を、ハッキリと目撃できた人間のみ……。
実際それを直近で見たのは、服部とコナン達だけのはず……。

しかもあの言葉の中に入っている『その時には』の『その』。
あれは一体いつを表しているのか、コナン達は知るはずもない……。

それを詳しく知っているのは、犯人だけ!!

コナン「じゃあ快斗さん、教えてくれる？ どうして父さんの血液
が全部、固まっていると分かったのかを！ そして『その時には』
の『その時』が、一体いつの事を言っているのかをな!!」

コナンの推理に、ようやく『終幕』という言葉が、静かに浮かんで
いた……。

36・はられた罠(トラップ) 掛かった獲物(ターゲット)(後書き)

ども

何故か間違えて投稿している事に気が付いた

KIDでーす!!

あつれ〜?

予約したんだけどなあ〜。

個人的にパニックになってしまい、一旦別に保存して消してしまいました。

すみません……。

(16日に読まれた方、話は進展していませんので、ご了承ください……)

コナン

「どう考えても『打ち間違い』だろ？」

KID

多分な……。

ハア〜、ビックリした……。

え〜っ……。

来週はいよいよコナンの推理終幕!

そして、またしても驚き展開です!

それでは
三

37・ゲームの終わり

コナン「さあ、快斗さん！ 説明してよ！ どうしてあの現場の血痕が、もう完全に固まっていると気が付いたのか……。そして『その時には』の答えを！！」

快斗「っ……。！……。！……。！」

快斗の沈黙は、何よりもその『真実』を差していた。

あまりにも衝撃展開の連続で、パーティー会場内は白け切っている。いや……。。

正確に言えば、白けているのは極一部の人達……。

その中で、青子は一人涙を浮かべながら、顔を両手で隠している。

先程まで怒りの涙だったはずの青子の涙は、いつの間にか哀しみの涙に変わっていた。

自分の大好きな人でもあり、大切な人が殺人鬼だったのだ。無理もない……。

皆の表情が『どうして？』という顔になりながら、静かに沈黙する快斗を見つめる。

無論光夜も、やや怒りの表情は滲んでいたものの、皆と同じ目で見つめていた。

そして、快斗が『この状況をどうすべきか』と思い、やや目を泳がせているのを見て、コナンはこの静寂の中、静かに口を開く。

コナン「って言ったら、ゲームクリア？」

その発言を聞いた瞬間、快斗はコナンに向かってニツと笑い、会場の入り口でもある大きな扉に向かって、声を張り上げた。

快斗「新一ーっ!! もういいんじゃないのーっ!? 早くこっちに来ていよーっ!!」

メンバー全員（えっ・・・?）

快斗の予想外過ぎる発言に、皆の目が一瞬点になる。さらに・・・。

服部「お、おい! このドアホ!! 工藤の許可無しに勝手にバラしてしまたら・・・っ!!」

快斗「えっ・・・? まだ誤魔化すの? これ結構疲れるんだけど・・・。それに俺、新一から『殺害の動機まで考えて言え』なんて、言われてねえし・・・」

服部「いやっ! そういう意味やなくて・・・!!」

快斗「じゃあなんだよ! ちゃんと予定通りにやっただろって!」

服部「あああああ!! ったく! せやから・・・!!」

イマイチこちらの言っている事が理解できていないらしく、服部はややドカドカ歩きで快斗に近付き、扉の方を指さしながらあれやこれやと怒鳴り散らす。

一方の快斗は、そんな服部の発言をジト目でただ横流しに聞いてい

た。

と、その時。

ギイイイイイイ……

コナン「あつ……」

蘭「!!」

メンバー全員「何っ!？」

蘭「……しん……いち……?」

ゆっくりと開いた入口の扉。

その扉の目の前には、あの血のり付きではないタキシードに身を包んだ新一が、その顔に微笑を浮かべながら立っていた。

が、微笑を浮かべていたのは本の一瞬……。

すぐに新一は妙な事でもめている二人の方に視線を向ける。

新一「おい、服部！ 快斗！ ゲームが終わった瞬間何やってんだよ！ 周りの空気台無しだぜ？」

服部「せやけど、コイツ勝手に……!!」

新一「いいだよ……。コナンがとくに気が付いてたみたいだから……。なっ？ コナン」

コナン「……やっぱり『ゲーム』だったんだね？

父さん」

コナンが同じように軽めの微笑を浮かべながら言うと、新一は『フツ……』と笑い『サプライズはこれだけじゃないぜ?』と言って、

自分の後ろの方に視線を向けた。

そこに居たのは、最初からこの船の受け付けを担当していた、あの佐村慶介と伊藤スミレだ。

『一体この二人のどこがサプライズ?』と思っていると、佐村が突然眼鏡を外し、髭やカツラごと、マスクを捲った。

その姿を見て、コナンも『あっ!!』となる。

佐村「驚いたかな? この工藤優作が化けていた特注メイクは」

コナン「おじいちゃん・・・? じゃ、じゃあスミレさんの方は・・・」

スミレ「そうよ。私・・・」

そう言つて、スミレの方もカツラを取り、マスクを顔から外した。

そこに現れた顔は紛れもなく、新一の母。

そしてコナンの祖母でもある、工藤有希子・・・。

コナン「おばあちゃん!」

有希子「も〜う、コナンちゃんったら・・・! 私の事は『おばあちゃん』じゃなくて『おばさん』でしょ?」

優作「よさないか、有希子。いつまでも永遠の女優の姿ではないんだぞ?」

新一「全くだよ! 大体呼び名が『おばさん』じゃあ、どう考えても『母さんの孫』だとは思わないぜ? 誰も・・・」

有希子「何よ、男共二人揃いも揃って・・・! 女が時間を止めちゃいけないの!? ねえ!」

そう言つて詰め寄ってくる有希子に逃げながら、新一はコナンの元へと向かう。

そんな新一に、コナンは笑顔ですら向けようとはせず、ただ『ムッ』

とした顔で、新一を見上げていた。

『とりあえずは』と、新一は周りに大きな声で事情を説明する。

新一「皆さま、ご安心を！　ここまでが、俺と服部と快斗、それから・・・、灰原と博士が考えたゲームです！　見ての通り誰も死んでいません！　勿論犯人もいません！　これは全部、コナン達の為に考えた、父親集団の単なる遊びです！　ややご迷惑を掛けたようですので、ちよつと詫びます・・・」

快斗・服部・新一「どうもすみませんでした！！」

情けなくもタキシード3人組みが、一斉に皆に対して頭を下げる。周りの人達は、まだ完全に自体を把握し切れていないのか、一体何の事なのか分からず、ただただ周りの反応に右往左往するばかり・・・。

そんな状況を察してなのか、コナンの冷たい一言が飛ぶ。

コナン「ちよつと内容がリアル過ぎ・・・。と言うか、最初に言うておくべきだったんじゃないの？　これが『ゲーム』だったで」
平矢「コナンに言われるまで、ホンマに気付かへんかったで・・・。脈がなかったんは、たぶん分厚めのマスクを被ってたからやるなあ・・・」

直子「あの死後硬直もデタラメね。わざと調べた振りをしたんでしようし・・・」

快斗「その通り」

バシ！

快斗「痛って！！」

服部「アホッ！　明るく言うところやないわ！」

服部の強烈な脳天ビンタの突っ込み（大阪仕込み）が入ったところで、ようやく周りが状況を理解し始めたらしく、新一はゆっくりと顔を上げ、コナンの頭を撫でた。

新一「でもよく分かったな……。流石だぜ？ 未来の名探偵君」

コナン「ふん！ 分かったのは母さんのおかげだよ」

新一「えっ？ 蘭？」

そう言われて蘭の方に視線を向けてみるが、蘭は一体何の事をコナンが言っているのか分からず、こちらもこちらでキョトンとした表情を浮かべていた。

そんな蘭の方に視線を向けながら、コナンが蘭に対して口を開く。

コナン「母さんのそのポケットの中の手紙……。ひよつとしてゲームのネタバレ内容が書いてあるんじゃない？ さつきから何回もポケットの方を気にしてたから、すぐに分かったよ。平次さんから貰ったんでしょ？」

蘭「う……。うん……」

新一「えっ？ 服部から!？」

あまりにも予想外なコナンの予測発言と蘭の答えに、新一は咄嗟に服部の方を向く。

さらに……………。

園子「ついでに私も！ トイレに行った時に快斗君からもらったよ」

歩美「歩美も平次お兄さんから」

英理「私も……。彼からコレを貰ってるわ」

小五郎「えっ、英理！ お前まで……!」

3人の手には、同じような4つ折りの白い紙が握られていた。

薄らと紙から透けて見える黒い文字は、どうやら太さ的に皆、同じようである。

通りでこの辺りが、コナンが推理を行っている時に静かだったわけだ。

この4人は最初から、このゲームの結末を知っていたのである。そしてその手紙を見て、一番にビツクリしたのは父親の新一だ。

新一「おい、服部！ 快斗！ なんでゲームの内容を知ってる人間がこんなに居るんだよ！！ 予定じゃあ一人だったはずだろ！？

しかも肝心の青子ちゃんが知らされてねえじゃねえか！！」

そう、予定では一人だけ……。

たった一人だけ教える事になっていたのだ。

しかもその相手も予め考えておき、一番に知らせた方がいいと思っただのは、被害者&犯人役を演じる事になっていた快斗の妻の青子にしていたのだ。

でなければ余計な混乱を起こしかねない……。

にも関わらず、何故かその肝心の彼女が知らされていなかったのだ。通りで先程から、何やら涙ぐんだ演技が上手いと思っていたのだが、彼女は元々演技などとしてはいない。

全て素だったのだ。

服部「いやあ……。色々と混乱招くとマズイ思うてなあ……。あつ、黒羽の姉ちゃんの事は、俺は知らへんぞ？ 渡すことになつてたの、黒羽の方やし……。」

新一「快斗」

快斗「いや、だつてさあ……。青子、すぐバラしそうだったから、却って恐くて言い出せなかったんだよ。今でも『アホ子』だし……。うっかり喋り過ぎて、全部が水の泡にされたらショックだったしさあ……。」

まあ、確かに……。その気持ちも分からんでもない……。

内心彼女はバラしそうな気配はある。かなりある。

だがだからと言って、伝えなかったのはかなりマズイだろう。その証拠に……。

青子「なんですって〜!? もう一回言ってみなさいよ! バ快斗!!!」

快斗「ぎよあああああーっ!!! しっ……、新一! 平次! 頼むから助けてくれよ!!!」

新一「だが断る!!!」

服部「自分でどうにかしい」

快斗「ぎゃあああああ!!!」

と、やや快斗が青子にボコボコにされているを見ながら、新一は一旦自分の足元で、同じくその光景を見てジト目をしているコナンに視線を戻す。

新一「ところで、これがゲームだってどこで分かったんだ?」

コナン「ん? そうだなあ……。まあ、全体的に引っ掛かったんだよ。『快斗さんが殺された』っていうのに、皆はピクリとも反応しない……。あのダイイング・メッセージを父さん達が解けなかったのもおかし過ぎた……。そして何より、電波の通らない場所を船が走るというのに、トランシーバーを持参しているのがおかし過ぎる! 普通に考えて、機械での連絡手段は使えないと、念入りに確認していたはずなのに……。トランシーバーを持っていたのは、本当は電波の通じる場所だと、予め知っていたから……。警察に連絡できないってというのは、全くの嘘でしょ?」

光夜「それと『新一さんが生きています』っていう証拠に、船の霊安室が一回……。内側から開けられた形跡があったぜ？ コナンに頼まれて調べてみたら『オープンライト』が光ってたから、すぐに分かったし……」

コナン達の会話を聞き付けた光夜も、あの時の調査の結果を報告する。

推理ショーを始める前にコナンに頼まれて調べたこと。

それがこれだったのだ。

コナン「霊安室のドアが一回、開いたかどうかを確かめて欲しいんだ」

光夜「なんで霊安室を？」

コナン「もしかしたら快斗さん、殺されてないかもしれない……。これがまだ、ゲームの続きかもしれないんだ」

光夜「えっ!？」

コナン「だからそれを確かめる為にも、調べて欲しいんだ。多分ほとんどの人達はここに居るから、光夜が調べるのを邪魔する人間はいないだろうしね」

新一「なるほど……。流石だな……」

自分でも意外なほど色々な事に感付いていたコナンを見て、新一が静かに『ヒュー』と、口笛を鳴らす。

が、コナンは「ちっとも嬉しくない」と言った感じの表情で、そんな新一を睨みつける。

そして、やや怒りの籠った目で、新一に言った。

「...」

38・『探偵』の役目

新一「コナン？」

こちらを静かに睨みつけるような表情を浮かべたまま、コナンは顔を下に伏せ、ただ『どうして？』と繰り返す。

そのやや震える声に、新一はただ目を泳がせていた。

やがて、コナンは顔を上に上げると、新一に対して怒鳴りかかった。

コナン「どうしてこんなゲームなんかやったんだよ！！　まだ『これはゲームなんかじゃない』って思ってた時、皆がずっとどんな気持ちだったか……。父さん達は分かってんのかよ！！」

『ハア……。ハア……。』と荒い息遣いをしながら、コナンはただ何も答えようとしない新一を見つめる。

それから数十秒が経った頃、コナンの怒鳴り声によって静まり返ったパーティー会場から、まるで何処までも響くかのように、新一の声が聞こえてきた。

新一「……………知ってほしかったんだよ……。本当の『探偵』というものが、どういうことなのか……。いつも強がってたお前に……………」

コナン（えっ……………？）

それを聞いた途端、ずっと怒り眼で睨みつけていたはずのコナンの瞳が、新一の顔を見つめながら驚いた表情で固まった。

そんな自分を見上げるように見つめるコナンと同じ背丈にしゃがみながら、新一は自分と同じ蒼い目を見つめて口を開く。

新一「お前が毎回毎回『僕は立派な探偵だ!』って言って強がってたのを見て、それで考えてさ……。実は俺、お前がそういうことを言う度に、ちょっと複雑だったんだ……。本当の事件はこんなもんじゃない……。本当の捜査はこんなに上手くはいかない……。まだ『探偵』という世界を小説の中だけしか知らないお前には、全部を本だけで知ることが出来ないと思って……。だからこのゲームを執行して、お前に本当の事件を追っているのと全く同じ体験をさせた。普段俺がどんな心境で事件を、調査をしているのかを知ってほしくてな……。多分お前は……。このゲームの中で、何回も傷ついたり、悩んだ事があつたと思う……」

その言葉を耳にしたコナンの脳裏に、一時遺体となって発見される事になった快斗（新一）や、それを機に絶交しそうになるまでもめてしまった光夜の事が、一気に音声付きの映像となって流れ込む。

確かに、ショックは大きかった……。

本当に快斗（新一）が殺されていると思つたし、容疑者が顔見知り人間しかいなかった事を思い出すだけでも、あの時は『どうしてこの人達が容疑者なんだよ!』と思つた。

暗号だつて、答えが全く分からなくて苦戦はしたし、ぼんやりと犯人ではないかという人物が脳裏を過つても『違う!』と思つて別の証拠を探し回つたり……。

光夜との喧嘩だつて『どうしてこうなるんだよ……。!』と、強くそう思つた。

でも結局は、この流れ全てが父さん達の作り上げた『ゲーム』の流

れ（シナリオ）にすぎない……。
そうだと知ったから、僕は怒ったんだ。

だけど……。

だけど本当は……。

これは全部……。

新一「事件を追う時は、探偵は今までの感情のままでも……、いつもの性格のままでもいられない……。俺も事件を追う時は、もうお前の知ってる『工藤新一』じゃない……。それも、お前は今回の出来事^{ゲーム}で理解できたはずだ。『探偵』というものがどんなものなのか……。どういう心情で、事件一つ一つを追わなければいけないのかを……」

。「感情」というものは、事件を解く時の一番の妨げになる」……。

前に新一から聞いた言葉だ。

初めから『コイツは性格が悪いし、この被害者とはよくもめていただから犯人だ！』とか『この人は優しい性格の持ち主なんだから、人殺しなんて絶対にしない！』などという理由で、事件を追ってしまっただけじゃない……。

誰かに疑いを掛けられたかもしれない……。

別の人間を疑っている間に、本物の犯人が証拠を隠滅してしまうかもしれない……。

キツく解い糺ただしたせいで、その犯人扱いされた人間が自殺し、二次事件を起こすかもしれない……。

そう言った可能性が出やすい『感情調査』は、基本的に望ましいものではない。

見つけた証拠を『ピース真実』という名の枠に嵌めていき、そこで出来上がった推理が、事件を解く大きな力ギとなる。

現に今回のこのゲームの中にも、本物そっくりに似せただけの事があると思わせられるほど、それに近い内容のものが多々あった。

あれは、そういう事を知ってほしいと思った新一の、メッセージだったのかもしれない……。

コナン「じゃあ父さんはどうして、探偵のまままで居続けるの？ 自分の感情を……、自分自身を壊しても……。それでもどうして『探偵』を続けようと望むの？」

今まで誰にも訊かれた事のなかった質問に戸惑ったのか、新一は再び目線だけを下の方に向けて考え込む。

コナンの質問はどれも、今まで自分が訊かれた事のないものばかりで……。

それでいていざ訊かれると、簡単には答えられそうにないものだら

けで……。

『これはまた答えるのに掛かりそうだな……』と、新一は内心苦笑いを浮かべつつ、自分の胸に訊いた。

『どうして自分は……「探偵」であることを望むのか』を……

そうして問い掛けて出てきた答えは……。

あまりにも単純過ぎるもの……。

新一「事件を……、解く為さ……。ただ単純に……。」

コナン「本当に単純だね……。理由とかもないの？」

あまりにも垢抜けた返事に、コナンはジト目になりながら新一を見つめる。

本当に出てきた答えは『これがこの質問の答えになっているのか？』と、疑いたくなるような程、そっけないモノで……。

でも、その続けざまに『その理由は？』と訊かれると『何故そう思ったのだろっ……？』という疑問に引っ張られる。

その疑問にしばらく引つ張られ続けると、やがて一つの答えが見えてきた。

新一「『誰かが「犯罪」という名の糸を解かなければ、それは迷宮入りになってしまう……。それを解きほぐすのが、探偵の仕事』。……。随分昔に、俺が一番尊敬していた人が、そう言ったんだ……。あれもこんな感じの『ゲームの中』だったけど、多分あの日以来、俺の中で『謎解きが楽しい』程度だった『探偵』というものが、全く別のものになっちゃったんだろうな……。」

その話を聞いて、その時のゲーム開発者の一人の優作が、半分『おや?』という表情になる。

そしてそんな優作の微妙な変化に気が付いたのか、ずっと優作達に対して背中を向けていた新一が後ろを振り返り『何のこと言ってるのか……。分かるよな? 父さん』と言った。

その問いかけに、優作は優しそうな笑みで返事を返す。

新一（あのシャーロック・ホームズは『顔立ちが父さんにそっくり』だったこと以外、特に父さんとは関係ないけど……。ノアズ・アークのあの言葉は、忘れるに忘れられねえよ……。）
コナン「コッホン! ところで今回のこのゲーム……。少し入り組み過ぎたんじゃない?」

やや祖父と父親だけの空間に入りこみそうになった新一を、コナンは咳払いで現実に引つ張り込む。

まあ確かに、どさくさに紛れてコナンが言った通り、今回のゲームはかなり入り組んでいた。

それもやや危うい綱渡り状に……。
もっと深く言ってしまうえば、まるでいきなりこの設定を取って付けたような……。

新一「ああ、実は……。本当は服部が犯人の時点で終わらせるつもりだったんだけど、快斗が余計に要望を出してきてな……。こんなかなり入り組んだゲームになっちまったんだよ」

快斗「別にいいだろ？ 久しぶりに目立ちたかったんだから……。服部「ったく、なんで本番になってからこうも変更するんや！ おかげでこっちは演技するだけでもしんどかったで！」

新一「お前が言うなよ！ 服部だって、余計に3人もゲームのネタばらししやがって……。！」

服部「ハハハ……。スマンスマン」

と言いながら、服部はバチが悪そうに頭の後ろを掻く。

そんな服部の様子を見ながら、新一はその場から立ち上がると、自分勝手な行動に走り過ぎた二人をジト目で見つめた。

蓮「でもまあ、よかったんじゃない？ 結局誰も死んでないんだから」

平矢「そうやな……。全部まあーるく収まったんやし」

紅葉「まあ……。エライ遅くなってしもたけど、最初の暗号解くのは楽しかったしなあ」

直子「うん。普通だったら暇だったパーティーだもんね。ね、光夜」

光夜「……。？」

直子「？……。光夜……。？」

何故か黙ったままの光夜に問い掛けてみれば、光夜は一人、ただスタスタと外の方へと向かって歩き出してしまった。

それも、先程のコナンとはまた違う、半分暗いような……。怒りと何か別の感情がぶつかり合っているような、そんな表情で、

だ。

快斗「お……、おい……。光夜、何処行く気だよ」

光夜「……」

快斗「おい。光夜」

ややそんな光夜の表情が心配になった快斗が、光夜の細い右腕を掴んだ。

その時だ。

バチンッ！

快斗「っ……！」

光夜「触るなよっ……！」

光夜は事もあるうちに、自分の腕を掴んだ快斗の手を、かなりの力で振り払ったのだ。

さらに振り払ったのと同時に、光夜は何の躊躇いもなく、快斗の手の甲を強く平手打ちをした。

その行動に、思わず新一やコナンもただ表情を固まらせる。

光夜なら……、知っているはずだ……。

一流の奇術師達^{マジシャン}にとって、手は命よりも大切なものだ……。

自分も奇術師^{マジシャン}なら……、なおさら……。

快斗「こ・・・、光夜・・・？」

激しく叩かれた手の甲を軽く一回だけ摩り、快斗は半分驚いたような、少し悲しそうな表情を混ぜながら光夜を見つめる。

光夜は一瞬、自分で払った右手が少し痛かったのが、頻りに手の平を開いたり閉じたりを繰り返した。

そして、やがてその動作が収まると、光夜は快斗の方を横目で睨みながら言う。

光夜「あんたになんか・・・、触れられたくない・・・」

青子「光夜！ 一体何言ってるのよ！」

直子「そつよ！ 自分のお父さんなのにどうし！」

光夜「泥棒だった人間なんて、認めたくない・・・。親父なんて大っ嫌いだった！！」

快斗「！！」

その瞬間、快斗の表情が驚きと寂しそうな表情へと変わり、その場に動作も含めて固まった。

それは快斗だけではなく、事情を知っていた新一や服部の表情にも表れている。

光夜は最後に快斗を睨みつけると、そのまま外の通路の方へと、一目散に走り出してしまった。

ただ一人、悲しみに暮れている快斗を残して・・・。

38・『探偵』の役目（後書き）

どーも

現在学生として、とても忙しい日々を送っている

KIDDでーすー!!

ハァ、今日もへトへトで帰宅です・・・（ーー・・・）

コナン

「ところで今回のラスト、一難去ってまた一難かよ・・・」

KIDD

そう・・・。

実はこの部分の台詞と、前の話の台詞を延ばしたせいで、ちょっと話が多くなってしまったわけですよ。

快斗

「なんかだいぶ、今回の台詞で内容は読めるんだけど・・・。なんか本当に子供（しかも男）が生まれたら、俺そう言われそう・・・」

コナン

「確かに・・・、やっぱり犯罪しゃ」

KIDD

あああああー!!

そこから先の台詞はナシ!

(アンタ今にも言いそう・・・)

それでは ミ

39. 引き裂かれる父子（おやじ）

『ボタン！』という扉が激しく閉まる音に、ようやく我に返ったのか、先程までただ驚いていただけだった新一と服部が、扉の方に向かって走り出す。

が……。

快斗「いいよ、新一！ 平次！」

そんな二人の行動を咄嗟に止めたのは、あの快斗だった。

その快斗の言葉に、新一達も一瞬オロオロしながら、扉と快斗を見比べる。

服部「せつ……、せやけど……！」

新一「そうだが、快斗。光夜君に言われたままじゃあ」

快斗「もういいって！！……無理やり光夜に……^{アイツ}

、認めさせるわけにはいかねえよ……」

今にも自分の感情が噴き出してきそうな表情のまま、快斗は皆に対して背中を向ける。

心なしか、微妙に声と肩の辺りが震えているように感じた。

快斗「所詮……犯罪者は犯罪者……。一度泥沼にはまったら……普通の人間になんか戻れねえんだよ……父親にも……」

博士「何を言つとるんじゃ、快斗君。君が刑務所から出てきて、光夜君が産まれた時……。君はいつも光夜君のことを見とったじゃろ？ ちゃんと『父親』という立場で……。そうじゃろ、快斗君」
博士が優しく声を掛けるも、快斗はこちらを一向に振り向いてはくれなかった。

それと同時に、やや上の方を見上げながら、まるで呟くように声を漏らす。

快斗「……………何がダメだったんだろう……………何が……………、光夜をあそこまで引き離しちまったんだろうな……………」

新一「快斗……………」

服部「黒羽……………」

流石の親友二人も、こればかりはどうする事も出来ず、ただただ快斗を見つめるばかりだ。

本当は知らず知らずの内に同情していたのだろうが、きっとそんなもの、今の快斗は求めてはいないに違いない……………。

ふっとコナンの脳裏に、最初にこの船に乗り込み、皆と楽しく喋り合っていた時の光景が、脳裏を過った。

確かあの時、光夜は頻りに、父親である快斗の事を避けていた。まるで、今は近付きたくないと言ったくらいの感じに……………。

もしかしてあの時もう既に……………、この二人の間には大きな壁が立ってしまったのではないか……………。

そしてそれを一方的に立てていたのは、おそらく光夜の方……………。

コナン「父さん……………。光夜、快斗さんと何かあったの?」

平矢「そう言えば……………。最初に皆と一緒に居た時も、光夜のヤツ……………。妙に黒羽はんと距離置いてたなあ……………」

コナン「ねえ? どうして?」

コナンがそう問い掛けると、新一は一瞬迷いながら、いつまでもこちらに振り向かない快斗の背中を見つめる。

そして快斗が『特に理由をこちらが教える事を止めない』と察すると、静かにコナンの質問に答えた。

新一「実は快斗……。つい一週間前に、自分が『怪盗キッド』だったことを、光夜君に話したんだ……。そしたら、その事にかなりシヨックを受けたみたいで……。気が付いたら快斗のことを・

平矢「ちよっ、ちよう待てや！ それ、おかしいやんけ！ アイツ、最初黒羽はんがなくなった時『親父がいない！』言うてめっちゃん心配してたし……。それに！ 工藤のこと散々『人殺し』って・

確かに平矢の言う通りだ。

最初の段階で快斗が姿をくりました時（正確には新一だが）、光夜は辺りに目を向けながら、ずっと『親父がいない！ どこにもいない！』と騒いでいた。

それに、遺体役として見つかった時も、光夜自身はかなりのシヨックを受けていたし、一番に心配していたのもちゃんと見ている。

さらには、快斗が死んだのは新一のせいだと考えだした光夜は、コナンに対して『人殺し！』と言って、それっきりしばらく現われなかったりもしていた。

その姿を振り返ってみると、どう考えても快斗の事を嫌っているようには見えない。

むしろ、今までのあの二人のように、まるで信頼し合っているようにも見えた。

なのはどうして……。

新一「自分が思っていることと、実際に自分自身が感じていることの区別が、まだ光夜君には出来ないんだよ……。本当は尊敬していても、現実的に考えたら犯罪の前科がある……。それに、快斗の周りの人間全員が、快斗の事を普通の人と同じように見ているわけじゃない……。その事を知って、避けている人もいる……。そういう周りの視線とかが、余計に光夜君の気持ちを遠ざけてるんだ」

コナン「でも！ 罪は償ったのなら、それはもう昔の話じゃ」

新一「罪を償っても、その代償は途轍もなく重くて大きい！ 普通に刑務所を出たところで、完全に状況が変わるわけじゃないんだ・

コナン「……………」

コナンは新一の言葉に口を閉じると、ふっと光夜が先程飛び出していった扉を見つめる。

おそらく光夜は自分から、このパーティー会場の中に戻る気はない……。

快斗以外の誰かが声を掛けない限り……。

直子「そっか……………。それで光夜……、最近快斗さんの話をしなくなっただんだ……………」

快斗「……俺の話？」

その直子の呟きでようやく、快斗は皆の方に顔を向ける。

少しばかり目元は濡れていたが、皆は上手い事、そこを意識しないようにした。

勿論直子も、本の少しだけ快斗の方を見た後で、その内容の続きを

話し出す。

直子「実は……。光夜よく、快斗さんのこと学校とかで自慢したりしてただけど……。本当にその一週間前から……。一切言わなくなっちゃって……。むしろこつちが訊くと『なんで訊くんだよ!』って、怒られてたから……」

快斗「……。そう……。だったんだ……」

どうやら快斗は、光夜が自分の事を学校で自慢していた事実を知らなかったらしい……。

それと同時に学校でもそうだったのかと、また胸が少しばかりチクリと痛んだ。

どうやら自分は……。光夜の何もかもを壊してしまったらしい……。

自分が、犯罪者であった事によって……。

コナン「平矢……。行こうぜ」

平矢「奇遇やなあ……。俺も同じやで」

コナン「じゃあ、行くぞ」

平矢「OK」

コナンと平矢はそれだけ言葉を交わすと、一目散に扉の外へと飛び出していった。

それと同時に蓮や紅葉、直子も後に続く。

一方の新一は『一体何する気だよ!?!』と思いながら、我が子の背中が通路の壁で見えなくなるまで見つめていた。

それと同時に服部も……。

服部「何する気やねん」

新一「分からない……。なんか喋ってはいたけど……」

灰原「決まってるでしょ？ 光夜君を連れ戻しに行ったのよ。あなた達のたまご達は」

新一・服部「えっ!?!」

その灰原の発言に、服部と新一は顔を思わず見合わせる。

あの二人……。

と言うよりも5人か。

彼らは先程の快斗の発言を聞いていなかったのだろうか。

『無理矢理光夜に、父親が犯罪者である事を認めさせるわけにはいかない』……。

当然今追いかければ、それは光夜に無理矢理『快斗はお前の父親なんだ』と、本人の意思なく押しつけることになってしまう。だから自分達は、光夜の背中を追い掛ける事を止めたのだ。

それなのに……。

それなのに彼らは……。

新一「いいのか、灰原。今はとりあえず光夜君の為にも時間を置いて、自然に光夜君が快斗を認めてくれるのを待った方が……」

灰原「確かに……。普通なら今すぐにでも止めたいところだけど、今はしなくてもいいんじゃない?」

新一「えっ?」

新一が灰原の言葉に『?』マークを浮かべていると、灰原はグレイプジュースを片手に持ち、澄ましたような笑みを浮かべて口を開く。

灰原「彼らは光夜君と同じ年よ? 彼らなりの説得の仕方があると

見てもいいんじゃない？ むしろ、あなた達が説得しに行ったところで、感情のぶつかり方も接し方も違い、年代も合わない人間じゃあ、快斗さんに説得されてるのと同じで、何の感情も変わらないわよ。今はとりあえず、彼らに任せた方がいいわね」

灰原はそう言い終えると、右手に持っていたグレープジュースを一口だけ、口にした。

39・引き裂かれる父子（おやこ）（後書き）

どーも

厳密に計算して、残り3話のみだと気が付いた

KIDでーすー！

あああーっ！！

あれだけ評価や感想をたくさん頂いていた『工藤コナン』が、もう
じき最終話かあ〜。

やっぱり、やたらめったら長編として長く書いていると、結構寂し
いもんですね。

思い出とかもあるし・・・。

コナン

「まあ、あくまでもこれは『これ以上話が伸びなければ』の、話だ
よな？」

KID

まあな（。！。。）

さてと・・・。

この後の長編、そろそろ考えておかないと・・・。

まあ、色々浮かんではいるんですけど、どれから入ろうか・・・。
と言った感じです。

快斗

「次回は？」

K I D

コナン君、説得開始です！

それでは
ミ

40・本当に思っていること

一度扉の外に出てみれば、先程よりも静かな海が広がっていた。
風が弱い分、波が穏やかだ。

そのおかげで波の音があまり聞こえない……。

そしてそのおかげで、自分達が飛び出して行った通路の右側から『カツ……カツ……カツ……』と、誰かが走っている靴音が聞こえてくる。

自分達が走っている時とあまり足の間隔が変わらない足音に、コナンはそれが光夜のモノであると確信した。

コナン「上だ！」

蓮「あのカフェのところじゃない？」

コナン「行こう！」

言うが早いか、5人は再び暗い船の通路を走り出し、二階へと通じる階段を一気に駆け上がった。

二階は一階よりも狭いし、隠れられそうな場所はそのカフェテラスしかない……。

当然、店の中は閉まっているのだから、きっと外に並べられているテーブルや椅子の辺りに居るはずだ。

案の定、二階に上がって探す間もなく、光夜の背中目は目の前にあった。

まるで海の上に浮いているかのような満月の光を、見つめた姿のままで……。

コナン「光夜」

光夜「付いてくんなよ！ 誰とも居たくないから、ここに来てるんじゃないか！！」

その光夜の怒鳴り声に、ゆっくり近づいていた皆の足が『ピタッ！』とその場で止まる。

それでもそのまま怯まずに、再び歩き出したのはコナンだ。

コナン「光夜……。もう快斗さんのこと……。許してやれよ。お前のたった一人の父親だろ？」

コナンが優しくそう口を開くと、光夜はまるでコナンの今言った事が『聴き間違いだろ？』と言いたげな表情を浮かべて、コナンを睨む。

光夜「父親？ 笑わずなよ……。あんな人間を父親に認めろって言うのか！？ あんな……。っ！……。あんな……」

コナン「『犯罪者を……。か？』
中々言い出せずに口を踏み止まらせている光夜の代わりに、コナンがそう言い払った。

それと同時に、光夜は再び満月のある方に体を向けて、コナンから目を反らさせる。

そんな光夜の反応に対しても、コナンの真実を話す口は、緩まなかつた。

コナン「なんでお前……。言えねえんだよ」

光夜「えっ……？」

コナン「『犯罪者』って……。認めないくらい大嫌いなら、平気で2、3回くらいは言えるだろ？」

光夜「そっ……。それは……。だから……」

コナン「言えないのか？ 『犯罪者！ 犯罪者！』って……。思いつきり、快斗さんに向かって」

光夜「だからそれは……。っ！！」

コナン「・・・大好きだからだろ？ 父親である快斗さんのことが・・・。今でも大好きだからだろ？」

コナンがそう言い述べると、光夜はいつの間にかコナンの方に向いていた自分の体に気付き、さらに口元をヒモで縛ったかのようにキツく閉じた。

コナン「何だよ。『周りの目』って・・・。そんなの、放っておけばいいだろ！？ お前が快斗さんの事が好きなら、そのままいいじゃねえか！ なんてそんなのー々気にして、自分まで無理矢理快斗さんから離れようとするんだよ！！ 自分が本気で思ってること・・・。わざわざ押し殺してまでさあ・・・！！！」

その瞬間、コナンの脳裏にある話が蘇った。

それは随分前に、新一がコナンだった頃の事件を聞いた時に、ボソツと新一が呟いたこと。

新一『でも、あの頃の事件が解決したとはいえ、快斗の方は気がじゃねえよ・・・』

コナン『どうして？』

新一『ん？ ああ・・・。快斗ってさ、結構自分一人で色々と背負い込むことが多かったからさあ・・・。青子ちゃんの事にしろ、父親の事にしろ・・・。せめて息子の光夜君だけは、そういうところが快斗と似てなければいいけど・・・』

コナン（やつぱり……。所詮は父子おやこ……。なんだよな……。）
あの時話してくれた快斗の性格と、光夜の行動は丸つきり同じもの
のように感じた。

やはり似ていたのだ……。

父親である快斗と……。光夜の性格は……。

直子「光夜！　お願い！　快斗さんと仲直りして！！　コナン君と
仲直りしたみたいにな……」

光夜「直子……」

直子「光夜も、お父さんが泥棒だったって聞いて、凄く傷ついたと
思う……。辛かったと思う……。でも！　一番辛かったのは、
その事を隠さずに話した、快斗さんの方なんだよ！　光夜に迷惑
を掛けるかもしれない……。嫌われるかもしれない……。そう
思いながら、快斗さんは光夜に話したんだよ！？　それなのに……。
。それなのに光夜は『許せない』なんて……。そんなの悲し過ぎ
るよ！！」

いつの間にか、直子の目にも涙が滲んでいた。

そんな直子の肩に、優しく紅葉が手を置く。

その隣の二人の表情からも『快斗を許してやってほしい』と言いた
げな表情が浮かんでいた。

平矢「俺のオヤジ、前に言っつたんや……。『黒羽は普通の泥
棒と違う……。アホ過ぎるくらいのお人好し怪盗や』って……。
俺『犯罪者』って、色々なタイプがあつて、それを全部まとめて言
つてる事に聞こえるんやけど、細かく分けたら……。黒羽のオト
ンって、他とは全く違うタイプやと思う。」

ほら、敵側の人間をわざわざ助けたり、協力したり……。宝石は必ず元の場所に返すし、人を殺したりもしなければ、傷つけたりもせえへん……。自分でどうにも出来なかった時は、それに対して悔しがるし、怒りとか悲しみとか、そう言ったもんも見せてくる……。そんな泥棒、絶対他にはいいへんで？」

平矢が今話した事は、コナンも過去に聞いた事があった。服部からではなく、新一から……。

その他にも、よく周りの事を心配したり、気を使ったり……。本当に『泥棒』とは思えないくらい、素はいい奴だって……。そう聞いた……。

現にこのゲームを行う前だって……。行っただ後だって……。

蓮「光夜君……。犯罪者だからって、認めない必要はないんじゃない？ だって今まで、そんな事一切知らなかったのに、普通に快斗さんと接してきてたんでしょ？ だったら今更……。そんな事気にしたって、意識したって、何も変わらないはずじゃない！ ただ今までと同じように、快斗さんと接していればいいでしょ！？」
紅葉「せや！ せや！ 後からその事知ったんでも、今までの生活のままでええやない！ 一体その事知って、何が変わったん？ ただ快斗さんの事が、光夜君には『犯罪者』としか見えなくなっしてもたんと違うやろ!？」

光夜「……。でも……。俺……。」

頭の中では、ちゃんと分かってる……。

俺は親父の事が大好きだと……。
尊敬しているのだと……。

でもいざ、その親父が『泥棒』だったと考えると、どうもその思いが壊れてしまいそうで……。
潰されてしまいそうで……。

ただ自分が『それでも自分の親父だと思いたい』と望めば、済む事なのに……。

これが何故か、そう簡単に決められない……。

時々郵便ポストに入っている、宛名なしの手紙。

その手紙を、母さんがよくビリビリに破いてゴミ箱に捨てているのを見たことがある。

その時の母さんの顔は、こちらに背中を向けていてよく見えなかったし、別に差ほど気にもしていなかった。

時々自分の家の前で、中年くらいの人達が家や自分の事をジロジロ見ている事がある。

あの時も、どうせ『マジックなんてインチキ』とか思っている人達だから、自分達の事を詐欺師のように見ているんだと思っていた。

まあそれも……、気持ち的にいい気はしなかったが……。

ただどほんの一週間前に『俺は「怪盗キッド」だったんだ』と親父から聞かされた時、初めてあの冷たい目線の意味が分かった気がし

た。

あの人達は知っていたんだ……。
親父が『怪盗キッド』だったことを……。

でも、最初はそれを認めたくなくて、しばらくは親父とは口も利かず、目も合わせなかった。
なるべく、距離を置いてた……。

それである時気になって、時々家のポストの中に入っていた宛名なしの手紙を、こっそり自分の部屋で開けた事がある……。

中に入っていたのは、親父を罵倒する言葉ばかりが書かれた手紙……。
それもそんなものが、一つの封筒に5〜6枚も書かれていた……。

光夜『なんだよ……、これ……』

泥棒だった頃は、コナンの父親と引けを取らないくらいの人気者だったはずなのに……。
皆が何度も、親父に向かって『キッド!! キッド!!』と、ずっとコールをしていたのに……。

その内容を見た瞬間、自分でも何故か、親父と一緒にいる事が恐く

感じて……。
いつか自分にも、こういう人達の魔の手が伸びてくるのではないかと感じて……。

それでいつの間にか、自分は好きだった親父から離れてた……。

本当は今まで通り、一緒にいたいのに……。
互いにまたマジックを見せ合って、笑い合っていたいのに……。

それなのに……。

それなのに俺は……。

コナン「なあ……、光夜……」

光夜「……？」

コナン「快斗さんがお前に本当のことを話してから、お前との接し方、変わっちゃったか？」

光夜「えっ……？」

コナン「その事話してから、光夜に優しくなり過ぎたか？ 距離を置くようになったかって、こっちは訊いてんだよ」

そうコナンに言われて、光夜も一週間前の記憶を辿ってみる。

いつもと同じ挨拶……。

いつもと同じ口癖……。

いつもと同じ問いかけ……。

マジックショーをやった時の思い出話は、こちらは一方的に耳を伏せていた。

それでも親父は、ずっと母さんにその話を続けてて……。

このパーティーの時も、説明は皆で話し合って決めようとして……俺だけがその場を離れて……。

コナン「何も変わってないだろっ!? むしろ変わっちゃったのは……、光夜……。お前の方だろ!? そうだろっ!?!」
光夜「!」

コナンは全ての感情が爆発したかのように、光夜の襟元を掴み上げると、自分の顔を光夜の顔の近くにまで近付け、さらに激しく怒鳴った。

コナン「なんで分からねんだよ……。快斗さんは……、光夜の望む、昔のままの父親でいたいから、だから何も変わらずにいるんだよ!! お前が『自分だけが快斗さんに特別視されてほしくない』と、そう望んでると分かり切ってるから……。だからあえてそうしてるんだよ! なのに……。なのにお前の中じゃあ、まだ快斗さんは『犯罪者』なのか!? ただの『泥棒』なのかよ!! どうなんだ、光夜っ!!」

光夜の頭の中に、自分の色々な想いが流れ回った。

今自分が、何を望んでいるのか……。

本当は、どうしたいのか……。

自分は本当に、親父の事が嫌いなのか……。
それとも、変わらずに大好きなのか……。

本当の自分は……。何処にいるのか……。

コナン「答えるよ・・・、光夜・・・」

コナンがゆっくりと襟元を掴んでいた手を放す。

ようやく解放された光夜は、右手で目元をゴシゴシと拭くと、そつと一階へと続く階段を見つめる。

そして正面を向き直った光夜は、コナンの顔を見つめながら、小さく口を開いた。

光夜「・・・ごめん・・・、コナン・・・。・・・俺・・・、どうかしてたんだ・・・！」

そう言うや否や一階に向かって階段を駆け降りる光夜を、コナンは一瞬目を見開きながら驚いていたが、やがてその顔が、笑顔に変わった・・・。

40・本当に思っていること（後書き）

どーも ミ

ついこの間まで、排水溝の酷い悪臭に悩まされていた
KIDでーす！！

コナン

「また今回もワケ分かんねえ一文で始まったよ……。今度はなん
だ？」

KID

事の始まりは9月30日。

ややキッチン付近の排水溝がやたらめつたら臭くて……。

（しかもドブみたいな臭い……）

最初は、一昨日作ったイカそうめんの腸はらわたとかを誤って流してしまっ
たと思い「かんたん洗 丸」を入れてみたけど効果ナシ！
次の日も入れてみたけど効果ナシ！

それで水道屋に問い合わせしてみたところ……。

「臭いは普通、水が貼られる事によって、臭いの蓋になるんですけど……。
このところ、雨が多かったでしょう？ 雨が多いと、津
波の後みたいに水がひやがっちゃうんですよ。ですから、バケツ3
杯分くらいの水を一気に流して下さい。そうすると、水が貼られま
すから」

と言われてやってみたものの、やはり効果ナシ！
(しかも二回もやったんだぜ!? これ!)

快斗

「それ……。本当に排水溝が原因？」

K I D

おっ！ いいトコ突いた！

実は、排水溝の丁度斜め上の段差のところに乗っけてた玉ねぎだった……。
原因……。

(5日にカレー作る時に気が付いて……)

コナン・快斗

ズベツッ……。

K I D

しかし、よくテレビとかで

『ドリアンは、臭いが玉ねぎの約10個分!! シュール(ニンシンの缶詰め)は、約100個分!!』

とかつて聞くけど、実際にそれを体験した人って、少ないですよ(えへ)。

と、長話が続いてしまったK I Dでした!

それでは
ミ

41・犯罪者の代償

いち早く下へ下りていった光夜を追いかけたコナン達は、咄嗟にパーティー会場入り口付近で立ち止まった。

というのも、勢いよく走り出したはずの光夜が、どういっわけかパーティー会場の中へ入ろうとしなかったのである。

別に快斗が中にいなかったわけではない。

現に快斗はパーティー会場の中で、やや暗い表情を浮かべたままこちらに背を向けていたが、ちゃんと中には居た。

そしてその正面には新一と服部の姿がある。

快斗を説得しているのか、はたまた励まそうとしているのか、何やら色々快斗に言っているようではあったが、快斗はその全てを聴き流していた。

完全に心ここにあらず状態である……。

そしてそんな中の様子を窺って、一步だけ後ろに下がってしまう光夜……。

決意を決めてみても、やはりいざ中に入るとなると『恐怖心』で足が止まってしまおうようだ。

コナン・平矢「えいっ！」

光夜「えっ……？ おわっ……！」

ドンッ！

再び後ろに下がりそうになった光夜の体を、コナンと平矢は同時に押した。

そんな二人の行動に半分キレかかりそうになった光夜だったが、もう今はそれどころではない……。

少し前の方に立っていた快斗が、光夜の存在に気が付き、こちらに視線を向けたのだ。

一方の新一達も、すぐに今の場の状況を読んで、あえて快斗から離れた。

そんな周りの対応に、快斗は新一達を。

光夜はコナン達の方に視線を向けた後で、互いに前の方を向き直る。

が、ここからの沈黙は、途轍もなく長いものだった。

互いに何から切り出そうかと、全く以て用意していなかった言葉に悩む。

長く考え込んだ末、先に口を開いたのは、光夜の方だった……。

光夜「どうして……、泥棒なんかになったんだよ……」

快斗「えっ……?」

光夜「他にも方法なんて……。いくらでもあつたんじゃないのかよ……」

光夜が最初に問い掛けたのは、快斗が真実を警察に話さず、泥棒になる道を選んだ理由。

結局この答えを聞く前に、光夜は自分の部屋に引き籠ってしまっていた。

だから聞いていないのだ。

どうして『怪盗キッド』になる方向を選んだのか……。

どうして警察に……。

話そうとしなかったのかを……。

快斗「いいや……。俺には、こうするしかなかったんだ……。

誰も俺のこの問題には巻き込ませたくなかったし、誰かを目の前で亡くすようなマネはもう懲り懲りで……。だからと言って、警察の力だけに全てを任せて、こっちはただ犯人が捕まるのを祈る他ないっていうのも……。こっちからしたら情けないし、悔しさだけしかない。そんな想いをするのなら、こっちが犯人を突き止めたかったんだ……。真実も一緒に……。」

つまり……。

黒羽家内での問題だったから、他には誰も入ってほしくなかったということか……。

そして、父親が何故『怪盗キッド』になったのか、その理由も知らぬまま、分からぬまま、全てを投げ出すのも嫌で……。それで自ら泥棒に……。

快斗「……。それに……。」

光夜「……。？ それに……？」

途中で途切れた快斗の声に、光夜が疑問の表情で快斗の言葉を繰り返す。

快斗は一瞬口を固く閉じたかと思うと、光夜に悲しげな笑みを浮かべながら、ふっと上を向いた。

快斗「親父を……。今の俺のように、周りの人間に『犯罪者』なんて……。呼ばれてほしくなかった……。その事がきっかけで、

母さんや寺井ちゃんとも、引き裂かれなくなかった……。だから、俺一人で、全てを解決しようとしたんだ。それがどんなに辛いことでも、大変なことだったとしても……」

光夜「!……………」

この時光夜は初めて、快斗があの手紙を読んだことを知っていたのだと気が付いた。

きつとちゃんとゴミ箱の奥に捨てた筈の手紙を、偶然にも父さんが母さんのどちらかが見つけて、その事を自分がない間に話し合っていたのだろう。

だから今、あんな事を言ったんだ……。

『今の俺のように』と……。

快斗は一旦話し終わって瞼を閉じると、ゆっくりと光夜の前の方にしゃがみ込んだ。

互いの視線が同じ高さで止まる。

快斗「いつかは、言わなくちゃいけないと思ってたけど、中々言い出せなくて……。だけど俺の親父みたいに、結局本当の事を言えないまま一生終わるっていうのは、どうしても避けたくて……。それで……。それでお前に、全部を教えただ……。」「

小さく笑みを混ぜながら言った快斗だったが、途中からはその表情を保つ事も忘れ、視線を下の方へと移してしまった。

そんな快斗の姿に対して何も言わず、光夜はただただ快斗の言葉を無言で聞く。

快斗「『絶対にこんなこと言ったら、お前に嫌われるだろうなあ』」

つて、予測はしてた……。それでも、犯罪者だったことは隠しちやいけないと思ってさ……」

光夜「……」

快斗「だけど……、ごめんな、光夜……。こんな人間が、お前の父親で……。勝手にお前の人生に、泥塗るような人間でさ……」

快斗はそう光夜に言うと、一気にその場に立ち上がり、背を向ける。その行動に、光夜もやや戸惑いの表情を浮かべていた。

快斗「俺のことは『父親』だと思わないでくれてもいい……。俺はそれでも構わないし、お前が望むというのなら、極力顔も合わせないようにする……。だから……」

違う……。

快斗は……。取り違えているのだ……。

自分がいなくなった方が、光夜が喜ぶと……。そうした方が、光夜の為にもなると……。

自分の存在が……。光夜の中で邪魔になっていると……。

光夜「じゃあ……。親父も死ぬの？俺や母さん達を置いて……？」

快斗（えっ……？）

その光夜の声に、快斗は驚いたようにこちらを振り返った。そんな快斗に、再度光夜が問い掛ける。

光夜「親父も・・・俺のじいちゃんみたいに死ぬの？ また・・・母さんの前からいなくなるの？」

光夜の目から、何の前触れもなく涙が零れた。

それでも光夜は、その涙を拭こうともせず、快斗を見つめる。

そんな光夜の姿に、快斗は慌てて先程と同じようにしゃがみ込み、光夜の両肩に手を乗せながら、首を横に振った。

快斗「違う・・・！ ただ俺は、自分がいつか死ぬ前に、お前に本当の事を知ってほしくて、それで話したただけだ！ 大体・・・お前と青子を置いて、先に逝けるわけ」

光夜「だったら・・・、だったらそんなこと言うなよ！！ 今の話聞いたらまるで・・・、まるで親父が死んじまうみたいじゃないか！！」

またあの事件に巻き込まれて・・・。
あの頃に巻き込まれて・・・。

ここにいる全員が、生死を彷徨った時のように・・・。

光夜「俺・・・！ 親父のこと嫌ってなんかいない！！ 大好きだよ・・・。今でも尊敬してるし、マジックがすごく上手くて、優しい親父のことが・・・、今でも大好きだよ！ ただ・・・。時々怖かったんだ・・・。俺も親父みたいに、周りに罵られるんじゃないかって・・・。全部冷たく、引き離されるんじゃないかって・・・。そう思うと怖くて・・・、親父と一緒にいるのが怖くて・・・。それで気が付いたら、引き離してただけなんだ・・・！」

快斗「光夜……、お前……」

嫌ってなんかいない……。

『会いたくない』なんて思っていない……。

ただ、泥棒だった事を秘密にされてたこと……。

周りに色々言われたりするのが、ただ怖くて、許せなかったただけなんだ……。

タダソレダケナノニ……。

光夜「俺はいいよ……。親父や母さんと、ずっとこのまま……。このまま一緒に暮らせればそれでいい……。黒羽快斗の……。息子のままでいいから……。だから……。だからいなくならないで……。邪魔な人間だなんて、自分のことそう思わないでよ！」

改めて聞いた息子の悲痛な叫びに、快斗はただ驚くばかりだった。

全く違う取り方をしてたんだ……。

本当の光夜の望んでいた事なんて、分からないまま……。

自分はずっと……。

快斗は静かに、泣きはらした光夜に視線をそっと合わせ、問い掛けた。

自分が望んでいたことが、間違いだったのかどうかを、調べる為に・

・・・。

快斗「いいのか？ 光夜……。俺が犯罪者でも？ お前の人生が、俺のせいで汚されても……。それでも……。いいのか……。？」
光夜「うん……。親父が今まで通り……。俺や母さん達と一緒にいてくれるんなら……。何処にもいなくならないなら……。俺はいい……。いいよ……。」
もうそれ以外に、言葉なんていらなかった……。

快斗はその言葉を聞いた瞬間、光夜を力一杯に抱き締めた。
あまりにも突然の出来事に、光夜は涙を吹っ飛ばせ、動かせる両腕を快斗の背中の上でジタバタさせる。

光夜「おつ……。親父っ！！ 苦しいよ！ いくらなんでもそんなに抱き締める必要……。」
と、そこまで言って目を泳がせていた光夜は、ふっと快斗の体が小刻みに震えていることに気が付いた。
それと共に嗚咽のような声も、微かにだが聞こえてくる。

光夜「親父……。？」

快斗「……。光夜……。本当にごめん……。ごめんな、光夜……。」

まるで囁くかのように、快斗が何度もそう光夜に言葉を発した。
抱き締めているせいで顔は見えなかったが、それでも光夜には、快斗の気持ちに手が取るように分かった。

光夜（仲直り……。出来たんだよな……）

光夜の顔に、満足げな笑みと共に涙が一筋零れる。

そんな二人の様子を遠くで見つめていた新一は、隣に立っていたコナンに対して、静かに口を開く。

新一「探偵は・・・、ただ事件を解くだけじゃ駄目なんだ・・・。その後の犯人のことや、その事件に関わった遺族のことも考えて、それで事件に食って掛からなければならぬ・・・。たとえ事件そのものが終わったとしても、その事件に関わった人達のほとんどは何年・・・。何十年って、その人達の記憶に残り続ける・・・。それが完全になくなるまで、事件は決して終わつたとはいえない。そうなる事を理解した上で、俺達は事件を解いてるんだ・・・。」

新一の視線は、いつになくキツイものだった。
きつと自分自身の中で、今までどうすることも出来なかった事件の事を思い出しているのだろう。

自分が『コナン』だった頃の、無力だった事件の事を・・・。
新一「今の内によく見ておけ・・・。もしお前が本当に『探偵になりたい』と言うのなら、この光景を目に焼き付けておけ・・・。」
新一はそう言い残すと、静かにその場を後にする。

コナン（父さん・・・。ようやくちゃんと分かったよ・・・。どうして父さんが、このゲームを決行させたのが・・・。ようやく・・・。）

こうして、途轍もなく長い一夜は、無事に更けていった・・・。

41・犯罪者の代償（後書き）

どーも

ようやく『天空の難破船』のDVDを借りてきた
KIDでーす！！

いやゝ、にしても凄い人気！！
借りられたのは今週の火曜日で、しかも朝の10時から待ち伏せてようやく手に入りました！

（50分も待ったかいがありました　（*^^^）Vイエイ！）

コナン

「でもテレビとかで放送されると、あれやこれやカットされてるんだろーな・・・」

快斗

「ああー・・・。逆に、映画とDVDで見てない人とかって、放送された時に『今回は自棄にコナンの紹介が省かれてるなあ』とかって思うんじゃない？　元々省かれてるのに（笑）」

コナン・KID

「「確かにー・・・。」」

KID

ちなみにこちらは、DVDを購入予約しました！

（Aazoで）

さて来週は・・・。

『名探偵コナン特別編 工藤コナンの事件簿 パーティー会場殺人事件』最終回です！！

最後は日付も変わりました・・・(^ー^;)でもって暗かった雰囲気は、もう当然残ってはいなくて・・・。

と言った感じです

コナン・快斗

「分かるかよ！！んなモン！！」

KID

とりあえず、最後までお付き合いください
それでは ミ

42・父の言葉（前書き）

今回は後書きの方もチェック

42・父の言葉

翌朝 午前10時27分 二階 船内カフェ「SEA」。

翌朝には、まるで昨日の夜の出来事が嘘だったかのように、皆がカフェテリアに集合していた。

ちなみにここは、昨日コナン達が座っていた場所でもあり、外の方のテーブルは、光夜が快斗と大喧嘩をして、一時的に留まっていた場所だ。

今日の4時頃にとある島に到着し、今日はそこでしばし遊んだあと船に戻り、明日にはここを出て米花港に向かう予定だ。

そのせいもあってなのか、女子軍はやたらめったら準備がよく、今日の着替えの時点でもう水着を中に着ている。

時間になったら島に下りて、すぐに泳ぐ気なのだろう。

そう思いながら周りを見渡してみると、所々から色々な会話が飛びかっていた。

紅葉「せやけどホンマに、昨日はほんもんみたいな事件サプライズやったなあ〜」

和葉「そう言えば平次……。あの最後の演技、ちよつと失敗やなかったか?」

服部「ああ?」

和葉「もうちよつと感情入れて怒鳴った方がよかつたんちゃう?」

平矢「せやせや。途中棒読みみたいになつたし……」

服部「なんやと、ゴラツ!! お前途中まで引つ掛かってたんとちやうかいっ!! ああっ!?!」

平矢「だって俺は粗方コナンから聞いたつたし……、全部嘘やと思つてると、ホンマに演技足りんと思つわ」

服部「あのな……。本気で俺がお前に怒鳴ったら、お前絶対にあの場で泣くやろっ!？」

平矢「大丈夫や……。いつも本気で怒鳴られとるからなっ!！」と、服部家はいつもの、終わり無き言い争いに火を付けていた。

その隣の方では、高校生となった少年探偵団達が、阿笠博士の連発ダジャレクイズにシラーっとなっている。

光彦「またその流れですか……」

元太「もっどダジャレから離れたクイズ出してくれよ。うな重絡みみたいな」

歩美「それじゃあ答え分かってるじゃない!」

博士「ハハ……。相変わらずうな重が好きなのかのぉ、元太君は……」

元太「ああ! 今でもうな重だったら何杯でもイケるぞ!」

灰原「でも……。食べ過ぎで将来、病気なんか引き起こさないようにね。博士みたいに……」

メンバー全員「……」

灰原「あら? 何か間違えたこと、言っただかしら?」

さらにその後ろの方では、海を見ながら紅茶を飲んでいる園子と蘭、そして青子の姿があった。

どうやら園子の婚約者の話に花が咲いているらしい。

実は昨日、どさくさに紛れて真との電話で『結婚しよう』と言われたのだそうだ。

そのおかげで、園子は今朝から舞い上がり放題なのである。

園子「式、どこであげようかなあ。あああ! もう今から迷っちゃう!」

蘭「もう。園子ったら……」

青子「その前に、家族の人に知らせる方が先だと思っけど・・・」
園子「あっ・・・、そうよね・・・。ねえ！ 式の時、蘭も青子ちゃん達も絶対に来てね！ 和葉ちゃん達はもう誘ってるから」
蘭「勿論」

青子「分かってるよ。日時が決まったら、その日に無理矢理でも、快斗に日程を空けさせてもらうから」
と、青子は悪戯染みた表情を浮かべて、舌を『ペッ』と出して笑った。

それに釣られて園子や蘭もクスリツと笑い出す。

そしてその左奥の方では、蘭と新一の両親が固まって、コーヒーやら紅茶やらを飲んでいた。

話している内容は勿論、工藤夫妻がこの船に乗っていたこと。

英理「でも驚いたわ。まさか変装して、この船に乗り込んでいただなんて・・・」

小五郎「まっ、新一が顔も知らない人間を受け付け人に回すとは思わなかったがな」

有希子「フッフ。展開が読める人にはバレバレね。実は、丁度4日くらい前に日本こっに戻ってきてただけど・・・。そしたらこれ、開口一番にいきなり頼まれたのよ？ 『おかえり』の一言も言わずに・・・」

優作「いやいや、いきなり息子にあんなことを頼まれた時は驚きましたよ。ハハハ」

そう話す二人の脳裏に、米花町に帰って来た時の新一の表情が浮かぶ。

新一『あれ、母さん・・・』

有希子『ただいま、新ちゃん。元気にしてた？』

新一『……………そうだ！　ちよつと、父さんと母さんに頼みたい事があるんだけど……………』
優作『ん？　頼みたいこと……………？』
新一『ああ。ちよつとコナンともう一人絡みでな……………どうしても協力してほしんだ』

有希子『船を借りてもいいか？』なんて聞いてくるから、私達も飛び入りで参加しようと思うと帰ってきたら、まさか……………。船に乗る代わりに新ちゃんのサプライズで変装する嵌めになるだなんて」

英理「予想外よね？　フフフ」

有希子「本当よ。でも、どうやら上手くいったみたいね。あの二人を見てると……………」

そう口にした有希子の視線の先には、直子に猛特訓中のマジックを披露している、光夜の姿があった。

いつも父親がマジックをやった後に、率先して『俺も！』と言ってやっていたマジック……………。

昨日は一週間前の事もあり、一切として、マジックを行おうとしなかった光夜の手が、初めて船の上で輝いていた。

光夜「Three……………Two……………One……………！」

『ポンツ』という音をたてて、一瞬にして何もなかった手からトラップが飛び出す。

そのマジックに、直子が『わっー』と、何とも驚いたような声を発した。

直子「ねえ！　もと他にもやって！」

光夜「えっ？　ったく、しょうがねえな……………。じゃあ、まだ練習

中のヤツを・・・」

と思つて、ポケットに入れていた白いハンカチを光夜の片手に被せて、再び数を数える。

ちなみにこちらは、ただ単にハトが2羽だけ飛び出すマジックだったのだが・・・。

光夜「Three・・・Two・・・One・・・」

ボンツ！！

光夜「おわっ!?!」

何やら派手な音がしたかと思えば、予想していたハトは5羽くらい出てくるし、紙吹雪やらリボンやら、こちらが用意した覚えのないモノが大量に出てくる。

さらにその光夜の手の下には、自分よりも大きな手のひらが・・・。

光夜「親父!?!」

快斗「悪戯もマジシャンが好き好むもの、ってね」と言つて走り出す快斗に、光夜も黙っちゃ置けない。

直子「追いかけたら?」

光夜「言われなくとも・・・! あっ、ちよっ・・・! 待て、親父!?!」

快斗「『待て』と言われて待つ人間はいないぜ? 光夜」

光夜「っ!! 絶対に捕まえてやる!!」

快斗「『捕まえる』? 俺は元泥棒だぜ?」

光夜「『元』の話だろっ!!」

そう言つて追いかけ合う二人の様子を、新一はコナンと一緒に手摺りに凭れながら、ただただジト目で見つめていた。

ジト目になっていた理由に関しては……。

新一「ったく……。朝っぱらから何処もかしこも喧しいな……。昨日皆寝不足じゃあなかつたのかよ」

コナン「ギリギリまで、皆寝てたしね……」

そうそつぽを向いて、コナンは答えた。

ちなみにコナンが無意識の内に見つめていた先にいたのは、幼馴染みのあの蓮だ。

長い髪の毛を潮風になびかせ、何処までも透き通っている海を見つめている。

青系のロングワンピースが、何とも今の海と空の色に合っていた。

そして風になびかれながらふつと目を閉じる蓮の姿に、思わず頬が赤くなる。

新一「蓮ちゃん、前に見た時よりも綺麗になってきたよな……。高校生くらいになったら、どんな姿になるか楽しみだな。なあ、コナン」

コナン「べつ……。別に楽しみじゃ……。！」

新一「あれ？ 顔紅くなつてねえか？」

コナン「気のせいだって！ 夕日だよ！ 夕日!!！」

新一「おい……。今『午前』だぞ？ 言い訳に使うんなら、ちゃんと時間帯確認してからにしろ……」

コナン「〜っ!!！」

今の出来事で直の事、コナンは新一から視線を反らした。ついでに蓮の方からも視線を反らす。

どれくらいそうしていただろう……。

コナンはふつと、隣にずつと手摺りに寄り掛かっていた新一に対し

て、視線を合わせずに言った。

コナン「昨日の父さんが作ってくれたゲーム……。結構楽しかったよ……」

見てはいないけれど、一瞬新一が驚いたような表情を浮かべているのは、気配で何となく気が付いた。

でもそれは本当に一瞬で、どうやら新一は、すぐに満足げな表情に変えてしまったようだ。

微かに『フツ……』という笑い声が聞こえてくる。

コナン「3番目の暗号は、平次さんが作ったんでしょ？ でなくちゃ、関西の方の天気予報なんて、あの暗号に入れるわけがない……。そしてそれを入れたと言うことは、平次達と一緒に暗号を解いてほしかったってこと。僕なら、必ずそのサプライズを聞いて、皆にそれを話す。そう踏んだんでしょ？」

新一「……勿論」

コナン「そして皆を巻き込めば、必然的に光夜もその中に入る……」

新一「……」

コナン「本当は父さん……。光夜と快斗さんを仲直りさせたくてこのゲームを考えたんじゃない？」

コナンが新一の方を向いてそう問い掛けると、新一ははしやぎ回っている光夜と快斗を見て、静かに『ああ……。』と、口を開いた。

新一「その通りさ……。最初にゲームの事を話し合おうとした時に、快斗が全然元気がなくて、気になって事情を聞いたんだ。それで、どうにか光夜君が、今快斗の事をどう思っているのか、それも一緒に調べようと思ってな……」

コナン「それでワザと、暗号の中に『白い鳥』という『キッド』を意味する単語を入れたり、快斗さんを被害者役にしたりした……」

そういうことでしょ？」

新一「ああ……。もつとも……。仲直りのきつかけは、お前らのおかげだったみたいだけどな……。あっ、そう言えばお前……。なんで計画者の中に博士がいるって分かったんだ？ 何もお前には話していなかったはずだけど……」

そう新一が気になって問い掛けると、コナンはふつと宙を仰いだ。確か気が付いた根源は……。

コナン「計画者しか知らない事を、博士が言ったからだよ。まだ『殺人』だと決まったわけじゃないのに『事件の捜査』だなんて言ってたし、それにこのサブライズの事を電話ではなくて、何処かに集まって話し合うのだとしたら、博士の家は持つて来い……」

新一「なるほど。ったく……。あれほど博士に『注意しろ』って、言っておいたのに……。だけどお前……。よくあのダイニング・メッセージが分かったな。あれは快斗が本番に考えたんだけど、結構子供相手には難しかっただろ？」

コナン「そうでもないよ……。ずっと考えてれば、すぐに分かる……」

本当は凄く難しかったけど、諦めることはなかった……。

諦めるのは大っ嫌いだし、それに……。

その時にはいつも、自分で呪文のように覚えていた言葉がある……。

諦めないように……。止めないようにする為に、ずっと言っていた呪文……。

コナン「『トウルイット。ワンオールウエーズ』でしょ？」
新一「へっ？」

あまりにも片言過ぎる発音に、最初にその言葉を聞いた快斗と同様に、新一もポカンとした表情を浮かべた。

コナン「ねえ？ 父さん。これ、イギリス旅行に行ってた時に教えてもらったんだけどさあ……。日本語訳でなんて言うの？ まだ僕聞いてないんだけど……」

新一「……。わ……。忘れたよ、んなモン……」
コナン「ええええーっ!? 『絶対に忘れるな』って言うってた父さんが!? 嘘だあ……」

新一「……。ホント……」
新一がジト目でそう答えている姿を見て、思わずコナンは海の方に体を向け『はあー』と溜息を吐いた。

『絶対に忘れるな。大切な言葉なんだからな』と言われて覚えていたのに……。

まさか肝心の父親がソレを忘れていたとは……。

蘭「新一ーっ!! 何してるのー? 早く海に入ろうよーっ!!」

蓮「コナンも早くーっ!! 何そこでたそがれてるのー?」

コナン「呆れてんだよっ!!」

そう怒鳴りながらも、笑顔で蓮達と共に島へ下りるコナンを見て、新一は苦笑した。

おい、未来の名探偵……。

お前の発音『若干』と言うか、かなり間違ってたぞ？

俺があの時お前に言った言葉は……。

『Truths is one

always』

《真実はいつも一つ》

だぜ？

もっとも今のお前には、まだ少し早い言葉かもしれないけど……。

376

蘭「新一ーっ！ 何してるのよ、早く！」

新一「えっ？ あ、ああ！」

新一は満面の笑みを浮かべながら、やや急ぎ足で、船を下りた……。

42・父の言葉(後書き)

どーも K I Dでーす!!

無事! 『工藤コナン』の連載、終了いたしましたー!!

メンバー全員「イエーイ!!」

K I D

喜んではいますが、内心寂しいです……。
本当に寂しです……。

快斗

「でももしかしたら、また別版で書いたりするかもしれねえんだろ
?」

K I D

出来たらね(笑)

コナン

「早く出番こねえかなあ……」

快斗

「なんだよ。十分お前は出番あんじゃない。(俺みたいに……)」

コナン

「そうか？ んじゃ、このお茶菓子だけ貰って失礼……」
と言って、茶菓子を持って帰るコナン。

快斗

「あれ？ なんかアイツ、今日帰るの早くね？」

KID

だね……（。ー。）

ああ、新連載の件ですが、今回はある番組とコラボ的なものを出そうかと思っております

快斗

「『リセット』以来だな……」

バタンツ！

コナン

「遅れて悪い！ 電車が引っ掛かって……」

快斗

「？ あれ？ お前さつき帰ったろ？」

コナン

「はっ？ 帰ってねえけど……？ ってか、今来たんだけど？」

快斗

「????? あり？」

K I D

それでは失礼 ミ

コナン

「！！ あんニヤロ〜！！ おい、コナン！！」 工藤コナンの方
「ちゃっかり父さんの茶菓子、持って帰ってんじゃねえーっ！！」
（激怒）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4018k/>

名探偵コナン番外編 工藤コナンの事件簿 パーティー会場殺人事件

2011年1月23日14時26分発行